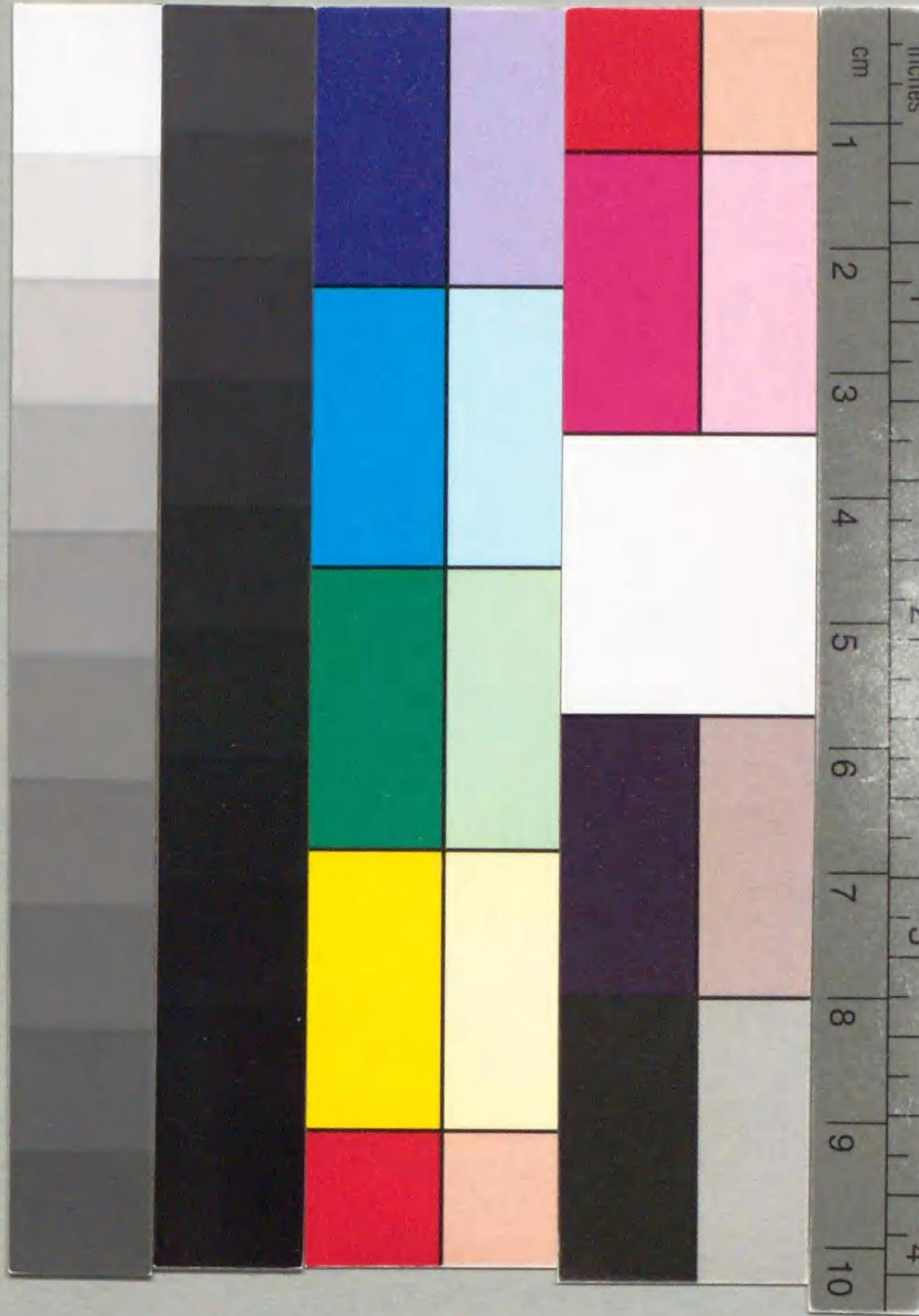


918.6
Ta977k



00298632



一般資料

著 袋 花 山 田

集 全 袋 花

卷 十 第

戀の子鈴・芽いし新・雪残

會 行 刊 集 全 袋 花

著 袋 花 山 田

集 全 袋 花

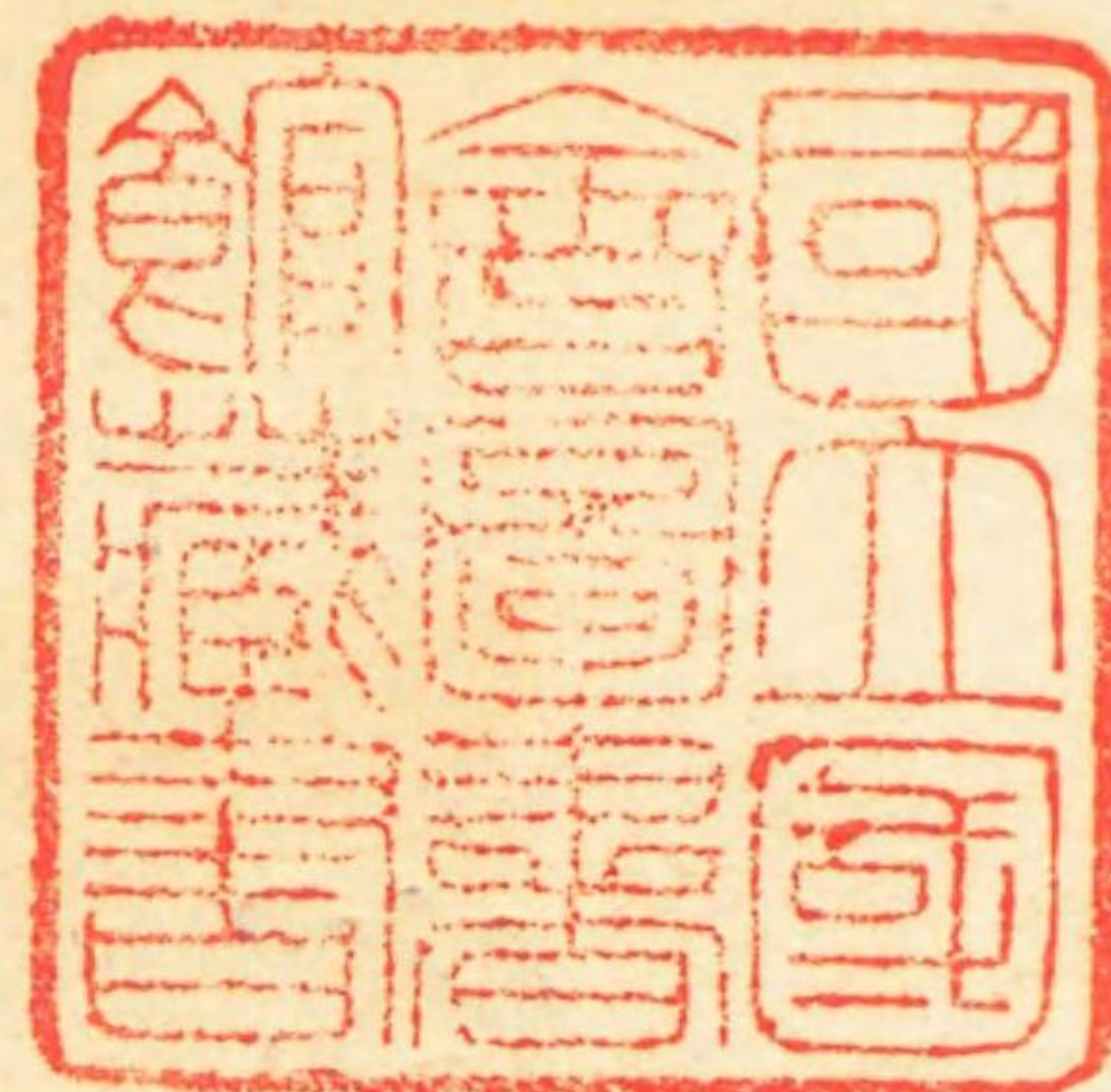
卷 十 第

戀の子鈴・芽いし新・雪残

會 行 刊 集 全 袋 花



(月二十年九十三治明)(左)氏村藤崎島と者著



293632

花袋全集 第十卷目次

序 文(徳田秋聲)

殘雪……………一

新しい芽……………二九一

鈴子の戀……………六〇三

解 説(宇野浩二)……………七四五

目次

序 文

——驚くべき事實——

徳 田 秋 聲

明治末期に勃興した自然主義が、何如なる勢ひで時代を風靡して行つたかは、文學史を繙いて見ても恐らく後世には、ちよつと想像のつかないやうなものではないかと思ふ。在來の古いものを押流し、因襲や偶像を破壊し、日本に於けるレアリズムを根柢から築きあげようとした、あの熱意は今考へてみても奇蹟的である。勿論その悉くが好いとは言へない。輕佻な雷同も附和もあつたことも事實であらうが、其れにしてもあの運動の劃期的

のものであることは否めない。この自然主義の烽火をあげたものは、言ふまでもなく花袋氏の「重右衛門の最後」であり、「蒲團」であつた。素と花袋氏は希に見る美しい感情の持主で、それ以前の作品は叙情的散文詩のやうなものが多かつた。それが一躍レアレズムの急先鋒となつたのは、花袋氏自身の文學的生涯から言つても、驚くべき事實と言はなければならぬ。自然主義文學が美しいとか、醜いとかいふことは、茲では問題にはならない。たゞこの一卷に收められた「残雪」などを見ると、生に悩みぬいた作者は、遂に唯心的宗教的境地にまで到達し、若き日の花袋氏とも亦違つた美しい靈の悶えを咏歎してゐるやうである。これは又花袋氏の仕事のうちでも、劃期的な一頂點を示したものであらう。

残

雪



残

雪

町の四つ角のところに来た。其處には乗合馬車が一臺待つてゐた。馬は既に杙につけられてあつた。

『妻沼町へはもうすぐ出ますか？』

絹物を着て幅廣の白縮緬の三尺帯をしめて巻煙草をふかして其處に立つてゐる親方らしい男に哲太は訊いた。

『もうすぐ出ます。』

かうその男は素氣なく答へた。

哲太はしかしまだ午飯を済ましてゐなかつた。もう午後二時である。馬車に乗つて了へば、猶ほその飢を抱いて残る半日を過さなければならなかつた。かれは續いて訊いた。『まだ午飯を食はんのだが、それをやる處はないでせうか。』

『急いで使つていらつしやい。待つてゐますから……』かう言つて、其男はその通の角にある飲食店

を教へた。哲太は急いで其方へと行つた。

汚ない半ば破れた大和障子——うどん蕎麥、御中食と書いた障子が其處にあつた。かれはそれを明けた。廣い混雜した厨と、大釜の湯氣の白く漲つた臺所と、膳や椀や徳利の並んだ棚と、火鉢を前にしてくはへ烟管をして亭主の坐つてゐる店とがかれの眼に映つた。『いらつしやい』と言つて迎へるものもなかつた。哲太は色の褪せた黒の外套に身をつゝんだまゝ、すぐその傍に續いた廣く打通した一間へと上つた。汚ない薄い座蒲團と火の尉になつた角火鉢とがかれの前にあつた。ところどころ焼焦げの出來てゐる疊の向うには、一方に夥しく破れた古い襖、一方に午後の日影の黄く佗しくさし込んで來てゐる窓障子が見えて、長押には、その町の持つた停車場の汽車の發着表が子供の書いたやうな拙い字で書かれて張附けられてあつた。

髪を箒のやうにして、油染みて汚れててかゝ光つた筒袖を着た二十四五の女が、客と見て、焼き落を十能に一杯入れたのを手に持つて、それがぼろ／＼滴れて落ちるのを氣にも留めず、つか／＼上つて來て、いきなりそれを哲太の前にある火鉢へとあけた。白い灰がぱつと立つた。

それにも拘らず、『おう、暖かい……』かう言つて、哲太は野の冷たい空氣に冷えた顔と手とをそれに當てた。

『うどんを暖かくして大急ぎで持つて來て呉れ給へ。』

『ひもかはで好いかね。』

『何でも好い。』

女が向うに行つた後を、かれは手を暖かい火の上に翳しながら、靜かに窓障子にさし込んで來てゐる午後の日影に見入つた。靜かな心が今ゆくりなくかれを領した。孤獨が、孤獨のさびしい中にもをりをり染み込んで來る快樂に似た靜けさが……。

それは廣い長い辛い人生の艱難の中にをりをり現はれて來る靜けさであつた。何等の束縛をも、何等の對照をも、又何等の羈絆をも持つてゐないやうな、飽まで自らをも捨て、世間とも離れ、センチメンタルな情緒とも離れ、全く我一人を潤い空間に見出したやうな靜けさであつた。かれは今朝立つて來た山合の温泉のある村を考へた。そこから出て來る松原の中の路を考へた。そこに墓があつた。苔の蒸した丸い昔の墓もあれば、缺けて倒れて長い年月をその儘に過したやうな墓もあつた。かれはその前に長い間立盡した。何うしてさうした墓があればほど深くかれの心を惹きつけたであらうか、また何うしてあれほどなつかしくかれの心に感じられたであらうか、かれはその多い墓を何うしても冷めたい石と思ふことが出來なかつた。かれは哲學も宗教も艱難も快樂も何も彼も其處に横つてゐるやうな氣がした。

かれは自分の魂が其處に續いてゐるやうな氣がした。未知に對する恐怖、偶然に襲つて來る黒いもの手、さういふ風にかれには何うしても死が考へられなかつた。遠い過去にもこの自分が生きて呼吸し

てゐると同じやうに、無窮の未來にも矢張この杓があるに相違ないと思つた。

何うしてさういふ心持が突然にかれを襲つて來たのか、かれはまたそこで、火に手を當てながら、蒼白い顔を仰向け加減にして凝と考へた。墓から少し來ると、松原は盡きた。そして濶い寒い野と午前の日影に明るく照された残雪の丘とがあらはれた。哲太は首を俛れて深く心の聲に聞き惚れるやうな形をして歩いた。

この今の静けさは、妙くともその心の状態の連続であつた。かれは今までに経験したことのない暖かい同情に満ちた心の漲つて溢れて來るのを感じた。

後の大和障子が明いて、客が入つて來たので空想は破れた。

ふとかれは九歳と七歳位になる二人の子供を伴れて、綿フランの黒い襟卷をした五十先の百姓が、かれの坐つてゐる前に、何の遠慮もないやうに、又は無限のなつかし味を感じてゐるやうに靜かに近寄つて來るのを見た。

『風がねえで、暖かい好い日和ですな。』

かう挨拶して、其處に積んである座蒲團を三枚自分で取つて、二枚を子供に敷かせ一枚を自分で敷いて坐つて、大きな手をその火鉢の上に翳した。

すぐれた彫刻にでも見るやうな深い艱難と労働との刻まれてある皺の多い顔を哲太はそこに發見した。

た。

『本當に好い天氣ですな。』

『風があつては、此處等ももう寒くつてな……とても出ても歩けねえ。』

『本當ですな。關東の空つ風は堪りませんな。』

やがてお誂へを聞きに來たさつきの女を其處に置いて、

『お前ら、何を喰ふ？ 細いのか？ 太いのか？』

『細いのが好いや。』

『お前は？』

『細いのが好いや。』

『矢張、細いのが好いか。』

かう言つて百姓は女に饅飩とひもかはとを注文した。

子供を大勢持つてゐる哲太には、その言葉の中に深い共鳴を感じずには居られなかつた。自分の艱難と辛勞とは、直にその農夫の體と心とに見出すことが出来るやうな氣がした。と、不思議にも、その皺の深い顔が、その太い健かな手が堪らなくなつて來るのを感じた。

大きい健かな皺だらけの手！ そこに人生の艱難があるのである。人間として生れて來たために、人

間の經なければならぬあらゆる苦痛と辛勞と歡樂とがそこにあるのである。その手は曾ては幼い小さな手であつた。また野に出て肥料をも平氣でつかむやうな手であつた。世間を渡るにつけての武器としての手であつた。否、かうした百姓でも、矢張りその手は女の手を握つたことがあるに相違なかつた。

哲太はその健かな大きな手に比べて、自分の手の蒼白く滑かに小さいのを見た。それも矢張りろくろな境を経て來た手ではないか。説明することの出來ないほど複雑した心理を経て來た手ではないか。かれはその太い皺だらけの手に握手したくなつた。

百姓はその手を火の上に翳して、をりくそれを揉むやうにした。

馬車は眞直な路を駛つた。時々けたましい喇叭の音をあたりに響かせながら、又はをりく立留つて路を歩いてゐる近所の百姓や上さんを載せながら……。そしてその背景を廣い野が、畠が、林が塗つた。更に遠く山の雪が銀のやうに美しくきらきらと日に輝いた。

珊瑚樹の葉の厚い高い垣があつたり、霜や雪にしもけた菜の畑があつたり、日當りの暖かい縁に老婆が後向きになつて糸を繰つてゐたりした。林の影になつたところはぐちやくした泥濘で、林の中の笹は半ば残つて雪に埋められてゐた。

西風の吹く日には、この街道などは殆ど顔も向けられぬやうに、手も足もちぎるやうに寒さを覺ゆ

るのが常であるが、今日は幸ひに穩かた、暖かた、馬車の周圍の幔幕を半以上捲つて、美しい山の雪と相對することが出來た。馬車の馬は歩みも次第に緩くなつて行つた。馭者がその近くにゐる客と土地の話をしてゐるのに引かへて、車掌はほつと呼吸をついたといふやうに、後の臺に立ちながら、こつくりこつくりと短い僅な假睡を貪つた。そして時々吃驚したやうに大きく眼を明いてあたりを見廻した。

哲太にはさうした車掌や客達の生活が眼に見えるやうな氣がした。烈しい勞働、僅かばかりの報酬、一日の仕事を終つてからの酒、かれ等にも矢張りその手の届くところに歡樂の相手があるて、愛慾の苦痛もあれば、孤獨のさびしさもあるのであつた。父母も居れば兄弟もあるのであつた。もう少し好い生活に向つての希望と絶望とが纏れ合ひ重なり合つてゐるのであつた。かれは不思議な氣がした。さうした生活と言ふものが、其處にも此處にも、外面は平和に、内面は烈しい巴渦を卷いて、そして猶ほその底に男と女の世界が誰にも深く色濃く横はつてゐるのが不思議であつた。ふと哲太は自分のすぐ前に腰をかけるる荒れた唇と半壞れた丸髻とを持つた二十八九の色の褪せた女を見た。かの女は大きな風呂敷包を膝の上に置いてゐるが、その顔の一つの皺にも、乃至はその眼の一瞬のかゝやきにも、哲太は矢張り張その人生と生活と男女の世界とを發見することが出來た。この女も矢張り辛勞の世間に愛慾の羈絆に日夜悶えてゐるに相違なかつた。……哲太は自分が辛く辛くなつて來るのを覺えた。何も彼も破壞して下ひたいやうな激情がまた總身を熱くした。

かれはそれから逃れるやうにして日影に輝く遠い山の雪を仰いだ。

ある光景がほつかりと浮んで来た。汽車は非常汽笛を鳴らして停車した。窓からは顔がいくつも出た。そこは踏切であつた。残雪が桑の畠を白く見せてゐた。矢張窓から顔を出したかれの眼には、汚い年老いた百姓の丸い筒袖姿の男が、自ら死なうとしてレイルに飛び込んだ男が、二三人の人達に頬に押されてゐるのが映つた。それは二三日前の午前のことであつた。やがて汽車は動き出した。と、其處に入つて来た若い車掌は、『もうあんな年をして、それで、いふ不心得をするんですから……。え、無論、鐵道規則に問はれる筈です。それに、酒の匂ひがぶん／＼してゐましたよ。』かう言つて笑つた。車中の人達も同じやうにして笑つた。それにも拘らず、かれには、悲惨な縮圖を、貧窮の縮圖を眼のあたり見せられたやうな氣がして、その汚い筒袖の丸い姿が、いつまでもかれの眼と心とから離れなかつた。昨夜も山合のさびしい温泉場で、獨り深くその光景を頭に描いた。それがまた今浮んで来た……。その惨めさは矢張自分の惨めさではないか。同じ人間である自分の惨めさではないか。否、人類總ての間に横つてゐる惨めさではないか。

かうした思ひを載せて馬車は時には留り、時には駛つて、残雪の野を無關心に唯妻沼町の方へと向つて進んで行つた。後の臺のところ、車掌は矢張こつくり／＼とやつてゐた。

利根川の少し手前で、馬車を見捨てた哲太は、一番先に、街道の角のところにある小さな店で煙草を

買った。そして其處の上さんにある寺の所在を訊いた。

『もう一二町、行つた所から右に曲るんです。少し行くと、森が見えますから、ちきわかります。』かう上さんは教へて呉れた。

『まだ、餘程ありますか。』

『なアに、四五町位なもんでさ。』

で、哲太は靜かに歩き出した。さびしい、孤獨な、薄い午後の日影がぢつと魂に染み通るといふやうな氣分である。またあらゆるものゝ過ぎ去つたあとにたまさかにやつて来るやうな靜かなさびしい氣分である。『廢都』の空氣を探る詩人ばかりが或はたまさかにかうした氣分に浸ることが出来るであらう。また艱難と辛勞、激情と苦悶、さういふものを経て来た心のみが後に到つて味ふことの出来るものであらう。かれはかれの心が、かれの魂が、路傍の筐のそよぎにも、草藪の中に透つた日影にも細かく深く織り込まれて行くやうなを感じた。

廢墟だ。すべて廢墟だ……。かう思つたかれは、歩きながらこれまで經て来た自分の生活を振返つて見るやうにした。廢墟が廢墟に續いた。光景が光景につゞいた。

そして自分は今でもその廢墟の一つをつくらうとしてゐた。かれは一つ一つそれを繰返しながら歩いた。その中でもそのつくらうとしてゐる廢墟が、一番強くかれの頭に絡み附いて来たが、かれはつとめ

てそれを押のけるやうにした。

この寺に、かれが今から訪ねて行かうとする寺に、つい一年前まで住んでゐた女は、實はかれの友人の妻であつた。名をお房と呼ばれてゐた。『お房!』かうその友人が呼んだり、『お房さん』と自分が呼んだりした頃のことか今でも歴々と眼の前に見えた。昨夜も、温泉場の静かな一間で、その涙に濡れた白い頬とアットラクチイブな眼とをかれは思ひ出した。

友人が腸チブスを病んで死んで行つた時には、かの女はまだ二十五であつた。若い美しい後家さんだつた。かれは今でもその派手な手絡をかけた丸髻姿を思ひ出すことが出来た。夫の死後、急に頼りなさを感じて、かれに縋つて來たさまをも細かく思ひ出すことが出来た。竊にはかれは『お房さん』又は『奥さん』でなしに、『お房……』と呼ぶことが出来る身であつた。哲太は若さのために、又は人間の魂を本當にまだ知り得なかつたために、又は世間の生濇い習慣の情性のために、思ひもかけない罪過を犯したことを考へた。そしてそれが何等かの形で一生ついて廻つてゐることを考へた。

世間の生濇い習慣の情性のために醸されたかれ等の罪過は、その結果としてすべて世間といふものを標準にした。世間がそれを敢てさせたと共に、世間がまたそれを壊して行つた。かれ等はその結果を世間以上に持つて行くことが出来なかつた。かれ等は涙を、悲しい涙を、併し時のためには乾いて了ふだけの涙を流して別れた。かの女はやがてかれから消えた。全くとまでは行かないまでも、九分通は消えた。か

の女には子供がなかつたので、生きてゐる中に友人がその甥を貰つて養子にして置いたが、その子をつれて——寧ろ愛慾の苦しみをその子の愛に埋めて、そしてかの女は他郷に行つた。かれは全くかの女の行方を知らなかつた。十三年の月日は忽ち経過した。今年のかの女は最早三十八である筈である。それが、今ゆくりなくかれの耳にその消息が入つて來やうとは! また、つい一年前までかういふ田舎の寺の妻として埋れて住んでゐるやうとは!

しかしかれがかうしてその廢墟を見やうとしてやつて來たのは、かの女がもう其處にゐないといふことがわかつたからであつた。かの女が第二の夫にしたこの寺の住職はもう二年前に死んでゐた。そしてそれから一年ほどして、かの女は還俗した養子と共に、再び世間へと出て行つたのであつた。廣い世間に、容易にその痕跡をとゞめない世間に……。その女を知らせない思ひがけないところから聞いた。それは其還俗した養子を知つてゐるある若い女からであつた。死んだ住職は其養子を寺の後繼者にする積りで骨を折つたのであつたが、若い妻が一生困らないやうな方針を立てて置いて呉れたのであつたが、養子が何うしても僧侶になるのは厭だと言ふので、それで止むなく寺の株をかなりの金で賣つて、そしてその寺から出て行つたといふことであつた。養子は二十一歳で、母親と朝鮮に行つたとも言ひ、養子だけ行つて、母親は東京の何處かに留つて残つてゐるとも言つた。『子供のない方でしたから四十近くなつてもまだ若う御座んしたよ。和尚さんですか。和尚さんは死んだ時六十一か二でしたから奥さん

とは二十以上も年が違つてゐたんです。何でも非常に可愛がつて、若い奥さんの言ふなりになつてゐたさうです。かなりその寺は金があつたさうですから……。」かうその若い女は附加へて話した。

かうした田舎寺に、寒い西風とさびしい林のそよぎと白い朝霜との中に埋れてかの女の過した十三年の年月が哲太には不思議に思はれた。老いて始めて異性を知つた住職と、情熱に富んだ美しい何方かと言へば實感的のかの女との同棲乃至對照は、かれに不思議な深い境を展いて見せた。人の魂を蕩かさずに置かないその眼や、いくらか甘えるやうに男に縋つて來る裊々した姿や、いかなる場合にも臙脂と白粉を忘れなかつたさまや、さうした細かいことが一つ一つはつきりとかれの眼の前に浮んで見えた。かれは老いた和尚の情の深くかの女に絡み附いて行つたさまなどを想像した。

『もしもこれが五六年前であつたなら。』かう思つた哲太は、それと聞いてその行方をさがさずには置かないかれを想像した。また何も彼も捨てて其方に偏つて行くかれを想像した。何んな痕跡をとゞめない世間でも、屹度それを捜し出さずには置かないかれを想像した。朝鮮はおろか、何處までもそのあとを追はずには止まないかれを想像した。しかし今は心の状態が全く違つた。冬が來た。凋落の冬が來た。さびしい姿を持つて、又は白い霜や、寒い風や、冷めたい氷や、銀のやうにキラキラと輝く山の雪とを持つて……。ふとかれの眼は内から外へと向つた。かれは果してその前に、さびしい日影の射した廣い田畠を隔て、こんもりとした杉樹の森のくつきりと鮮かに現はれて來てゐるのを見た。

路はだら／＼と折れ曲つて、或は残雪の林に添ひ、或は麥畑の縁に添ひ、或は水の薄く張つた水田に添つて、ずつとその山門の方へと通じてゐるのを見た。

ふと一人の百姓が通りすがつた。

『K寺はあそこですか？』

『さうです……』

その百姓は、かう素氣なく言つて、後も見ずにすたく／＼と向うに行つた。

かれは靜かに歩いた。段々寺のさまは明かに指さされて來た。高く遠く望まれた山門もさう立派でないと言ふことも、白堊の庫裡の處々壁が落ちて崩れてゐるといふことも、鐘樓には鐘が吊るされてあるけれども、何年にも撞いたことのないといふことも、山門に達する路の敷石も不揃で歩き憎くなつてゐるといふことも、何も彼も……。

さびしい哲太の姿は段々山門近くへと歩いて行つた。其處に來ると、本堂の屋根にまともに夕日の射してゐるのが晴れやかに明るく仰がれた。

山門の前で、かれはやゝ暫く立止まつてあたりを見た。そこには寺の表札も扁額も何もかゝつてゐなかつた。かれは唯その前に二三の古い地藏尊と、酒を禁じた石の立つてゐるのを眼にした。

昔の聖者の心がかれに強く蘇つて來た。そのさびしい教、心も魂をも一つにしなければやまない教、死も生をも一つに融和させなければやまない教、しかもその教は人間最大の事實なる男女の間をいかに解釋したであらうか。

色、非色、相、非相、非々相、深く着したものでなければ深く脱することが出来ないとして聖者は説いてゐるではないか。着することの危険の度數の強いがために、聖者はその遠離を説いたのではないか。聖者もまた私と同じやうに色に即くことの苦しみを嘗めたのではないか。

かれは再びはつきりと自分の位置——人生と宇宙との間に彷徨してゐる自分の位置を見た。半は世間に、愛慾に——。半は空に、清淨に——。

かれはこれまでも何遍この位置を翻つて考へて見たかわからなかつた。何遍となくかれは泥濘の中から躍り上らうとした。しかしかれは何遍となく失敗した。それにも懲りずに、かれはまた躍り上つた。また失敗した。また躍り上つた。

時にはその努力の空しいのに腹を立て、われからその泥濘の中に深く陥つて行つたことなどもあつた。考へて見れば、かうしてこの寺を訪ねて來るといふことも、矢張その努力の空しいのを語つてゐるに過ぎなかつた。

かれは溜息を吐いた。そして又靜かに歩き出した。

寺の中はしんとしてゐた。人氣もなかつた。本堂の障子の繼張りの白く黒いのが基盤の目のやうに際立つて見えた。庫裡の傍には井戸があつた。そこに竿の短い釣瓶が伏せてあつた。

何も彼もかれにはなつかしかつた。一年前までは、かの女が其處にゐたのである。かの女はそこらにその姿を際立たせて歩いてゐたのである。その井戸端にもかの女は度々その姿をあらはしたのである。或はその竿の短い釣瓶にもその手が觸れたかも知れないのである。

しかしかの女は、世間寺の大黒としての生活上にある生活を得たであらうか。老いた夫との同棲の生活以上にある聖い心を養ひ得たであらうか。恐らくは、かの女はそれを得なかつたであらう。夢にもそんなことを考へなかつたであらう。しかしもし萬が一、聖者の伴侶であつたかのS夫人のやうに、男女の外形の形を、乃至は皮相の姿を脱離して、哲太かれ自身よりも、もつと早くその泥濘の中から浮び上つてゐたとすれば、それはどんなに嬉しいまた喜ばしいことであつたか知れなかつた。その時こそかれ等は靜かに昔の戀を語ることが出来るであらうとかれは思つた。

或る感激がかれに來た。さういふ境と、欺騙乃至遊蕩の境と、何方がまことで、そして何方が純であるであらうか。そんなことは元より問ふを待たないことである。かれはかの女に限らず、凡そ今までかれに近寄つた女達の誰に向つても、さうした境の開けて來たのを望まないことはなかつた。かれは何の女に向つてもいつも本當の心を開いた。實はさうした心を欺騙と虚偽の中に開くといふことは、赤裸々

な身を挺して銃槍刀劍の林立した中に突進して行くやうなものであるけれども、それでも自分が男でありかの女が女であるがために、さうした境の開けて來ることを望むがために、いつも本當の心を開いて見せて來た。であるのに、今にして、一人すら、唯一つすらその心を得ることが出來ないとしたら、かれに取つて、それは何んなに悲しいことであるか知れない。——ふと冬のさびしい枯れた寺の庭に、野椿が赤く一つ咲いてゐるのが見えた。それがかれの今になつても猶ほかうしてあくがれてゐる唯一つの女の心ではなかつたか。

かれは靜かに寺の彼方此方を歩いた。本堂の前に行つては、階段の上昇つて、障子を明けて、如來尊像の端坐してゐる堂内を見た。そこは向うの窓からさし込んで來てゐる夕日に明るく、金鍍をした天蓋だの、大きな須彌壇だの、派手な座蒲團の上に置かれた木魚だの、木の槌を添へた磬だのが秩序正しく置かれてあるのがかれの眼に映つた。其處にも此處にもかの女の姿が伴つて残つてゐるやうにかれには思はれた。廢墟は完全にかれの前に展けられた。

やがてかれは其處を出て、寺の裏の方へと行つた。そこには墓地があつた。小さな要垣に圍まれた墓、新しく築かれた土饅頭、萎れた櫛、色の褪めた蛇の形をした幢、その間を傳つて行つた路は、やがて明るい夕日の野に向つて開けて、ところどころ根元に雪を残した林が向うに低く谷のやうな低地を開いた。

ふと林の右の奥に、丸い墓石の並んでゐるのをかれは見た。それは疑ひなく歴代の僧の墓地である。かれは雪の後の路のわるいのを拾ふやうにして、又は枯草の上を求めて踏むやうにして、靜かに其方へと近寄つて行つた。かれはやがて多い丸い墓石の中に、新しい一基の墓を發見した。

それはかの女の夫の僧の墓であつた。そこには兎にも角にもかの女の一生の十年間を自分のものにした老いた僧の屍が横つてゐるのであつた。無論、その僧もかの女の魂を、すべてを得たとは言はれなかつた。腸チブスで死んだ友人も、または其處に立つてゐるかれも、完全にかの女のすべてを占領することが出来なかつたと同じやうに、かの僧も單にその肉體の把握だけに満足しなければならなかつたに相違なかつた。かう思ふと、女性に對する男性の位置が、いかに努力してもその完全な融合を得ることの出來ない對照が、又は二にして竟に一なること能はず、一にして遂に二なること能はざる悲劇が、眞面目に深く哲太の頭に繰返されて來た。外形では、世間では二のものが一になつたやうに見えもするし、又美しい羨ましい融合の姿を見せてゐるものもないではなかつたが、しかし深く考へて、果してそれが根本の融合であるであらうか。かれは何うしてもさう思ふことが出來なかつた。かれの經驗し、體感し、又は見聞したところによつては——。

かれは長い間其處に立盡した。しかし、かの女は兎に角十年間同棲した夫に對して普通の涙だけはその墓前に濺いだに相違ない……。

やがてかれは其處から引返して、今度は庫裡の方に行つた。ある希望が不意にかれを襲つて來たのであつた。かれは思つた。『兎に角、今の住職に逢つて見やう……。そしてそれとなく先住の事を聞いて見やう。』かうかれは思つた。かれは最初唯その廢墟だけを見やう、人知れずこつそり訪ねてそして歸つて來やうと思つてやつて來たのであつたけれども、今になつてはそれだけでは物足らないといふ情が心の底から湧き上つて來た。

かれは庫裡の前に行つて、靜かに案内を乞うた。

人が住んでゐるかわからないやうな寂寥があたりを領した。案内を乞ふかれの聲は次第に高くなつた。しかし矢張りそれに應ずるものはなかつた。庫裡の上り端には小作米の上りらしい米俵が七八俵と大きな權衡と丸い桶とが置いてあつた。と、不意に三毛猫がちよろちよろと何處からか出て來た。そしてちつと立留まつて此方を見た。その眼の中にもかの女がゐるやうにかれには思はれた。

かれは更に聲を高くした。今度は奥で微かに返事がした。つゞいて人の出て來る氣勢が襖のかけでし

た。

一時間後には、かれは自分の姿を流行佛のある大きな寺の境内の旅舎の一間に發見した。かれは寺で住職にわかれてから、殘雪の美しい中を流れる錆鐵色をした大きな川に架つた舟橋を渡つて、靜かに妻

沼町へとやつて來た。川の上流には、河川工事の浚渫船やトロコが混雜と動いてゐて、そこから黒い煤烟がもく／＼と寒い寒い風に靡いてゐた。

その旅舎は此處等に澤山にある、遊蕩氣分の漲つてゐる家であることがすぐ一目でわかつた。で、かれは一度引返して、他に靜かな宿を町の通に搜したけれど、狭い町にはさうした旅舎は何處にも發見することが出来なかつた。かれは再びその境内へと引返した。

白粉をつけた女と中年先の主婦とがひまさうに店で將棋をさしてゐたが、かれが入つて行くと、途中でそれを止して、その白粉の女がかれを二階へと案内した。

庭に面した靜かな一間の方をかれが選ぶと、女はじろ／＼とかれを見ながら、『こちらはお客があるかも知れませんか……。』かう言つて長い廊下を隔てた方の暗い一間をかれに當てた。

かれは爲方なしに其處に坐つて、女が火を運んで來るのを待つた。かれはかうした此地方の女達の生活に熟してゐた。またかうした旅舎の濁つた汚ない空氣にもかなり深く浸つてゐた。さうした女達は、夕暮に白粉を塗つて、銘仙の着物などを着て、客の前に出て、心をも魂をも持たないやうなことを饒舌つた。かれ等はそれからそれへと流れた。體をも精神をも、または其持つた若い時をも何をも考へずに、平氣で浪費して異性の玩弄具になつた。玩弄具を玩弄具とも知らないやうな女が多かつた。そしてその中の僅に一人二人が土地の旦那に圍はれて妾となつて、町の通りに小さな店などを出して貰つた。

哲太は鞆の切れた手と、いやにそればかり白い顔と、客さへ見ればそれを自分の相手と思ふやうな表情とを、可哀相のやうな心持で凝と見守つた。

『向うに、客が来て騒ぐんぢやないかな。』

笑ひながらかう女に言ふと、

『そんなことはありません、大丈夫ですよ。この頃はそんなお客なんかありやしません。』かう女は笑ひながら言つて、そして火を火鉢の中に入れて、トン／＼音を立て、階段を下りて行つた。

哲太は立つてあちこちを見廻した。落葉の一杯に積つた庭、米俵や吠の入れられてある土藏、それから此方に来る深い庇の下では、はつぴ姿の指物師が、寒さうに又は勞れたやうにして、をり／＼手を尉になつた火鉢に當てながら障子の棧を造つてゐた。日はもう暮れ近かつた。残つた餘照は明るくしかしさびしく周圍の大きな杉森の中を照した。

室の中の田舎廻りの繪師の書いた山水の襖、拙い筆蹟の幅物、さうしたものにも人生の艱難が縮圖されてゐるのをかれは思つた。

と、急に、

『トン、トン、トン、トン——』。

といふ鼓の音が、町を通つて行つてゐる獅子舞の囃の音が、家屋を越し、夕日のさし透つた境内の杉と、急に、

『トン、トン、トン、トン。』

かれは獅子舞の幼い子供を、又は鼓を打つてその後についてゐる男をすぐ眼の前に見るやうな氣がした。かれ等放浪者の群は、かうした日暮に食を得るための錢を求めてゐるのであつた。『自分などは贅澤だ。自分の戀の苦しみなどは……』かう哲太は思ひながら、町を通つて行くその高い囃の響に耳を傾けた。

果してその夜は嵐のやうな騒ぎの中にかれは轉輾反側した。かれは其處に酒に酔つた人達の聲と、男の女に戯れる氣勢と、淺薄な歡樂の得意とを見出した。調子外れの唄は唄に續き、節は節に續き、聲は聲に續いた。女達が階段から廊下をバタバタと歩いて行く音が絶えず聞えた。

かれ等は九時過頃からやつて來た。それ迄は靜かな田舎の旅舎の一夜であつた。向うに一間を隔て、新たに鐵道を地方に敷く計畫をしてゐる男が一人二人、酌婦を相手に酒を飲んでゐるが、それはさほどかれの冥想の邪魔にはならなかつた。彼は住職に逢つて聞いたかの女の行方を淡い心で思ひ浮べたり、現に廢墟になりつゝある女の事を繰返したり、長い人生の中に一度逢つてそして別れて行つて了ふ人達の不思議さを考へたり、落葉のガサコソと夜の風に散るのを聞いたりして、綿の固い更紗の四布蒲團に

體の暖まるよすがもないのを佗しく思ひながらうとうとしたが、彼等がやつて來た氣勢に眼を覺まされ
てからは、もう再び臉を合はせることが出來なかつた。かれ等は四人か五人連であつた。何でも町の會
の崩れであるらしく、來た時からしてもう大きな聲で唄などを唄つてゐた。そしてその中には、町の醫
者があり、町長次席の男があり、豪農の主人があり、旋毛まがりの議論好きの有志があるのが段々わか
つた。かれ等はもう分別盛りを過ぎた人達であつた。家にあるは一廉の主人であり父親であり夫である人
達であつた。中には今の政治と政治家とを批評するやうなものもあれば、町のための事業に熱心に執掌
するやうなものもあつた。それにも拘らず、その騒ぎは！ そのはしやぎ様は！ その唄は！ その踊
りは！ 女に戯れるさまの露骨さは！

しかしさうした遊蕩に、又さうした歡樂に、場所こそ違へ、心の持方こそ異れ、會ては十分に浸つた
ことのあるかれは、それを唯無意味に煩さいとか、喧しいとか、傍若無人とか言つて非難する氣にはなれ
なかつた。そこにかれはかれ自身をも見出すことが出來た。また、かれ等が酒さめ、興盡きた後、ソバ
アな顔をして、悄氣て家路を辿るさまをも想像することが出來た。寧ろかれはさういふ單純な心の状態
にゐて、または深くその世界の底を知らうともせず、酒と女とに軽く平凡に騒いで行く人達を羨むや
うな心持がした。

一方またさうした客の相手になる女達の生活や、かうした稼業をして世を過して行く店の人達の生活
が聞えた。

『逸見さんの棚の達磨さんは今日始めて見た。禿ちゃんに似合はずまいな。』かう女の一人が言ふの
が聞えた。

『禿ちゃんはけしからん、貴様、禿ちゃんつて言つたな。お清だな。』かう言ふかと思ふと、今まで踊
ををどつてゐた半老いた町長次席が、急にそれをよして、遁け廻る女を追ひ懸けて、廊下まで出て來て、
ばたばたと此方の障子や襖に突當つた。女は廊下の角でやがてつかまつたらしく、『御免なさい——』と
半ば笑ふやうな聲で言つて、ギウギウ押つけられてゐる氣勢がした。

一時間、二時間経つても、その騒ぎは容易にやまなかつた。まづい都々逸も出ればサノサも出た。小
女はあとからあとへと徳利を運んで來た。哲太は眠られぬ一間で、老いた百姓の大きな健やかな手を思
ひ出したり、馬車の後の臺で假眠を貪つた車掌を思ひ出したり、レールに飛込んだ丸い筒袖姿を思ひ出
したり、町を通つて行く獅子舞の囃の音を思ひ浮べたりした。

ふとある物がかれを襲つて來た。それはかれに取つて佗しい辛いものであつた。かれはいつもそれが
やつて來るのを恐れた。いつもかれはそれを押退けるやうに、やうにとつとめた。

それは魂の問題であつた。それに襲はれると、かれはいつも自分の心が、魂が粉微塵に粉塵されるのを見た。居ても立つてもゐられない様な氣がするのを見た。かうして落附いて旅などに出てゐる自分が餘りに暢氣すぎるやうなのを見た。世間に人間にさうしたことがあるに堪へられないやうに、身がくわつとほてつて來るのが常であつた。

かれは今それが起つて來るのを此上なく恐れた。この嵐のやうな騒ぎの中に、何うすることも出來ない旅舎の深夜に、それがやつて來ては大變だと思つた。かれはつとめて心を靜かにした。わざと旅の出來事などを軽く頭に浮べるやうにした。

枕元に置いてある薄暗いランプのホヤが半は黒くなつてゐるのをかれは見た。かれはわざと心をまぎらかすやうに隣の騒ぎに耳を傾けたり、床の上にひとり起上つて見たり、立つて障子をあけて足音高く廁へ下りて行つたりした。幸ひにして、そのある物はさう強く襲つては來なかつた。次第に心から離れて行つた。

『さうだ……。それより他に路はない、一切を捨てる。第一に家庭を捨てる。次ぎに世間を捨てる。學問を捨てる。知識を捨てる。今まで築き上げ積み上げたものを捨てる。さうして新しく新規時直しをやる。それより他に爲方がない。それより他に、この魂を生かす方法がない。』

かう思つて、かれは手を拱いた。これまでもかれは何遍それを繰返したか知れなかつた。かれは三四年以來さうした思ひに悩まされ通しでやつて來た。一緒に揃つて世に出て來た友人のグループにも、そのためかれは逢はうとしなかつた。そしてをりをりその決心を口に出して言つた。しかし、その實行がいかに難かしく、いかに不可能であるかを考へると、かれはいつも思ひ崩折れずには居られなかつた。床の上に坐つたかれの姿は後の襖にさびしく黒く映つた。

隣室では、今が歡樂の頂上であるかのやうに、皆な揃つて、酔つて、手を叩いて、何にもわからないやうな唄を唄つた。女達も夥しく酔つたらしかつた。かれ等は家も撼くばかりに、終ひにはドウドウ廻りをして室中を踊り廻つた。黄い女の金切聲は男の濁聲と一緒に、深夜の空氣を動かすばかりにした。

この騒ぎも、かれのためには心をまぎらせるものとしては役立つた。その騒ぎがいくらか靜まつて、客が一人二人歸る時分には、かれも思ひに疲れて、蒲團が薄く體や足が暖まらないのを忘れて、いつかうとうと睡眠の中に入つて行つてゐた。

しかし、寒さは、平野の冬の夜の寒さは、かれを長く安眠の境には置かなかつた。かれは朝早く眼覺めて、着物を着て、外套をはおつて、襟巻をしてそのまゝ二階の階梯を下りて行つた。

曉の光は既に窓の隙間に明るくさし込んでゐるに拘らず、家の人々はまだ深い熟睡に落ちて、容易に起きやうとしなかつた。店には昨夜騒いだ女達が煎餅のやうに薄い蒲團に満足して、或は枕を外し、或は髪の壞れかけた髻を見せ、或は白い顔を仰向けにして、縦にまた横様にいぎたなく睡眠を貪つてゐた。

かれはあたりを見廻した。幸ひに今起きたばかりの下男が、眠さうな眼をこすりながら、かれのために店のくゞりを明けて呉れた。かれは逃れるやうにして黎明の冷たい空の中に出て行つた。

冷めたい朝の空気が刺すやうにかれの肌に染み通つた。かれは林間を透して来る黎明の光を眺めながら、静かに、御堂の方へと行つた。そこには仁王尊の彫像のある中門があつたが、奥の本堂では、蠟燭の火が残つた夜の薄暗い影を照して、静かな朝の讀經の聲があたりを深く壯嚴にした。

かれは生き返つたやうな気がした。世間の暗黒の底から嬉しく浮び上つたやうな力強さを感じた。今日に限らず、曉の空気はかれに誕生の喜びと再生の力強さを與へるのが常であつたが、今朝は殊にそれが強くかれの心に染み渡つて感じられた。かれはこの自分の身にも、世途の艱難と辛勞とに塗みれ且疲れたこの身にも、猶再生の力が残り、復活の思想が湧き返つて来るのを覺えた。かれは静かに本堂の前に行つて、長い太い紐を引いて、鰐口を鳴らして手を合せて禮拜した。

この静かな朝の讀經と、刺し透るやうな朝の空気と、朗かな生々とした黎明の光とが、何故人間には長く續いて行かないのであらうか、何故生温い心や暖かい空気や妥協し易い雰囲気や午前よりは午後、午後よりは暗い夜といふ風に溜濁して行かなければならないのか。かれは黎明と言ふことを長い間考へて來た。心の黎明、魂の黎明、思想の黎明、さういふものに誰も皆な深く憧れながら、遂にその黎明はやつて來ないではないか、またかれの一生にもさうしたあざやかな力強い黎明が來さうにも思はれぬではないか。中門から表門へと長く通じた敷石を隔て、御堂の四周をめぐる深い杉の林の樹間には、赤い美しい黎明の空が、やがて生れて來る大きな日輪を豫想させつゝ、嚴かに四邊にひろがり渡つてゐるのが指さされた。

朝早くからお詣りに來る人達の下駄の音は、凍つた敷石の上にカラコロと音を立て、響いて聞えた。早起の子供達は、いつまでも佗しい臥床の中にあるに堪へられぬやうに、赤い毛糸の襟巻などをして、元氣よくこの寒い境内へとやつて來てゐた。ところへ、家屋の蔭、樹の根元、屋根の隅々にと残つた雪は、凍つて固くなつて、中には半ば泥に塗れたものなどもあつた。

中門の前に立つたかれは、不意にある生物の無限に喜び合ひ囁き合ふやうな聲を耳にした。やがてそれは朝の目覺に歡喜してゐる樓上の無数の鳩の啼き聲であることを知つたかれは、心に一種の爽かな再生の喜びの共鳴を感じずにはゐられなかつた。見てゐると、鳩は一羽二羽と其處から次第に飛んで下りて來た。

布子姿の顔の皺の深い爺がかれの傍を掠めて通つて行つた。

『鳩ですな、あの音は？』

『さうだ……矢張、鳥獸でも、夜の明けたのが嬉しんだんべ。』

『毎朝かうですか。』

『何時でもさうだ……。』

かう言つて、爺もその樓上を仰いで見たが、そのまゝ向うの方へと歩いて行つた。

かれは本堂から町の通に出る間を歩きながら、此の本尊が七八百年の長い年月をかうして此處に鎮座してゐることを頭に繰返した。私の父母も、祖父母も、皆な此處にお詣りに來た。駕籠に乗つたり、ちよん鬻に結つたり、長刀を挟んだりして……。かれはまたこの本尊を勸請した歴史に名高い髪を涅めて北國に戦死した健氣な武士のことをも頭に浮べた。無限に長い過去であつた。また無限に長い將來であつた。その長いライフの流れの上に、かうして一夜來て泊つて黎明の境内を歩いてゐるかれの姿の背景には、矢張無限の人達の悲喜と明暗と深い心理とが展げられてゐるのであつた。

町の通りではまだ誰も起きてゐなかつた。唯半鐘臺のみが高く平野の朝霜の中に立つてゐた。

『昨夜はすつかり聞いちやつたよ。えらい騒ぎだつたね。かうした人があんなに騒ぐかと思ふと、變な氣がするよ。』

かう笑ひながらかれが言ふと、女も流石にきまりがわるいといふやうにして、『私ぢやないんですよ。お清さんですよ。』

『君も随分やつたよ。手拍子を打つて、ドウ／＼廻りをしてたぢやないか。』

『だつて、あゝでなくつちや、田舎では納まらないんだもの。』

『何も彼も皆な知つてゐるよ。逸見の禿ちやんツて言つて追懸けられたのも知つてゐるし、町長のわる口を誰か言つてゐたのも知つてゐるし、拙いサノサを唄つたのも知つてゐるよ……。それからお客が歸つてから、あら！ 煙草がもつと残つてゐるかと思つたら、一本しきや残つてゐないツて君が言つたのも知つてゐるよ。』

『私ぢやないよ。あれは、留ちやんだよ。』

『君だよ。』

押しつけるやうに言つて、『すつかりお浚ひをして見やうか。』

『よう御座んすよ。』

『して見やうか？』

『だつて、しやうがないんだもの。藝者が年増だから、私達があゝして騒がなけりや駄目なんだもの。』
『しかし、本當によく騒いだもんだ。……。それから、お客の中の一人にいやに酒癖のわるい奴がゐるたぢやないか。』

『え……。武藤さん。あの人はこのぢき近くの金持の旦那ですけど、質がわるいのよ。あの人ですよ。』

町長さんのわる口をよく言ふのは……。』

『兎に角、えらい騒ぎだつた。あゝいふことを毎晩やるのかえ？』

『そんなことはないけど……。でも、お氣の毒でしたね。寝られなかつたでせう？』

『歸つたのは、もう一時だつたね。』

『さうですよ。私達が寝たのは三時でしたもの……。』

『藝者はあれつきりないのかえ？』

『え……。あのお婆ちゃん一人きり、それに、あの人には子供があるのよ。五つになるのが……。それでも藝はいくらか出来るんださうだけれども、田舎はしやうがないわね。』

『何處から流れて来たんだえ？』

『熊谷でせう、屹度……。東京にも行つたこともあるさうですよ。散々いろんなことをして来たんでせう、もう……。』

『ぢやア、まア、今は旦那があるわけだね。旦那の子かえ？』

『さうぢやないんでせう……。』後を言はずに女は笑つた。

車の來る間を、哲太はこんなことを言つて、朝飯の準備の並んだ餉臺を前に、女を相手にして坐つてゐた。かうした軽い氣分の會話を交へてゐるにも拘らず、かれの心は重苦しく且佗しかつた。かれはこ

れから南に向つて五六里の道を行かなければならなかつた。寒い西風の吹く路を、山の雪のきらきらと輝く平野を、または大きな河に添つた土手の上を、更に佗しいのは、この残雪の平野にすら留ることが出來ずに、刺戟の多い都會に、争鬭の多い世間に、一度足を踏込めば何うしても出ることの出來ない泥淖の中に、複雑した辛い心の巴渦を巻いてゐる中に戻つて行かなければならないことであつた。かれはかれを待つてゐる悲惨な家庭を想像した。また箇の上に箇を無理に築き上げやうとする世間を想像した。張詰めた心でなくては一刻も押されずに生きて行くことの出來ない社會を想像した。心の黎明などは遂に遂に得られさうにもなかつた。

かれは續いてかれを待つてゐる平野の中の小さな停車場を想像した。そこから都會に向つて動いて行く汽車を想像した。車は遂に來た。

今度ばかりではなかつた。かれは四五年前からあちこちの旅へと出かけた。かれは落附いて家庭と世間とに雜つてゐることが出來なかつた。かれは心の赤く爛れて行くことを恐れた。次に再び恐ろしい泥淖の中に陥ることを恐れた。かれは靜かに考へるところを山の隅、海の畔にもとめた。

かれはさびしいその旅の姿を到るところに發見することが出來た。北海の怒濤の音の地を捲いて來る旅館の間では、その時分心の主であつた女にやる手紙を書きかけてそして破つて捨てた。風雪の暗澹

として捲き上がる或る眺望臺では、氷に滑る階梯を辛うじて登り究めて、暗い凄じい荒海を眺めた。

雪の深く降り積つたある山村では、そこに移住して来た果物栽培者の貧しい悲惨な家族をたづねた。その家族ですら、樞火の周圍に僅かに寒さと餓とに戦ひつゝ、希望のない將來を見詰めてゐるやうな人達ですら、猶さうして旅から旅へと彷徨つてゐるかれよりは幸福に思はれた。かれは寧ろ全く今までの羈絆を捨て、人知れない山の村に新規蒔直しの生活をしやうと思つて、ある山の田地を見に行つたことすらあつた。しかし、山の中にも本當の生活は求めることは出来なかつた。外形は原始時代に見るやうな純な空氣と穩かな氣分とを持つてゐるけれども、一度その中に入れば、矢張形式と習慣と虚偽とが羊の皮を被つて存在してゐるのを見て失望した。

それに、さうした山の中にも、矢張女が綺麗な着物を着、白粉や臙脂を塗つて、一年中養蠶に、農耕に勞力を費して得た人達の金を捲き上げた。何處に行つても、夜は明るい灯と酒と女とがあつた。山奥の製板所にまでかれ等は入つて行つた。

かれはある時は大きな山の裾に展開された廣い松林に對して日を暮した。そしてその松林の中にも、矢張明るい灯があり酒があり女があることを想像した。否そればかりではなかつた。かれは村の人達の家庭に對して、その女達がいかに非常に恐ろしい強敵であるかといふことを痛切に感じた。

かれはある若い富んだ農夫を知つてゐた。その農夫はさうした種類の女に迷つて、終には親族會議に

まで上つた。しかし女は何うしても男に離れやうとしなかつた。爲方がないので、親類の人達は、一先づ女と農夫とを山の家に伴れて來て置いた。土、鍋箒、七輪、手桶——さういふもの、中にかれ等は小唄にでもあるやうにして暮した。これがもしその農夫の妻に子供が一人でもあつたなら、その問題もある違つた形を取つたであらうが、不幸にもかの女には子供がなかつた。——丁度その頃であつた。その女と切れる切れないの悶着中であつた。哲太はゆくりなくそこに行つた。

『とても、さう簡單にはすまないと思ふね。男女の間はさう第三者の言ふやうにならんもんだから。』かうかれは其話を聞いて言つた。

それが次に行つた時には、『いゝ鹽梅に、手切れですみましてな、——今ぢやあの男も落附いて家に歸つてゐますよ。上さん大喜びでさ。』かう言つてその村の人達は話した。しかし話はそれで The end になつてはゐなかつた。一年後に妻に子供が生れた。不幸にしてその子は半年ほどして死んだ。その前後になつて、前の女は再び停車場附近の茶屋にその姿をあらはした。若い農夫もをりくは出かけて行くらしい形跡があつた。辛い暗闘は始まつた。ある夜は、風雨の降り頻る中に、妻は夫の身の上を案じて、寧ろ女に對する嫉妬に燃えて、草藪の深い露をわけて明るい停車場の灯の方に出かけて行くのに哲太は逢つた。

その時はかれは山の別荘に十日ほどゐた。村の人達はよく訪ねて來て呉れた。かうしてかれの一人山

の中にあるのに同情して、降頻る秋雨の山路に濡れながら、わざわざ訪ねて来る村の青年達もあつた。その青年にかれが其話をする時、『さういふ時に、女と男と一緒にゐたら、唯ちやすむい。えらい騒ぎが持上がるすら？』と言つて笑つた。

『えらい騒ぎどころぢやないよ。さういふ時に刃物三昧がよく始まるんだよ。敵の肌にも刃を當てなければ満足が出来ないやうになるんだよ。』

『さうすらな。』

青年はかう言つてまだ経験しない未知の世界を捜すやうな眼色をして言つた。

青年達に取つては、さうした境は不可思議のやうにも、また禁ぜられた果實のやうにも思はれるらしかつた。またその前途に楽しく横つた世界のやうでもあつた。否、その青年の群の中には、逸早くその世界に突進して、その甘い果實の汁に手を著け始めたものもあつた。その青年はRと呼ばれてゐた。

Rは他の青年達と違つて、赤手でその危険な世界に飛び込んで行くやうな男であつた。『困るな……』かう心配して哲太が言ふと、『大丈夫ですよ。ハメを外すやうなことはありませんから。』かう言つて一つ二つ経験した果實の旨さをかれに話した。

さうかと思ふと、そのかれのゐる別荘の留守居に、六十ばかりになる岩乗な爺がゐた。初めに行つた時にも、次ぎに行つた時にも、その爺は全く一人で暮してゐるが、圍爐裡の中にさびしさうに櫓をくべ

て燃やしてなごむたが、今度行つた時には、嗚とも茶呑友達ともつかない五十位の婆さんが一緒に寢泊りして、頻りにやさしげにその世話をしたりほころびを縫つてやつたりしてゐるのであつた。飯はいつもその婆さんが運んだ。

ある時、哲太は笑ひながら、山の青年達に言つた。

『どうも、西鶴にでもありさうなシインだね。よつびて、睦まじく話してゐるからな、爺さん、婆さん。去年女をつれて来て、此方で見せつけた仇を今度は打たれるわけだね。』

『戯談すら？』

『うそぢやないよ。本當だよ、それに、あの爺にしても、まだ一人で暮してゐるのはさびしいやな。』かう言つて哲太は笑つた。

『本當かな……。何うも戯談らしいぞ！』

『戯談なことがあるもんか。だから、今夜は此方に枕をして寢やうと思つてゐるんだ……。何うも寢られなくて困るからな。』かう言つて哲太は笑つた。

『あいつら、何すら？ お互に棺桶に足を踏込んでゐる手合すらに——』

Nといふ青年はかう言つて聲をあけて笑つた。

『だつてまだ丈夫だからな。』

『いくら丈夫だつて、馬鹿くしいや……』青年の身にしては、さういふ世界は全くこれからの自分等の所有で、老人などの與り知らぬものゝやうに思へた。

青年達は、可笑しいやうな、不思議なやうな顔色をして、其處等に働いてゐる爺さん婆さんを見た。

婆さんは、時には、近所の林の中に行つて、其處等に出てゐるいろくゝな茸類を取つて来て、皮をむいたり、わるいのを選んで捨てたりしてゐた。さういふ時には、哲太はそこに行つて話した。かれは農婦に似合わない白い腕と細い指とを見遁すことが出来なかつた。そこには Coquetry とか、Adultery とか言ふ心持の老いても猶痕を留めてゐるのをかれは見た。かれは婆さんの前生涯を想像した。

その青年達の一人であるRが朝鮮へ立つて行つたのは、その翌年の秋のことであつた。Rはいつの間にかその未知の世界に、歡樂の世界に思つたより深く身を浸してゐたのであつた。かれは矢張さうした最初の蕩兒が誰も踏んで行くやうな道程——撥を手にする女に、門構への洒落れた縁などの綺麗に拭き込んである家に、續いて明るい灯の晝のやうな廓に、深酒と駄洒落とおべんちやらと追従との中に、鼓と三味線の湧くやうな高樓に、人を馬鹿にしたやうな脇息を中年の女から勧められるやうな一間に、長襦袢姿で女のソツと靜かに入つて来るやうな深夜の空氣に、さういふ風にして段々深みへ入つて行つたのであつた。元氣な快活な聰明なかれは、初めは顔が赧くなつたり、馬鹿にされたやうに思つたり、淺ま

しいやうな心がしたり、陰で皆なが、その相手の女すらが、自分の何も知らないのを笑つてゐるやうに思はれたりして、自分の經驗の淺いのをわれと自分であざ笑つたやうなことも尠くなかつたが、しかもいつとなく引摺られて、次第に賑かな色町の空氣がその身から心から離れることが出来なくなるやうになつた。兎に角、これも經驗だ、人間のやることだ、捉へられさへしなければ好い、かう心ではちやんと理解してゐながら、哲太が山に滞在中、平生言つてゐた色戀のことなども深く胸に留めて置きながら、しかも深い利那の戀の牽引力はいつもかれの足をそつちへと向けさせた。『なアに、へえ？ あいつらは？』など、一廉さうした世界の空氣に通じてゐるやうな言葉を表面に言ふことはあつても、しかも自分の毎日勤めてゐる村の銀行の椅子の上では、片時も色町の賑やかな灯と三味線とそのぞめきとから心を離すことが出来なかつた。かれの勤めてゐる銀行は、山寄りの庇の高い板葺のつゞいたさびしい村の中にあつた。それは村長をしてゐるかれの父や、親類や、村の富豪などが寄り合つて、地方の農耕、養蠶、または肥料を買ふ時などの農夫達の金の融通機關として建てられた銀行であつた。従つてそこにとめてゐるRは、勤めに行くと言つても、家か乃至は親類へでも行つてゐるやうな氣安さであつた。同僚は皆子供時分から共に騒いだ悪太郎達で、中には矢張山の別荘に一緒に哲太を訪ねて行つたSもゐた。RはSと共に色町へも出かけて行つた。

かうした山の中の青年達も、しかも時期が來れば、ひとり手に生活の波に觸れて行かなければならな

かつた。Sは若くて妻帯して、否應なしに山の中の農夫にならなければならぬ運命を負はせられた。その青年の熱い志は、妻により、父母により、又は生れた可愛い子に由つていつも押へられた。Nは温順な賢い親孝行な青年であつた。野に出て働くことを何とも思つてゐなかつた。かれは新しい歌を習つて、野に耕す間にも、手帳と鉛筆とを身から離さないやうな青年であつた。Rとは殊に氣が合つて、まだ色町にRが足を踏み入れない前には、日曜などにいつも揃つて、汽車で、湖水に添つた温泉のある町へと遊びに行つて、その本屋の娘のHを通りの店に訪ねて、半日面白くあそび暮した。Hも矢張歌を紫インキか何かで手帳に細かく書きつける様な娘であつた。山に初茸の出来る時分には、二人は停車場まで行く間の松原の中でそれをさがして、澤山取つてHの店に土産に持つて行つてやつたりなどした。さうした交際は二三年續いた。ところがRが色町に入るやうになつてから、その行動をHは常にNに話した。『昨夜も來てましたよ。Rさんが、あんなに遊んで好いのかしら?』など、言つた。Nも何うかするとRに無理に誘はれて、さうした空氣の中に浸ることは一二度はあつたが、かれは決してRのやうに深はまりはしなかつた。Hはその話をきくと、『悪友、悪友。』など、Rに向つて言つた。

Rが山の青年達の中で一番志のある青年であることは哲太も知つてゐた。Sは既に山村の農夫である。Nも山にゐて父母の家を嗣ぐべき好箇の青年である。唯、Rばかりが山にちつとしてゐることの出來

ない質であつた。かれは何かしなければならぬと常に思つた。Sのやうに、またはNのやうに物を書いたり歌を詠んだりしただけでは満足が出來なかつた。この附近の山の村の中に流れてゐる放浪の氣分、それが一番かれに多かつた。

不思議にもこの山の村からは昔から種々な人達が出た。少時志を立て、代議士になつてゐるものもあれば、都會に出て立派な工場を經營してゐるものもある。従つて低きも高きも、一度は村を出て何かやつて來なければならぬといふ氣分がさびしい山の村の到るところに巴渦を卷いてゐた。中には赤手にして南アメリカから巴里、ロンドンへと放浪して、また再び赤手で歸つて來たやうな青年などもあつた。

Rが色町に沈湎して、それが何うにもなくなつたのは間もなくであつた。父は黙つてかれの顔を見た。母は病床でくどくどとかれを意見した。殊に、他に嫁いでゐる姉の染々した意見は少からず彼を動かした。かれの若い血は湧いた。虚偽と欺騙と遊蕩とから再び躍り上らなければならぬといふ目覚めがかれの全身を震はせた。かれは遂に志を決した。かねて話しのあつた朝鮮の農場——村の有力者の買占めて持つてゐる農場、そこに行つて、新規蒔直しをやらうとかれは思ひ立つた。

秋雨の降り頻る日、かれはさびしく山の停車場から出發した。

あらゆるものを捨て、故郷も、父母も、姉妹も、なつかしい山の高原の眺望も、朝に夕に山莊へと哲太を訪ねて行つた山花の亂れ開いた草藪の中の路も、離れ難ない色町の賑やかな空氣も、三味線と鼓

の音も、温泉の湧き出す暖かい湯の町も、絡みつき纏れついて忘れかねる女の情も、段々Nの方へ心を靡かせて行つてやがては山の古い家とその笑顔を見せるであらうと思はれるHをも、何をも彼をも捨てて、そして何處へ？ 朝鮮へ。汚ない土壁で圍まれた低い民家と、オンドルと、南京蟲と、寒い寒い冬は零度以下に下る土地へ、ひろいひろい何處から手をつけて好いかわからないやうな荒野へ。明るい灯や美しい顔の見たくも見られない異郷へ。

哲太はその報知の手紙をRから受取つた時には、その勇ましい心が、または悲哀が、捨て、自ら生きやうとした形が、自分自身がRその人であるかのやうな深い深い感激を齎さずには置かなかつた。山の別荘にゐる時分、いくらかその話を聞いて知つてゐた哲太は『好いな、俺も行くかな、何も彼も捨て、…行くよ、君が行けば、俺もあとからついて行くよ。』こんなことを戯談ではなしに心から言つたことがあつた。哲太かれ自身もさうした目覺に悶えてゐる身ではなかつたか。全くの一人になることを望む身ではなかつたか、

しかしかれは餘りに深く世間に浸り過ぎてゐた。Rかれ自身のやうに、一刀兩斷の快擧に出るには餘りに既に複雑した羈絆と束縛とに自らの身を縛り過ぎてゐた。それを思ふと哲太は悲しかつた。

哲太はRの立つて行く山の停車場の秋雨を想像した。SやNや其他の青年が深い泥濘の路をついてやつて來て、例の素樸な言葉で、酔つて別を叙してゐるさまを想像した。またNやHの仲などを想像した。

車窓からさびしさうに白い顔を出して故郷の人達に別れをつけてゐるRを想像した。

汽車は降り頻る雨を衝いて、ポツポツと白い烟を立て、山を出て行つた。

何のためにさうした煩悶と苦痛とが起つたかといふことを哲太はをりをり考へて見た。しかしその答は容易に正當に具象的にかれの胸に響いては來なかつた。それは複雑したまたはこんがらかつた糸の塊の解き易からざるに似てゐた。此方を引張れば彼方が結ばれた。彼方を解けば此方が結ばれた。世間と、生活と、自他と、男女の關係と、力の暗闘とが、過去と現在と未來とを一緒にして深く解き難く重なり合つてゐた。

かれは曾て力の漲り溢れた若いかれを見た。また太いステッキを振舞はして街頭を濶歩してゐるかれを見た。『今が人生の盛りだ。今ほど心から生きたと思はれる時はない。』かう思つて盲目的に世間の悲喜に向つて突進して行つてゐるかれを見た。『刹那だ、一瞬間だ。それより外に何もない。反省は尠くとも衰へた心と肉體との第一歩である。忍耐は或力の壓迫に餘儀なくされたいちぢけた悪徳である。あらゆるものを征服せよ。他を征服せよ。生死を征服せよ。いかなるか是れ善、いかなるか是れ惡、力のある所に善惡あることなし、道徳あることなし。』かう叫んで進んで行くかれを見た。

かれは貧しきものの必ず艱難に、富んだものの必ず貪婪に、功名にあへぐものの必ず卑屈なのを見た。

かれはあらゆるものの平等を欲した。あらゆる人間がかれの如くならば、世界は理想境として一大革命を來すであらうと信じた。かれは外國の人達の勇ましい偶像破壊に傾倒した。自己崇拜に傾倒した。我即ち神也の思想に傾倒した。

かれは共産主義者の群にも友達を持つてゐた。危険な無政府主義者にも一面に於て共鳴した。かれは尠くとも思想の分野に於ける新しく萌え出した芽であつた。かれは世間に行はれつゝあるあらゆるものに自ら觸れて行かうとした。否、現に觸れて行きつゝあつた。しかし果してそれが何うであつたか、如何なる結果をかれの心に齎し來つたであらうか、それは單に一朝にして土崩瓦解して行く空中樓閣ではなかつたか。

かれは惡の道に、罪過の道に一步一步落ちて行くことを知らなかつたのである。かれは矢張空想に捉へられてゐたのである。何でも出來ると信じたその裏には、何も出來ない、一草一木すらかれの自由にはならないといふ事實が儼として横つてゐたことを知らなかつたのである。かれはいつの間にか思想の奴隸となつてゐたことを知らなかつたのである。思想のために魂が虐けられて居りながら、または暗々裏に魂の壓迫から來た不自然を感じて居りながら、思想といふ或る大きな型に惑はされて、その思想によつて實行を敢てしやうとしたドン・チャンであつたのである。

かれは其處此處に多くの女の顔を思ひ浮べることが出來た。平野の寺にそのルウインを見やうとした

女、山の停車場の近くにゐる女、都會の郊外に住む新しい思想を持つたと稱する女、若い男を周圍に常に引き附けて置かなければ満足が出來ないといふ富豪の女、乃至は海の畔に住んでゐる無知なしかし伶俐な女が、かれのドン・チャンとしての行動の背景の一つ一つを色濃く塗つた。

そしてその女達には何があつたか。本能から命ぜられた盲目的情慾の發露以外に何があつたか。男から男に移つて行く歡樂の追求、でなければ種々の生殖に忽ちいぢけて満足して了ふ赤く爛れた低級な愛情、でなければ異性の心を征服して、その征服したといふことにのみ勝利の快感を味ふデカダンな心、でなければ世間の榮華を得んがためにのみ切賣され浪費された愛情、それ以外に何があつたか、心から異性の魂まで入つて知らうと思つたものは一人でもあつたか。

更に愚劣なのは家庭である。家庭にゐる女達である。家庭の牢獄に均しいといふことは、數千年前既に印度の聖者も説いてゐるが、その愚痴と卑しい氣分と調子とは人の魂を亡ぼさずに置かないものであることをかれは思はずには居られなかつた。

かれは次第に、一木一草すら自由にならないことを痛感し始めた。と同時に征服といふ思想の不可能なことが次第にわかつて來た。かれは自分の空中樓閣が一朝にして灰燼に歸して了ふのを見た。その頃かかれは旅に出た。新規蒔直しをやらなければならないと思ひ立つたのである。

女達の心に、又は家庭に、自己を完全に打立てなければならぬと思つた。征服ならず、融合を求

めなければならぬといふことをかれは考へた。

かれは旅から旅へと行つた。旅ばかりがかれに本當のことを思はせた。

半年はかれは山の廢寺の僧房で全く一人で暮した。

深く閉された半ば壞れた門、中には庇の落ち壁の崩れた小さな僧房があつて、盲人の目のやうに戸がびつしやりと閉められてあつた。水聲は常に屋を撼かすやうにあたりにきこえた。

哲太はひとりで飯を炊いて食つた。初め伴れて來た書生は、一月もゐることが出來ずに歸つて行つて了つた。かれは古い眞菰に埋れた池の中にほつかり浮び出すやうに咲いてゐる濃い紫の杜若に思ひを寄せた。夜は盲目の戀にあくがれた蛙の鳴き聲が過ぎ去つた歡樂を彼に思ひ起させた。

崖を下りて行くと、そこに隣の僧のつくつてゐる赤いダリアの花の美しく咲いてゐる畑があつたが、哲太はそれを一枝貰つて來て、僧房の一隅に轉がつてゐる古いキュラソウの壘にさして、漆の兀けた經机の上に置いた。

そしてかれは終日長く減じて行つた昔の空中樓閣に對した。

かれは其處でデカダンを思つた。また共產主義を考へた。男女の離れ難ない羈絆を思つた。また、かれはこの廢寺の中に會て住んだ人の址などを偲んだ。

過去が現在となりまた直ちにそれが將來になつて行くことに就ては、かれは殊に深い長い瞑想に耽つ

た。一つのキュラソウの壘、昔からこの寺にあつた壘、それにすらこの三つの過、現、未があることを思はずにはゐられなかつた。柱にかけてある古い鏡には、鬚の深いやつれた蒼白いかれの顔が映つた。

淡い霧の中にびつしやりと閉ぢられた大きな堂宇の扉、そこに立つてかれは何遍『開かれざる心の扉』について考へたであらうか。不幸にして、かれには、巴里のデカダンの一人であつた作者のやうに、靜寂の完全に保たれてゐる堂宇をすら得ることが出來なかつた。名高い大きな寺觀であつたにも拘らず、其處には淨い心の一つをもかれは何處にも發見することが出來なかつた。

讀經の力で、法衣に五色の絲屑がつくといふ奇蹟を行つた老僧の許にもかれは行つて見たが、しかし失望して歸つて來た。

かれはさびしい心で其處を去つた。深い霧も、烈しい山颯も、冷たい雪も、かれに十分なる力——あらゆるものを立て直す十分なる力を與へては呉れなかつた。かれは矢張安んじて身を置くにところのないあはれな放浪者であつた。

旅から旅へとまたかれは行つた。三等の混雜した汽車の中、荒海をわたる小さな汽船の窓の下、あれ果てた宿驛の中の旅舎の一間にかれはそのさびしい姿を發見した。人生の重荷と戀の重荷とにやつれたかれを……。

哲太は到るところで、新規蒔直しをする位置と機会とを求めた。或る町ではかれは機織業者に逢つて、その事業と生活方法との内容を詳しく聞いて、工場から工場へと歩いて見せて貰つた。或る山の中では、寒天を製造する家々を歴訪して、大きな釜から白い湯氣の夥しく颯るのを眺めた。農業に關しては、人間の生活方法として一番自然で且つ一番意味がある生活と信じてゐるだけそれだけ、かれは殊に深い注意を拂つて、或は平野に、或は海岸に、或は山村に、種々な方面からその細かい状態を研究した。時には千米突以上の高距を持つた山奥の民の生活を訪ねたり、時にはまた林を拂ひ下けて、道路を造つて、小さな製板所を持つてゐる人の生活をわざわざ草鞋ばきで三日かゝつて訪問した。

果物栽培者は殊に何軒も行つて見た。葡萄、林檎、梨、桃、さういふ人達は或は南に面した山の懷に、或は西風の吹き荒る、平野の林の蔭に、或は谷谷の靜かな山島の中に、小さな掘立小屋のやうな家を造つて、大きな圍爐裏に楸火を燃やしてそして全く世間と離れたやうな生活を送つてゐた。或る山の上の果物栽培者は、僅かな年月の中に努力の結果をかなりに收めて、外國風の帳場をつくつて、椅子にティブルを据ゑて、自分の牧場で搾つた野羊の乳をかれに勧めた。かれは羨ますには居られなかつた。かれは何も彼も捨て、さうした自然の中にその身を埋めて了はうかと何遍思つたか知れなかつた。しかし、一步を進めてその内部に入つて行くと、かれは常に失望した。矢張其處にも細かい厭な世間の空氣が巴渦を卷いてゐるのをかれは見逃すことが出来なかつた。

またある時は、絶海の畔にあるさびしい燈臺に一夜泊つて、その世離れた孤獨の生活をかれは羨んだ。何故自分もさうした生活を得やうとはしなかつたであらうか、もし此處にさうした方面に勢力のある舊友でもあつて、自分のためにさうした位置を贏ち得て呉れるならば、それこそ何んなに深い感謝を捧げるであらうか。かう思つて、かれは燈臺の主人の話す難破船の話や、信天翁の話や、一週間毎に里から食料を運んで來る話などをさびしい波の音を耳にしながら聞いた。シエンキキツチの書いた波蘭の老放浪者の悲劇などが終夜かれの頭に上つた。それにも拘らず、燈臺守の主人は却てかれの都會生活を羨んで、これから來る冬のさびしさや、荒涼とした海や、波の音などを佗びしがるのであつた。そしてあくる朝は松原遠く送つて來て、哲太の姿の見えなくなるまで見送つてゐた。

山奥の温泉場に長く滞在してゐた時には、その温泉宿の一軒についての株や價值などといふものをもそれとなく訊き正した。その主人にならうとかれは思つたのであつた。しかし矢張それはかれの空想で、容易にその周圍に同化することは出来さうにも思はれなかつた。ある日はかれは山の中に一人さびしく入つて行くかれを想像した。誰もゐない深山の中に、鳥と獸と林としかない深山の中に……。つゞいてかれは其處にひとりさびしく、自己の最後を發見しつゝあるかれを想像した。そこより他にはかれの位置はないやうにすらかれには思はれた。

かれは翻つて考へた。これが曾て盲目的に世間に向つて突進して行つた渠である。またデカダンの群

の一人として、世間から注意された渠である。かれは不思議な気がした。『矢張、自分は空想家だ。……さうだ、確かに空想家だ。徒らに空中樓閣を描いてゐるのだ。』哲太は世間の艱難が、罪過が、すべて悉く自分に集つて来るやうなのを不思議にした。かれはその山奥の温泉場に一月以上もゐた。

かれはまた荒涼とした北海道や樺太に住む人達の生活を頭に描いた。自然のまゝな深林、それを少しづつ、開墾して一生を終るのも決して徒爾ではないとかれは思つた。かれの眼の前には、雪に埋められた小舎が見えた。熊の餌を求めて里近く出て来る山裾の村のさまが見えた。槽火の赤く暖かく燃えてゐる夜が見えた。寥廓として際涯なき穹窿に星の金屬のやうにきら／＼と輝くのが見えた。かれはロシアの渺茫としたステップの中に、突然訪ねて来て、一夜泊つて、そして翌朝はさびしく別れて行くといふザイチエフの『客』といふ短篇を思ひ出した。

この廣い穹窿の下にあつて、都會の功名に、又は富貴に、又は足らざるものゝない贅澤な生活の中に、美しい女と酒の中に生活する人達は、『客』の中にあらはれたやうな悠遠な靜かな本當の生活を味ふことが出来るであらうか。かれは歴史にあらはれた英雄の生活と、榮華を盡した絶代の美人の生活と、またはさうしたステップの中に住む人達の生活と、何も彼も同じ穹窿の下に瞬時に現れてそして消えて行くものであることを思つて黯然たらざるを得なかつた。

かれはまた臘腸臍の時を定めて無數に集つて来る島嶼を思つた。つゞいて、深林また深林、行つても行つても盡きない林の中の小さなさびしい停車場を思つた。一年中深い濃霧に埋められて日の光も見ることの出来ないやうなところに働いて生活してゐる人達を思つた。其處では、冬は氷が汽船を封鎖してふといふことであつた。また其處では雪が全く人家を埋め盡してふといふことであつた。かれは續いて其處に移住したある團隊の悲惨な冬ごもりのさまを想像した。かれはその人達の生活を撮影した寫眞を持つてゐた。かれはそれを出して来て、半日そのあたりのことを研究した。

かれの机の上には、移住民の手續の書かれた本や、案内書や、地圖や、旅行記が長い間置かれた。かれはをり／＼それを手に取つて読み且翻した。否、そればかりではなかつた。かれは其ためにある人があるところに訪ねて、種々と細かい開墾の話などを聞いた。その地方からやつて来た或る友達は、多少さうした開墾の經驗を持つてゐて、廣い野山の話や、農耕の話や、川で獲れる魚類の話などをして呉れた。そして最後に、かれの空想を戒めるやうに、『しかし、何處に行つたつて同じですよ。矢張同じ人間の生活があるばかりですよ。矢張、男女關係と物質とですよ。』かう言つて、何んな深い山の中にも、矢張男について行く女があり、孤獨について行く羈絆があるといふ話の例を二つも三つも挙げた。生活のための生活——それ以上には新しい意義ある生活は何處にも見出すことが出来なかつた。

或る初冬の寒い日の午後には、かれはかれの姿を荒漠とした東北の廣い野の道の上に發見した。あた

りには廣い草藪と、林と、そこを貫いて縦横に流れてゐる石川とが見られた。かれは一里ほど離れてゐるさびしい小さな停車場から歩いて來た。そこにはかれの遠い親類に當る六十五六になる老人が、二十五年も前から其處に移住して、あたりの開墾に従事してゐた。

かれは靜に冥想に耽りながら歩いた。林は既に紅葉を過ぎて、をり／＼吹いて來る風にガサ／＼と音を立て、散つた。路には半ば開墾された、寧ろいかに努力して開いても遂に遂に徒勞に歸して了つたと言ふ方が好い畠が、大根や菜の畑が、または緑り色の微かな麥の畠が、あはれにいぢけてところ／＼に綴られて見えてゐた。

林が林に續いた。

その林の中に、かれは遂に小さな廂の低い家屋を發見した。

かれは急いで其方へと行つた。廣い庭と、長い日當りの好い縁側と、そこらに散されてあるこれからの長い冬を凌ぐための燃料と、汚衣着物を着て其處等に遊んでゐる子供とが眼に附いた。

やがて奥から年の既に老いた筒袖姿の女が出て來たが、それは一目で主婦であるといふことが、遠い昔に見たことのある而影の残つてゐる主婦であるといふことがかれにはわかつたが、黒い外套を被た髭の生えた四十先の都會風のかれが主婦にはちよつとわからなかつたらしく、怪訝さうな顔をして暫らくぢつと見成つてゐるが、『まア、哲ちやんかね。めづらしいね。餘りお久しいので、すつかり見忘れて

了つたがね。』かう言つて、急になつかしさうに、またはかうした繕はない姿と生活とを見られるのをきまりがわるいといふやうにして、そのまゝ戸内に入つて行つたが、

『お父さん、まア、めづらしい人が……、私、すつかり見忘れて了つた。哲ちやんが來たんだよ。杉山の哲ちやんが——』

かう言つて、奥にゐる主翁に話しかけてゐる聲がした。

『哲太が……？ それはめづらしい……』奥から主翁はかう言つて立つて來たらしかつたが、かれが其處に行つた時には、そのあるじが、すつかり髪は白くなつたあるじが、維新の頃には十五六で、藩の青年組の一人で、殊に組の中の牛耳を取つて四方に往來したかれが、今は全く一個の好老爺としてかれの前にあらはれて來るのを見た。

『ヤ、哲太……。これはめづらしい。思ひもかけないこつちや……。よく來たな。』かう言つてぢつと見て、『成程お清が見忘れるのも尤もぢや、こんなに立派になつたんだから……』

もう一度ぢつと見成つて、

『よく來たな。何うして來た……。まア、ひどいところだがな。こんなに取散してあるが、まア上れや。』

『つい其處まで來たもんですから、何んなにしてゐらつしやるかと思つて……。不斷、いつも御無沙汰

ばかりしてゐて……。』

『いや、それは何方も同じこつちや。お袋や兄貴が死んでから、逢ふやうな折も無うてな、まア上れ、汚いところぢやが——』

かう言つて、主翁夫妻はかれを座敷の方へと頻に請じた。

かれの眼には、がらんとした農家の内部が映つた。暗い貧しい臺所が、俵や吠が二三俵ころがしてあるばかりで、他には冬の燃料しか積んでない臺所が、貧窮と零落と飢寒としか思はせないやうなあたりが……。障子は破れ、壁は半ば崩れ落ちて、襪襦の置いてある日當りの縁側に鶏が上つて、何か頻に啄いてゐるが、何かそこに取りに行つた主婦は、それと見て、叱つと逐つた、鶏はコケコケと言つて羽ばたきをして飛んで下りた。

導かれた座敷もかなり汚かつた。もう何年にも取替へたことのないやうに畳は古く黒くなつてゐて、壁の破れを日清戦争の錦繪で繕つてあつたが、それももう長い年月を経て、その繪もはつきりとわからないばかりに黒くなつてゐた。主翁はそこらに散ばつてゐるものを片付けながら、

『百姓になつちや、これぢやからな。この通りぢやからな。』

『それでもお丈夫で結構です。』

『丈夫は丈夫ぢや。まだ、これで野良に出て働くぢやで……』腕をまくつて見せて、『今日も、もう

少し前まで、島へ出てたぢや。』

『Sさんは?』

主翁の持つた三人の息子の末の子の名を言つてかれが訊くと、

『今日は馬を引いて町迄行つた。』

『それでもよくSさんだけは、落附いてお世話をなさいますね。』

『なアに、奴も東京に出たがつて、落附いて野良なんかやつてやしないや……。野良や山のこととはまだこれで私がやつてゐるんぢやで……。それに、此頃は總領の作の子供を預かつてゐるものだからな。婆さまも中々大變さ。』

『あゝ、表で遊んでゐたのは、作さんの子ですか、作さん、それでも好いでせう?』

『なアに——』と一喝するやうに言つて、『あいつも能なしでな。今だに東京でまごころしてゐるぢや。もう四十先だのに……まだ行先の目的が立たんぢや、もう一生浮浪人ぢや。貴公と同じ位の年ぢやな。』

『さうです。僕の方が一つ下です。』

『それに、あいつの鼻が死んでな。それでまア、爲方がねえで、一人だけ婆さまが可哀相だつて引取つて世話してゐるがな。』

『さうですか、お上さん死んだんですか、ちつとも知りませんでした。それは大變ですね。』

かう言つてゐる處に、十二三になる矢張餘り綺麗でない女の兒が来て丁寧挨拶をした。

『このお子ですか。』

『いや、これは俺の末ぢや。此方に来てから出来たんぢや。』

『さうですか、かういふ末のお子さんもあつたんですか、ちつとも知らなかつた……。もういくつです？』

『十三ぢや。』

『さうですか。』

かう遠い過去を思ひ廻すやうにして哲太は言つた。

この主翁の次男は、今年三十六七で、曾ては哲太の家にもよく往來したことがあつた。兄弟中では學問が一番よく出来て、或る外國語の學校を苦學して卒業して、それからN社の社會主義的傾向に共鳴して、随分過激な議論を吐いた。MSといふかれの名は、一時新聞や雜誌に喧傳されたことがあつた。ことに後には、MSはさうした思想家の中でも、過激な主張者として當局から認められて、かのT事件前後には、本國にゐることが出来なくなつて、今はアメリカに行つてゐるが、今かうしてこの主翁に對して見ると、哲太は矢張この老翁の烈しい血がそのMSにも流れてゐるのを今更のやうに思はずには居られなかつた。T事件前後には、この荒涼とした荒野の中にも巡查や刑事が度々やつて来てかれの消息を

知らうとしたといふ。またその時には、この主翁は、普通の老人のやうにそれを怖れも悔いもせず、却つてMSのために大に氣焰を吐いたといふ。その噂は哲太もかねて聞いて知つてゐるのであつた。

主翁が此處に開墾を思ひ立つてやつて来た頃には、哲太もまだ若くつて、さうした深いことは考へも知りもしなかつたけれど、今になつて見ると、その決意の中に、かうした荒漠とした野の中に世を離れて一人で出て来た行動の中に、その烈しい血が、激憤が、色濃く塗られてゐることを哲太は思はずには居られなかつた。其頃、主翁は警察の方に職を奉じてゐて、常に上官の明のないのを憤慨してゐた。また哲太の母や兄は常にそれを慰めてゐた。しかしそればかりがその原因ではなかつたのである。哲太は血の悲劇、性格の悲劇をまざくと明かに眼の前に見るやうな氣がした。

『MSさんからはたよりがありますか。』

かう哲太が思ひ出したやうにして訊くと、

『あるよ。つい此間もあつた……。あいつはそれでも總領とは違つてな。中々やつてをるわい。此間も向うの同じ仲間のを書いてよこしたが、わしにはよくわからんが中々盛んなさうぢやな。』かう言つて主翁は立つて、あちこちをさがしたが、やがて横封の手紙と一緒に、外國の本や寫眞帖や新聞やを一まとめにしたものを持つて来て哲太の前に置いた。

哲太は手紙を読み、寫眞帖を展げた。かれの眼の前には、大きな市街だの建物だの、またはさうした思

想の漲つた人達の生活だのが映つた。つづいてかれはMSがよくかれの家にやつて来た時分のことを思つた。烈しい思潮、極端な議論、さうした波は曾ては一度この極東の一孤島にも打寄せて来て、若いかれの血もその爲めに色濃く燃えたことがあつたのである。しかし今はかれはそれ以上に自己と人生とを考へなければならなかつた。哲太はかうした荒野の中に老いた人達と遠く異郷に離れた息子の放浪の生活とを並べて浮べて考へて、その現象の方が、實在の方が、さうした思潮や議論よりもつと深く意義のあることを思つた。

MSは曾て外國に行く汽船の中から、無線電信で、この荒野の老父母に自分の消息を報じたことがあつた。その噂は哲太も間接に聞いて知つてゐた。面白いサインだと思つた。そればかりではない、かれは折々それを頭に思ひ浮べて、その老父母が、巡查や刑事の探索に心を痛ませてゐたその老父母が、深夜に海上から来た無線電信に呼び起されたさまなどを想像した。またその老父母の喜悅を想像して、外國の作家の作の中にもありさうなことだと思つた。

『さうだ……夜中ぢやつた。ドンドン戸を叩くものがあるぢや、何だと思つて起きて見ると、電報だといふ……。海の船の中から来た電報だと言ふぢや。あの時は、日本も、俺がかうして野良に出て働いてゐる中に、えらく開けたなアと思つたよ。』

その話をする、主翁はかう言つて其時を思ふやうにした。

『でも、向うでも丈夫で結構ですな。』

『まア何かやつてるぢやらう。若いからな、まだ。やるだけやらなきやな……。何アに、俺なんか、年は取つてもな、まだ五年や十年、かうして働いて行けるぢやで、此方の事は心配は無用ぢやつて言つてやるんぢやが、それでも心配になると見えて、よく手紙をよこすよ。……』ちよつと途切れて、『それでも、貴公のところにも時にはたよがあるかな。』

『ちつともありません。』

『さうかな。矢張忙しいぢやな。』

其處に、老いた主婦が——主翁よりも疲勞と老衰との著るしく眼に立つ主婦が、茶と、ふかした馬鈴薯とを盆に載せたのを持つて来た。

主翁はすぐそれを一つ取つて、

『何うぢや。こんなものきり此處にはないぢや、でもな、これは俺が自分で手を下してつくつたのぢやで。旨いには旨い。何うぢやな。』
かう言つてむしやむしや食つた。

『折角ゐらしても、こんなものつきりで、何もお構ひするものがなくつて……。』
傍から主婦が申譯のやうに言ふと、

『何アに、哲なんか、かういふ生活も見て置く方が好いんぢや。旨いものはいつでも食つてゐらア。めづらしくもねえ。それよりも、かういふものでも食ふ方が却つてめづらしいんぢや。なア。哲太……』

あは、と笑つて、『それでも、今年は馬鈴薯だけはよく出来た。一株に、それは澤山についた……』

『矢張出来、不出来がありませんな。』

『それはあるな。まア、馬鈴薯なんかさう不出来ツて言ふこともないがな。今年は陸稻はすつかり駄目だな。』

『さうでしたか……』

『まア、爲方がねえ。今年には馬鈴薯でも食つて、冬を暮すぢや。何うぢや一つ、東京ぢやこんな旨い奴は食へんぞ。』かう言つてまたあは、と大きく笑つた。

哲太もそれを一つ取つた。哲太と主婦との間には、今度は東京にゐた頃の話やら、哲太の亡母亡兄の話などが始まつた。鶏が一羽、また縁側に上つて来て、何か頻りに啄いてゐるのが、午後の日のバツと照つた障子に映つて見えた。野をすぎて行く汽車の音が微かに聞えた。

主婦の口吻では、末の子のSが矢張落附いて此處で農耕をやつて呉れないのが心配らしかつた。かれ等の老いた生活の前には、何等縋るべきものなく、また光明もなく、希望もなかつた。『矢張、若いものは、

こんな田舎にはゐたくないだらうけれどな、哲ちやん。』かう主婦は話した。

總領の作は、父親が此處に引込む時、東京に獨立して残つたが、アメリカに行つてゐるMSは、その頃十二三で、そこから一里半ほどある小學校に通つて、それがすむと、父母に強請つて、土地の中學校から東京の私立大學へとやつて貰つた。父親もまだその頃は若かつた。子供なんかあてにしなかつた。何ういふ種類の人間にでもなれ、親の扶けられるだけは扶けてやるから、とかう父親は言つた。しかし今はもうさう言つてゐられなかつた。力と頼む杖がなくては、いかに氣丈な主翁でも段々さびしく心細くなつて來た。一層母親にはそれが身に染みて感じられた。

『一番末の子は女だか、役には立たんしな。Sに居て貰はなけりや本當にしやうがないんだよ、哲ちやん。此處に來てから、それは始終苦勞の仕通しをして、今になつて矢張かうして作の子供の世話までしなけりやならないと思ふと、お貞さんのやうに早く死んだ方がどんなに樂で好いかと思ふよ、哲ちやん……。』

『そんなことはありませんがね。』

『此處に來てから、二十年といふものは、それは働いたんだからね。並の百姓の上さんなんかよりも、もつともつと働いたんだから……。』

『でも、働いただけのことはあつたんでせう？』

『あるものかね、今でもかう貧乏してゐるんだもの。』

『地面がわるくつてな、此處等は……』主翁は傍から口を挿れて、

『土地が火山の灰ぢやでな。何をつくつても好く出来ない。……しかし、婆さまのやうに愚痴を滴してゐたつて爲方がないぢや。まア、働ける中は働くぢや。』かう言つて主翁は大きく笑つた。

哲太は種々なことを思はずには居られなかつた。いろいろな變遷のあつた世間を餘所に、日清日露の國を賭した戦争を餘所に、電話、電車、自動車、飛行機を餘所に、維新の功臣の凋落を餘所に、または世間に無数にある心の悲劇、虚榮の悲劇、男女の悲劇を餘所に、かうして荒野の中に老いた老人夫妻の生活を思ふと、かれは不思議な氣がした。續いてMSの數奇な不遇な生活やら、不毛な林や野やらが一緒になつてかれの眼の前を通りすぎた。MSが中學校に通ふ時分の日記に書いてあつた野山と若い心との入り雜つた記事なども思ひ出されて來た。MSは雪の深い中を衝いて、よく東京から、この荒野の父母の許へと歸つて來た。また霜の白い寒い朝を林を横ぎつて停車場へと行つた。MSはその時分よくその荒野のことを哲太に話した。日のさし透る晩秋の林、火のやうに美しく輝く紅葉の山巒、原始の空氣の漲つてゐる原野、さういふ中からMSのやうな烈しいSocialistが出たといふことは大きな事實ではなかつたか。哲太はつゞいて主翁夫妻とMSとの間にある自分の生活を深く考へた。

『山や島を見せて戴きたいと思ふんですが、……それも今度來た用事の一つと言へば一つなんです

ね。』

暫くしてかう哲太が言ふと、

『山なんか見て、何うするんぢやな。』

『別に何うするつて言ふこともありませんけれど……。』

『貴公も開墾でもやらうつて言ふのか。』

かう言つたが、哲太の返事を聞かずに、『まアゆつくりして行けや。久し振りだ。一晚是非泊つて行けや。蕎麥位、婆さまが打つわ。』

『これからでも遅くはないでせう?』

『山見にか? 遅くはないがな。山なんか見たつてしやうがないぞ。まア、ゆつくり一晚泊つて、明日にする方が好い。』

『さうなさいよ。』かう傍から主婦も言つた。

『でも……。』

『行つて見るか。案内するのはわけはない。それぢや行くか。行つて俺の半生の失敗の跡でも見るか。』かう言つて笑つて主翁は立上つた。

主翁は先に立つて歩いた。

『初めは餘程、廣くやつたんですか？』

かう哲太が訊くと、

『なアに此處等は荒地で、来る時は唯貰つたやうなもんぢやつたぢや。山と藪地と十二三町もあつた。その他にも、今だにこんな廣く明いてゐるぢやから……。』

『地面が何うしてもいけませんかな？』

『俺が來た初めには、一番先に水がなくて困つた。なアに、地面はわるくつても、水さへ十分にあればと思つて、これから先一里ほど向うにある谷川の水を引いたぢや。その事業でも中々大變ぢやつたぞ。漸く水が十分に自分の畠に來るやうになるのには一二年かゝつた。それから麥もつくつて見れば、陸稻も作つて見たが、何うもいかんぢや。それから五年目には、果樹園を少しやつて見た。これも駄目ぢやつた……。』

林檎ですか、葡萄ですか。』

『兩方ともやつて見た。林檎はかなりに出來るぢやが、何うも手がかゝつて、とても駄目ぢやのよした。葡萄は何うも地味に合はんと見えて、蟲が澤山つくので、一年でやめた。』

『何が一番成功した方です？』

『鶏なんか旨く行つた方だな。鶏卵は一時かなり多く出したぢや。』

『今はやつてゐないんですか。』

『つい、此間までやつてゐたがな。何うも手が足りんで、面倒でな。』

『五穀では麥ですか？』

『まア、麥ぢやな……。それでも、國あたりで出來る半分も出來ないからな。勿論肥料の足りんためもあるぢやが……』

段々その畠や野——主翁が半生の心と力を灑いだ『廢墟』が現はれ出して來た。麥の蒔かれた畠もあるが、それは割合に少く、大抵は一度耕された田や畠が再び元の草藪になつて了つたやうなところが多かつた。掘り割つた小さな水路の水は枯れて、其處には落葉が一杯に詰まつてゐた。

『盛にやつた時には、随分百姓も雇つてやらせて見たんだがな。』

あるところ來た時には、主翁はかう言つて、昔の事業を振返つて見るやうにして、

『矢張世の中は思ふやうには行かんわ。』
果物を栽培したところもやがてあらはれて來た。それは荒野の一ところに靡いてゐる丘の裾のやうなところで、一二町の面積を占めてゐたが、もうとうの昔に棄て、顧みないために、址といふ址も認められない位にあたりは荒廢して、半は始めの草藪になりかけてゐた。二人は話しながら、其處を通つて、細い路を辿つて、丘の上へと登つて行つた。

主翁は一度捨てた世間にまだ意があるやうに、をりく、足を留めて、八十近くで政權を握つた大隈内閣の話などをしながら歩いた。支那やヨオロッパの話などをもした。

丘はさう高くはなかつた。その上はや、平らになつてゐて、石などがところどころに散ばつてあつた。MSが少年時代によく登つて空想に耽つたところは此處である。やがて二人はその上に行つて、石に腰をかけて休んだ。

野は今夕日に彩られつゝあつた。ところどころに林があり、それを縫つて小川が光り、路は眞直にそこから停車場の方へとつゞいてゐるのが眺められた。雲は低く赤く平蕪の上に流れた。

二人はその眺めに心を奪はれたやうにして黙つて何も語らなかつた。主翁の心にも哲太の胸にも、人生の艱難と時の推移とがありく、と浮んで見えた。

『此の下のところは、大抵貴方がやつたところですか。』

かう言つて哲太が沈黙を破ると、

『まア、さうだな。』主翁も眼をあげてあたりを眺めて、『あの林があるな、あのあたりまでさうだ。』

『随分廣いには廣いんですね。』

『何うも矢張資本がなくてはな。いくら廣くつても駄目ぢや。それでも林は割合に成功した方ぢや。皆な五六年で薪に伐つて了ふんだがな。』

『大きくした方が好くはないんですか。』

『六年目位で伐る方が得ぢやな。』

二人はまた黙つた。

林に添つた路を馬に乗つて駛つて来る青年の姿にふと眼をとめた主翁は、

『お、Sが歸つて來た。』

かう言つて、『おーい。』と聲をあげて呼んだ。その呼聲は野から林に向つて大きく反響した。

『おーい。』

林の蔭にもう少しで隠れやうとしたその青年の馬上の姿は、その呼聲を耳にして、ふと此方を見たが、その眼には、丘の上の夕日のか、やきの中に父親と見知らぬ人とが二人立つて此方を見て呼んでゐるのが小さく映つたと覺しく、やがて馬の首を旋らして此方へと駛らせて來た。

暫くした後には、Sは既にその丘の裾のところへと來てゐた。

此方から二人は下りて行つたが、哲太の眼には、筒袖を着た元氣な莞爾とした青年の姿がやがてはつきりと映つた。頭には古ぼけた帽を被つて、長く生えた髪が襟元までかゝつてゐるが、此の青年にも、矢張父親やMSの熱い烈しい血が流れてゐるらしく、到底荒野の開墾者の後繼者に満足してゐられないやうな光りが眼の中に見えた。鼻から額にかけて何處かMSに似たところがあつた。

『何うだつた？』

『皆く行つた。拂つた。』

この短い會話で町に行つた用事をすましたが、やがて主翁は、『そら、知つてゐるだらう。東京の……』かう言つてSを哲太に紹介した。Sは丁寧に辭儀をしたが、しかも客の體中から東京の空氣乃至世間の功名をさがしてもするやうに凝と長く哲太の方を見詰めた。Sは平生あくがれてゐる都會の文明が客を透してこの荒野に微かに波打つて來たのを感じた。若い胸は躍つた。

哲太は哲太で、ノルウェイの作者の書いた山の中にある青年を思ひ起した。山の彼方に雲の湧き上るのを望んでゐる青年、草の中に身を埋めて美しい世間の幻影に心を躍らせてゐる青年、さうした青年はこの荒野の中にもあるのである。哲太は續いてその幻影の時の間に崩れて行くさまを想像した。また老いた心と若い心との間に横つた悲劇を想像した。

三人は各自違つた心持を抱いて、林に添つて歩いた。しかし會話は少しもその互の心には觸れなかつた。

『この林はそれでももう大きいですな。』

『少しは大きくもして見やうと思つてな……それから、炭焼を少しばかりやつて見たことがあるぢや。これはもつと山の中ぢやが、これも手さへありや間には合ふ……。山の中ぢやな、薪にして出すのは臆

劫だからな。』

『さうでせうな。』

町から買つて來た種々なものを鞍につけた馬は、Sに手綱を取られながらも、路傍に残つた草にをりをり心移して立留つた。そしてシツ／＼と聲をかけられる度に、馬はのそ／＼と歩き出した。

暫く行つたところで、主翁は、

『俺はもう少し此方を廻つて行くぢやで、先に歸れや、お袋が待つてゐるぢやから……』

かう言はれて、すぐ點頭いて、Sはひらりと馬に跨つた。そして無言で哲太に挨拶して、鞭を一當あてると、馬は夕日のさし透つた落葉の林に添つた眞直な路を逸早く驅け出して向うに行つた。

『好い青年になりましたな。』

『駄目ぢや。若い奴等は駄目ぢや。』

かう言つて主翁はさびしく笑つた。その笑ひの中には、哲太の將來の運命が同じくさびしく微笑んでゐるやうな氣がした。哲太の眼には家庭にゐる大勢の子供達が映つて通つた。二人はそれから林をめぐつたり畠に添つたりして家路へと就いた。

強ひて留められて一夜泊つた荒野の印象は深くかれの心に刻みつけられた。主婦は老いた身であるに

拘らず、珍客だと言つて、歸ると、風呂を立てたり、自分の畑で取つて手づから引いたといふ蕎麥を打つたりして待つてゐて呉れた。庇の下にある古い風呂桶の中からは、ぼつと夜霧に包まれた野や林が、やがて登り始めた月の光に銀のやうに輝き出して來るのが見え、風呂の火を燃してゐるSの顔が赤くほつかりと薄い闇の中に浮んでゐるのが見えた。かれは風呂に浸りながら、Sに東京の話や、アメリカの話や、MSについての話などをした。青年の心をそゝるやうなことは成るだけ口にしないやうにしたが、それでもSの心は際涯なく別な世界に向つて波打ちつゝあるのを見た。Sはをりく深い冥想から蘇つたやうにして、風呂の竈の中に粗朶を投げ入れた。

と、ぼつと火が燃えて、Sの亂れた頭髮と筒袖姿とが向うの壁に大きく黒く映つて見えた。

家の破れた壁、乃至障子などに張つてある石版繪や錦繪や古新聞紙などにも、この主翁が世間に離れていかに長い年月を過したかといふことが一々指さされた。この家の人達に取つては、曾てSのやうであつたMSと、これからMSのやうにならうとするSとを除いては、世間にあることは、あるゆる世間の變遷は、何等の交渉のないもの、やうに見えた。無數にあるあらゆる悲劇も、國を賭しての戦争も、男女の深い煩悶も、美しい歡樂も、皆なすべて同じやうに、何の思ひをも惹かずに、破れた隙間隙間に張られて、そして年を経て、黒く煤けて行くのであつた。野から歸つて來て、縁側の壁に、十年ほど前に世を騒がした美しい男女の情死の記事の煤けて張られてあるのを見た時には、哲太は一種不思議な感

に撲られたことを思ひ出した。

膳に載せられた肴には、何うせ碌なものではなかつたけれど、また町で出來るといふ地酒は、薄く且つ臭かつたけれども、それでも主翁夫妻の款待は、かれに久しく味はない心安さを與へた。かれは初めは無氣味がつて傍にも寄つて來なかつた子供達の段々かれにまつて來るのを見た。矢張、かうした荒野の中にも楽しい夜の團樂はあるのであつた。

主翁の口からは、開墾についての苦心やら、税が年々増加されて次第に經營が困難になつた話やら、其他いろ／＼なことが飲み且話された。Socialistの群の話、それからつゞいて、大隈内閣の話、海を隔て、行はれてゐる大きな戦争の話、個人思想の専制國にあらはれた形と共和國に現はれた形との差違、さうした話なども出た。Sは傍に侍して黙つてそれに聞き耽つた。開墾の話が哲太が持ち出した時には、『何うも何事も世の中は旨く行かんものぢや。百姓だつて、さう他で見たやうに暢氣なものぢやない。』かう主翁は自己の後半生の經驗を背景にしたやうな口吻で言つた。

一枚雨戸を繰つて外側へ行つた時には、月は既に平野を照して、薄い白い靄が刷毛で撫でたやうに林に沈んで靜に靡いてゐるのが見えた。野は原始の状態に返つたやうに寂然としてゐた。

襟のよごれて冷たい夜着に煎餅のやうな薄い蒲團を敷いて寝た哲太は、いろ／＼な思ひに襲はれて、終夜眠ることが出來なかつた。酒を飲みながら、主翁とSと三人署名してアメリカのMSに記念の端書

をやつたことや、朝鮮に行つた山の青年のことや、残雪の下に靜かに眠つてゐる和尚や、未だに都會に
かれを待つてゐる女や、家庭の悲惨な状態や、さうしたものが押へても押へても盡きずに集つて來た。
夜半からは風が出て、林が鳴り、草藪がざわつき、雨戸がガタ／＼した。隙間だらけの壁の傍に臥した
かれは丸で荒野の中に身を横へてゐるやうな氣がした。

三十年も前に眼にした生活が長いライフの中から一とこ切離した繪のやうになつて見えた。其處に
はかれの母親もれば、新たに妻帯した兄もゐる。かれはまだ袴を裾短に穿いて元氣よく歩いてゐる青年
である。それは丁度家が近い爲めに主翁夫妻とよく往來した頃で、主婦とかれの母親とは、常に長火鉢
を前にして、勝手元の用事の濟んだ後の午前を、長い長い饒舌に過した。主婦は母親よりは十歳位若く、
MSが、漸く三つか四つ位で、可愛い盛りで、主婦の膝の上におとなしく凭りかゝつてゐたりしてゐた。
其處に兄の妻になつたばかりの嫁がまだ島田髷を高く結つて、恥かしさうにして庭を前にして裁縫に坐
つてゐた。柴垣の外は通りで、さまざまの物賣の聲が往來した。

電車はまだなかつた。人は何んな遠い處でも車か徒歩で行つた。従つて町の通は賑やかで、店の前な
ども到る處客が大勢たかつて物を買つてゐた。なまこ漆喰の塀などもまだ處々に残つてゐた。かれ等は
まだ十分に維新後の士族の零落の艱難を脱し得なかつた。殿様の話や、大小を挟んだ話や、扶持米を毎
月馬が家の垣の外に運んで來た話などをして、過ぎ去つた昔を語つた。故郷の城の焼けた時の話などを
もした。主婦が午後によつて來ると、哲太はいつも町の通りに焼芋などを買ひにやられた。

主翁はまだ其頃は四十にもならない若さで、『お貞さん!』など、母の名を呼んで、表から入つて來た。
哲太に向つては、『豪くならなくつちやならないぜ! 父さん豪かつたんだからな。』など、言つた。

かれ等はその時既に哲太が後に経験したやうな世間、または生活、または艱難、または男女の悲喜劇
を十分に経験して居たのであつた。今にしてその時分の繪を廣げて考へて見ると、矢張其處にも戀の渦
巻や、嫉妬の炎や、孤獨や、發奮や、女が子を持つてから後の男の遊蕩や、子があるために、そのため
にのみ心の離れた夫を捨て得ない妻の苦悶や、別れのつらさや、青春の亡びて行く悲哀や、その月々の
晦日を苦勞にする生活難や、寒い夜風や、冷めたい月が依然としてあつたのであつた。否、美しい女の
肌も、酒に亂れた宴も、二つにも三つにもわけられる女の心も、悪も、罪過も、何も彼も……。

かうした荒野の中の主翁夫妻の生活、その生活にさうした過去の繪が深く巻き納められて居るといふ
ことは、今にしてはちよつと想像にだにも及ばないことである。また全く想像に過ぎないかも知れない
のである。しかしまたさうした繪があつてそしてこの荒野へ來たのかも知れないのである。ふと主翁と
哲太の母親の友情の蔭にかくれてゐる深い秘密のやうなことが考へられて來た……。

哲太は飄つて自分の通つて來た生活の繪巻を頭に浮べた。一度はかれはかれの生きた生活のみが貴重

だと思つた。自己の本當の生活によつてのみ世界が新しくされると思つた。昔の人達の經て來た虚偽と妥協の生活は、かれの時代を以て終りとすると思つた。しかしそれは單に自己の建設または荒廢だけに役立つたのみで、すべては皆なすべての生活を持つてゐるのであつた。かれの生活は主翁の生活と同じやうにして過ぎ去つた。また現に過ぎ去りつゝあつた。

大きな生命の流れをかれは眼の前にまざまざと見るやうな氣がした。かうして荒野の荒屋の中に終夜眼覺めてゐるといふ形は、その大きな流れの中の點のやうなものではないか。またかれのために貴重な記念とすべき繪卷の一つではないか。——外は、晝のやうに明るいらしく、兩戸の隙から月の光がさし込んで來て、それが障子の棧のところをなして映つた。家の周圍を落葉のころがる音がした。

翌朝は早くわかれを告げた。

『もう滅多にお出になるやうなことはないでせうから、また、いつ逢はれるか。』

かう悲しさうにして、老主婦は別れを惜んだ。主翁にもまた元の生活にかへるのがさびしさうに見えた。

『なアに、まア、お互に丈夫でゐさへすればまたいつでも逢はれるぢや。まア働くのが肝心ぢや。人間は死ぬまで働かさへすればそれで好いのぢや。』かう元氣には言つてゐるけれども、その顔にも長い髯

にもさびしさうな色が漂つてゐた。時は忽ちにして過ぎ去るであらう。頃刻にしてこの主翁夫妻の墓をこの荒野に築くであらう。その墓には草が生えるであらう。冷めたい月が照すであらう。野は再び原始の状態に戻るか、でなければまた新しい人が來て耕し且開墾するであらう。哲太はたまらない悲哀がその胸に簇つて來るのを禁めることが出来なかつた。

『では……』

『歸るかな。それでは……』

かう言つて立つて主翁夫妻は縁側から外へ出て來た。息子のSは、好いと言ふのに停車場まで送るのだと言つて、既にそこに來て立つて待つてゐた。

『アメリカにも手紙を出しますから……』

『何うか。さうして呉れ。そして丈夫でゐるから言つてやつて呉れ。』

で、哲太は別れた。家から野へ、野から林へと一步一步その姿は離れて行つた。哲太は何遍となく振り返つた。最後の林の角で振り返つた時にも、主翁夫妻がさびしさうにして、同じ位置に立つて、そして此方を見てゐるのを見た。

路は林の中に入つた。

『お父さんや、お母さんは淋しいんだらう。』

かうかれはSに言った。

Sは黙つてかれの顔を見た。父母よりも、かうして野に一人取残されて働いてゐる自分の方が一層淋しいといふやうな顔の表情を見せて……。

暫らく互に黙つて歩いたが、

『もう、何うしても、來月か來々月は東京に出るつもりです。とても、こんなところにあるては何にも出來ませんから。』

かうSが突如として言った。

『でも、年寄が困るだらう？』

『いゝえ、好いッて言ふんです。貴様のやうなものは、あてにはしてゐないから、思ひ立つたら、いつでも出て行けッて言ふんです。』

『でも……』

かう哲太が言ふと、

『それは困るには困るだらうと思ふんですけども……僕だつて、こゝにいつまでかうしてゐたつて際限がないんですから……。何も出來やしないんですから。それで、草鞋や筵なんかを夜なべにつくつて、東京に行く金にしようと思つて、もう餘程前から心がけてゐるんです。もう、大分貯りました。』

『そして、東京に行つて、何をやらうッて言ふんだね？』

『何だかわかりません。けども、兎に角東京に行かぬけりや爲方がありません。それや、私は兄弟の中で一番馬鹿を見たんですから、總領の兄貴やアメリカに行つてゐる兄貴なんか、まだ父が元氣でしたから、中學へでも何でもやつて貰へたんですけど、僕ばかりは、小學校を出たきりなんですから。』

『しかし東京へ出たッて苦しいことばかりだよ。思つたやうに、東京に好いことばかりが待つてゐやしないぜ、君？』

『苦しいことは何んなに苦しくつたッて好いんです。何でもやります、何んなことでもやるつもりです。無意味に此處で働いてゐるよりも、その方が好いんですから……』

哲太はさうした青年の心を強ひて留めることは出來なかつた。Sの言ふところにも眞面目な首肯される若い心が儼として動いて横つてゐるのであつた。またいくら經驗したものがその經驗を引例にして言つて聞かせたところで、それが若い心に油をこそ注げ、決して理解されるものでないことをかれは十分に知つてゐた。

かれは黙つて歩いた。林は林に續いた。

若い心が都會に向つて靡くさまをかれは到る處で見知つてゐた。それは澤山に澤山にあつた。微塵數も管ならざるほどにあつた。曾てはかれもその一人であつた。またかれの子供達もその一人にならう

としつゝある。否、今日ばかりではない、遠い過去にも將來にも矢張かうした若い心が絶えず生滅してゐるのである。かれは宋人の『老去功名意轉疎、獨騎瘦馬取長途、孤村至曉猶燈火、知有人家夜讀書』と言ふ詩を思ひ出した。

實際、この曉に至るまで燈火をかゝげて書を読む若い心は悲しいと言つて好いかまた勇ましいと言つて好いかわからなかつた。彼等はその前に横はつてゐる幻滅又幻滅を知らないのである。また知つてゐても、まだ經驗をしないので、自分でやつて見なければ承知が出来ないのである。かれ等はさうして水と火とに打突かるのである。また無數の思ひのまゝにならない不可能のシインに面するのである。神と悪魔とに逢つて懊惱するのである。或るものはこの若い心を抱いて千仞の谷に身を投じて自ら殺した。またあるものは冷めたい鋼鐵のレールの上に身を横へた。またあるものはその水火に、その不可能に、その神と悪魔に虐まれて、魂を失つて、唯徒らに生活のために生活することになつて了ふのである。哲太は既に世間にあつてさうした光景に無數に接した。そしてそれは男ばかりではなかつた。女も矢張さうであつた。女も虚榮から眞實に達する辛い道を歩かなければならなかつた。新婚の夢は忽ちにして幻のやうに消えた。冷めたい家庭の空氣が續いてやつて來た。

しかし印度の聖者は言つた。『何の故に？ これも亦人間として生れたるが故に……』人間たるが故に、目前一寸のところにさうした無數の幻滅があるのを知りながら、しかも何うすることも出来ないのである。哲太にしても、さうした世間を通過して來た哲太かれ自身にしても、矢張人間たるが故に、人間として生れたるが故に、猶その幻滅のその前にあるのを知らずに、かうして荒野の中をさまよつたり山の奥に入つて行つたりしてゐるのである。あの主翁にしても矢張さうである。またアメリカにあるMSにしてもさうである。

かれは續いて若い時分旅をした頃に、或海に近い峠で、若い郵便脚夫と一緒になつたことを思ひ出した。赤い頬をした肥つた元氣の好い青年であつた。それが矢張都會に出ることを唯一の希望にして、其處を黄金の理想境のやうに思つた。かれと青年とは長い二三里の峠道をさうしたロマンチックな空想を語り合ひながら歩いた。海の日に光るのが美しくその峠の到るところから見えた。かれ等は峠に近いところで、林の中に入つて、パイプにする形の好い木などをナイフで伐つた。その青年は今何うしたであらうか。哲太の頭に印象されて残つてゐるのは、今も矢張頬の赤い元氣な青年の姿であるけれど、かれも亦幻滅に幻滅を重ねて、思ひのまゝの十の一も満足させることが出来ずにそのまゝ年を重ねたであらう。かう思ふと、その傍にとぼく歩を運んでゐるSが、矢張その青年と同じやうな氣がして、人間としての苦惱が他人事とは思はれないやうに深く哲太の體に染み渡つた。

『時の間に墓になつて了ふ主翁夫妻の苦惱も悲哀も、この都會にあくがる、Sの苦惱と悲哀と同じではないか。また自分のかうして處を得ずして放浪してゐる心と同じく續いてゐるのではないか。』

哲太は突然訊いた。

『東京に行つて、する爲事はきまつてゐるのかね?』

『何にもきまつては居りません。しかし、働くです。何でもして働くのです。體は丈夫ですから。』

『かういつてSは健かな腕を見せるやうにした。』

『まア、働くさ、若いんだから。』

『さうですとも……。働きさへすりや、身を粉にする氣なら、どんな事でも出来ないツて言ふことはありませんから。』

『それはさうだ……。』

老いた父母のことがまた口を上らうとしたが、哲太はそれを押へた。

Sは話した。

『アメリカの兄も來いつて言ふんです。内地にぐづくしてゐるよりも、此方に來た方が好いつてよく言つてよこすんです。いくらでも働く爲事はあるツて言ふんです……。しかしそれには旅費が要りますから、東京に行つて、働いて、それを拵へて行かうと思ひます。アメリカの兄も、出來たらいくらか送つて呉れる筈ですから。』

『まアやるサ。』

かれ等は林の中を通つて、段々野の方へと出て來た。しかし、移住者が少いので大抵は草藪で、畠などは餘り多く其處等には見當らなかつた。

昨夜は風が強かつたので、幸ひに霜は餘り深くなく、平生なら、霜解の泥濘がひどいであらうと思はれる路も、さう大して苦にはならなかつた。

Sは捷路をして、細い草路を通つてずん／＼歩いた。

『あ、あれが停車場だね。』

『さうです……。』

かれ等の前には、廣い野の地平線の末に小さくつきりと停車場が見えた。昨日やつて來た路とは違ふと思つたら、それはかれが下りた一つ手前の停車場であるのがやがてわかつた。

『此方の方が近いのかえ?』

『いくらか近いです。』

『何うも路が違ふ、違ふと思つてゐた。』

『さうですか、昨日はあつちからお出になつたんですか。しかし、判り好いには、あつちの方がわかり好いかも知れません。』

停車場は次第に近く、その位置や、レールにつゞいて並んだ電信柱や、その附近にある信號柱や、朝

日の明るくさし渡つてゐるブラットホームなどが段々はつきりとかれ等の眼に映つた。停車場の前にある二三軒の人家、それもこれ以上発展しやうにもしやうのないやうなさびれた外観で、休茶屋らしいものもなく、大抵は荒野の開墾者がそこに生活してゐるらしく見えた。

停車場に来て見ると、丁度好い鹽梅に二十分ほど待てば上りがやつて来るやうな時間であつた。待合室には綿ネルの黒い襟巻をした老いた百姓と、此處等に見る鞍のきれた田舎娘とが淋しさうに待つてゐた。

停車場の向うには、葉のすつかり落ちた林に、朝日が美しく線を成してさし込んでゐるのが見られた。

『まア、しかし、年寄には餘り心配をかけない方が好いよ。』

『え……大丈夫です。』

『父さんだつて、元氣には働いてゐるけれども、もう年が年だからな。』

『さうです……』

Sはかう點頭いた。

『また、何うしても東京に出るやうになつたら、家にもやつて來給へ。またいくらか力にもなれるかも知れないから……』

『難有う。』

哲太はさびしい心で、筒袖姿のSが其處此處と待合室の中を歩いてゐるのを見た。つゞいて荒野の中に二人さびしく残された主翁夫妻を思つた。いろ／＼なことがまた押寄せて來た。MSのことからそれに連繋したT事件前後の空氣が色濃く繰返されて來た。やがて改札口が開かれて、汽車の窓から見た時には、荒野の方へと歸つて行くSのさびしい後姿が見えた。

MSが外國に行く時分の複雑した空氣が哲太の頭に絡み附いて見えた。その時分、かれは何うした態度で、また何ういふ心持で世間に生活してゐたであらうか。

MSとは無論かれは違つた考へを抱いてゐたのである。かれはMS並びにその一派の抱いた思想を餘りに空想に過ぎるものと思つてゐたのである。それに、MSは年齢から言つてもかれよりは一時代若い。言ひ換へれば一時代新しいのである。しかしMS達に烈しい驀進があつたやうに、かれには戦慄と思ふまゝにならない虚偽の世間があつたのである。反抗から來た乃至は魂に面した不可能から來たデカダンがあつたのである。あらゆるものから味つた幻滅、またはその幻滅の底に潜んだ疑惑があつたのである。何うして好いかわからなかつたのである。自分で自分の内部の活闘を凝視し客觀する餘裕を持つてゐなかつたのである。かれは皮肉な解剖と否定の冷笑とに僅にその心の平均を保つことが出來た。もとより

かれは死人の皮を煙草入にして喜んでゐるデカダンではなかつた。またわざとそのデカダンを肯定して自ら甘んじてゐるものでもなかつた。従つて皮肉の底にきらめく魂と、解剖の奥にひそんでゐる不可解とがいつもかれを脅かした。かれは賑やかな街頭の夜を戦慄しつゝ歩いた。そしてかれはロシアの文學に、一時アルコオルと肉慾に沈湎して、纔にその疑惑と戦慄と壓迫との苦痛を忘れやうとした傾向があつたのと、それと同じやうな形を取つて、酒と女の許へと走つた。

かれは泥酔して電信柱に突當つたことも思ひ出すことが出来る。激昂して盃を卓の上に叩きつけたことも思ひ出すことが出来る。同じ群の人達とあるレストランに寄り集つた時、柄にも似合はない獅子吼をして人を驚かしたことも思ひ出すことが出来る。人生を何うすることも出来ない畏にたとへたことも思ひ出すことが出来る。啼き喚く子供達をあさましく思つて、家庭を動物園にたとへたことも思ひ出すことが出来る。女から女へと移つて、それを玩弄物にするところに皮肉味を感じて自ら快としたことも思ひ出すことが出来る。自己の眞面目な一死は決してこの無窮の人生のために徒爾でないと信じたことも思ひ出すことが出来る。

かれは到るところにかれの惨めな姿を発見することが出来た。深夜の赤電車のがらんとした中に、または赤く爛れた無意味の快樂の中に、レストランからレストランへと蹠踏として酒をあふつて歩く群の中に、夜更の郊外の茶畑に接した垣根の中に、または馬鹿な奴だと自分で罵りながら女の澤山ある川に

臨んだ一間の中に……。

その時分である、かれの兄が病んで死んだのは——。不如意と不遇と貧窮との中に正しいしかし惨めな一生を背景にして死んだのは——。かれに取つては、兄は幼時から艱難を俱にしてやつて来た唯一の理解者であつた。また兄に取つても、かれは唯一の力ある同情者であつた。それにも拘らず、死ぬとすぐかれは兄の一生を冷かに解剖臺に上せて解剖した。兄の生活には世間に捉へられた形があるからいけないと言つた。弱者の生活だから呪ふべきものであると言つた。弱き者は死せよ、この人生の重荷に堪へられないものは遠慮なく死せよ。弱肉強食は眞理ではないが、しかし妥協の生活を行ふよりは寧ろ潔く死んだ方が増してある。兄よ、死せる兄よ、再び世に生れん時は、強者の血を持つて来れ。かうかれは兄の屍に對して言つた。そしてその言葉の終らない中に、涙は滂沱としてかれの頬を傳つて流れた。

軍人の銅像の立つてゐる町の四辻は雑沓を極めてゐた。

電車は右から左から不愉快な音響を漲らして動いて来た。西洋料理店、小間物店、果物商、帽子商、甘栗の招牌、煙草屋の店、あは餅屋の刺戟の強い赤いペンキ塗りの店、さうした都會の街頭を群集が右往左往に往來した。

もう日は暮れ近かつた。初冬の頃のいつもの晴れた空に似合はず、その日はいやにどんよりと曇つて、

押しつけるやうな、悲しむやうな、または普通とは違つてゐるやうな空氣が佗しくあたりに漂つてゐた。西の方を劃つた空には、赤く濁つた夕日の色がそれとなくおぼろげに見えて、往來の氣勢から街頭の具合から、すべて何か事ありげに見えた。

『號外、號外。』

いつもそこに立つて新聞を賣つてゐる青年の聲もいやに昂奮して聞えた。

『夕刊、夕刊、號外つきの夕刊！ 大變な號外つきの夕刊！』

かう叫んで自暴のやうに鈴を鳴らした。

都會の要衝な地點だけに、いつも賑やかなところであるけれども、其日は殊にごたくした佗しい曇つた光景を呈してゐた。夕刊賣の聲にしても、日露の戦役とか、社會の新事變とか云ふやうなことを報ずる時の聲の朗かに晴れやかなものには似ず、夥しく變つた調子を持つてゐた。

『夕刊、夕刊、大變の夕刊、號外つきの夕刊！』

其處でも此處でも、さうした呼聲が高くきこえた。

人々は争つて買つて、そして向うに歩いて行つたり、其處にやつて來た電車に乗つたりした。アスハルトを敷いた街路の隅では、その賣子の五六人が其處此處に陣取つて、新聞社から持つて來た部厚な夕刊紙の堆積から一枚一枚急いで折つてゐるが、それが間に合はない位にすぐ賣れて行つた。

電車は引切りなしにやつて來ては、其處に留つて、客を下ろしたり乗せたりして通つて行つた。

しかし群集の中には、さうした夕刊賣の叫聲にも頓着せずに、平氣でのんきさうにアスハルトの路を通つて行くものもあれば、角の帽子店でシャツや帽子を買つてゐるものもあつた。その時分流行つたクラツカアを製造してゐる小店では、それを買つて、風呂敷に包んでゐる庇髮の細君などもあつた。樽柿や林檎やバナ、を並べた店では、小僧が客に何か言ひながら、頻りに古新聞に包んだ果物の包に赤い紐をかけてゐた。

その時、銅像の後にある大きな赤煉瓦の停車場から、ふと群集に雜つて、外套に身を包んだ太い蝙蝠傘を持つた男がこゝみ加減に電車の方へ歩いて來るのが見えた。それは哲太であつた。

かれは混雜した四辻に來ると、サンドウィッチマンの大きなピラとその呼聲と鈴の音とにすぐ心を惹かれたやうに見えたが、そのまゝ、その傍に行つて、外套のポケットから銅貨を賣子に渡して、そして夕刊と號外とを持つて、兩國橋の方へ行く電車に乗つた。

電車の中でも、窓から手を出して夕刊を買つてゐるものが二三人あつた。

哲太は腰をかけるとそのまゝ、すぐ夕刊をひろげてそれに眼を注いだ。かれはぢつとしてそれに讀耽つた。暫しは顔をも舉げなかつた。かれの頭には種々な光景が映つて見えた。やがてかれはそれを外套のポケットに押込んだが、しかし大きな二號活字は長い間かれの眼の前にチラついて動いた。

かれの行く先には、川に面した狭斜街があるのであつた。酒があるのであつた。女があるのであつた。魂を滅ぼすやうな爛れた快樂があるのであつた。泥酔があるのであつた。やがて顔を仰向け加減にして、凝と空間を見詰めたが、その顔は長い間少しも動かさずに蒼白く群集の中に見えてゐた。

『何だ、貴様は泣くのか。泣くのは止せ。見つともないぢやないか。』
かうPは留めた。

『だって、これが泣かずにゐられ……る……か。』エイと長く引張つたやうに、殆ど昂奮し切つてこらへじやうがなくなつたやうにしてKは泣いた。それは明るい電車の中であつた。少し低頭き加減になつたKの涙に濡れた蒼白い顔には明るい電氣の光線がさした。

『魂を……魂を失つて……それでも猶……猶……我々は……』

泣き饒舌るのを、隣に腰かけてゐたこれも矢張夥しく酔つてぶん／＼アルコールの匂ひをさせてゐたNは、

『おい、K……。貴様は泣くのか。泣け、泣け、大に泣け。我々のために泣け。貴様は好い男だ。血もあり涙もある男だ。實際泣かすにはゐられないぢやないか。』かう言つたが、そこに釣革にぶら下つて矢張踉々踏々としてゐるPに、

『貴様は酔はんな。』

『酔つた……』

『酔はん……。だから、貴様は冷めたいつて言はれるんだ。何も……。何も……。人間は自分の持つたものを祕密にしてゐることはないんだ。我々は我々の持つて生れて來た生を有効に……。有効に……。最も有効に……』

あとは舌が纏れて半ば途切れるのを、

『わかつたよ、わかつたよ。』

『分かつたか、P……。わかれや許してやる……。貴様の鼻が待つてゐるんだらう。さうだ、貴様の鼻は可愛い鼻だ。わが黨の士だ。だからかうして貴様を皆なして家まで送り届けてやらうと言ふんだ。それで我々はかうして來たんだ……』胸を大きくはだけて、『酒でも飲むより他に爲方がないぢやないか。』

『本當だ。Nの言ふ通りだ……。本當だ……。酒でも……。飲むより……。他に……』今まで涙を流して頬りにそれを拭いてゐたKは、かう言つて赤く酒に爛れた顔を上げて、

『P!』と絶叫して立上つた。

『まア、好いから、おとなしくしてゐたまへよ。貴様の言ふ事はすつかりわかつたよ。』PはKの顔の傍に顔を寄せて、何か一言二語言ふと、すつかり手軽く共鳴したといふ風に、

『よし、よし、さうだ。さう君が思つて呉れさへすれば好い。あいつの言ふことなんか何うでも好い……何うでも好い……』またぐつたり頭を低れた。

誰も皆夥しく酔つてはゐるけれども、それでもPとSとRとはいくらかしくかりしてゐる方であつた。Pは席が明いてゐるにも拘らず、釣革にぶら下つて立ち、その向うにRが並び、S一人その前に腰をかけて、昂奮したしかし何處か眞面目な表情をして腰をかけてゐた。

SはRから話しかけられても、小さく點頭くばかりで、唯深く痛感したといふ風にして、Nだの、Pだの、行動をぢつと睨むやうにして見てゐた。

何か言つてゐるが、突然NとKとは立上つた。車中の視線——視線と言つても、この群達と哲太とその他に中年の女が一人隅の方に腰をかけてゐるばかりであつたが、何事かと思つて、喧嘩でも始まるのかと思つて其方を見た。

『K!』

『N!』

かう互に名を呼んで、二人は感極まつたやうにして、立つたまゝ互に體をしつかりと抱き合はせた。つゝいて、『握手!』かう言つて堅く手を握り合せた。二人はよろけながら、長い間その抱き合つた身體を離さなかつた。

哲太は黙つてその光景を見てゐた。萬感が胸を衝いて來た。悲しい人生の縮圖をまざくくと眼の前に突きつけられたやうな氣がした。しかしそれには頓着なく、電車はそのまま、深夜の街頭を停留場毎に留りつゝ進んで行つた。やがて哲太の下りるべき停留場は來た。哲太は下りた。下りてからもかれはぢつと立つてその電車を見送つた。その電車はさうした破壊された慘ましい魂を運んで世界の果まで行くやうな氣がした。

『もう好いんだ。あんな奴はあれで澤山だ……。誰れか他のを聘んで呉れ給へ。』

かう哲太が言ふと、

『だつて、Yちやんだつて、あれツ切りぢや可哀相だ。』

かう肥つた女中は言つた。この女中と此家の女將とは既にかれのためにかうした女の Dozen を取持つた。女中は金を貯めるより他に樂みはないらしく、卑しい顔の表情をして、いつも厭な不愉快な追従を言つた。

『困るわねえ、貴方のやうに我儘では——』

別に困りもしない癖に、困つたやうな顔をして言つた。

『Hを呼んで呉れ給へ。』

『あれは駄目。』

『駄目なことはありはしない。』

『ぢや、ぢかにやる？』

『好いとも。』

『また、此間のやうな目に逢ひますよ。逢つても好いの？』

『好いよ。』

『餘り好くもないでせう。』女中はいやに笑つて、『一體、貴方は氣が多すぎるんですよ。誰か一人きめてお了ひなさいよ。その方が面白くてよ。Kは何う？ いけない？ ならMは何う？』

『あんな奴爲方がない。』

『だって、Mは貴方のことをしよつちう言つてゐるのよ。』

『だってしやうがない。』

『本當に貴方は難かし屋ね、今度のCだつてさ。散々大騒ぎをして、人に骨を折らせて、今度こそはと思ふと、またいけないって仰有るんだもの。困つて了ふ。』

『だって、いけないんだから爲方がないぢやないか。』

『Cはいけないって言ひはしないわ。』

『それはさうだけでも……』

『貴方は一體何ういふ積なのよ。貴方のやうな人は珍らしい。Bだって、ちゃんと旨く行つてゐたものを、貴方の方から打壊してさ。BとKとを並べたり何かしてさ。さうして面白がつてゐるんだもの。誰だつて、あんなことをされちや怒るわ。玩具具か何かのつもりでゐるんだもの、貴方は——』

『玩具具ぢやないか。』

『玩具具ぢやありませんよ。矢張女ですよ。』

『女ツて言ふものは皆なあゝいふもんかね。それなら、女はすべて玩具具だ。玩具具にすらならないやうなもんだ。だからそれがいやだと言ふんだ。』

『だって玩具具にするから、玩具具のやうになるんですよ。藝者だつて、玩具具あつかひにされば、玩具具だけのことしきやしないぢやないの？』

『馬鹿に肩を持つね。』

『だって、さうですもの。Bちゃんの怒つたのなんか、私、本當に貴方の方がわるいと思ふわ……。だから、一人本當におきめなさいよ。』

『僕にはまださういふ氣にはなれない。玩具具にしか何うしても思はれない。』

『なら、さうして置きなさいな。……その代り、つまらない眼に逢つたつて、私は知らないから……』

『好いよ。』

『なら、Hね。』

『うん。』

女中はそのまま、下に下りて行つた。代つて女將が上つて來た。女中は女將にその話をしたらしかつた。

『本當に、お氣に入つたのがなくつてね。』

かう言つて莞爾して、『これでも、いろいろ考へてはゐるんですけども……。矢張好いのが御座いましてね。今、誰をおかけになりました？ Hを。あの子も好い妓ですけども、またいけない所もありましてね。』

『何でも好いよ。』

女中はまた上つて來た。

『來るかえ、Hは？』かう女將が訊くと、

『參ります。』

かうわざと押しつけるやうに言つて、『此間のやうにまた酷めちやいけませんよ。』

『よし、よし。』

哲太は次第にかうした空氣に浸つて來た自分を思つた。『なアに、構ふもんか。これも人間のやることだ』かう思つて、酒に、女に、深淵に次第に一步一步陥つて行つてゐるかれを哲太は見た。

バラ／＼と雨のトタン屋根に當る音がする。夜半にふと目覺めた哲太は、『や、また雨かな。』かう思つて聞耳を立てた。

かなり強く降つてゐるやうである。それもさつきから降つてゐるらしく、庇の樋から雨滴の落ちる音もそれに雜つて聞えてゐる。サツと強く遠くの方を降つて行く氣勢もした。

『また、雨だな。遅くも昨夜歸ればよかつた。』降頻る雨が、ぬれた路が、傘をさして足駄を穿かなければ歸れない路が続いてかれの頭に映つた。『また、足駄と傘とを買はなけりやならない。』かう思つてかれは寢がへりを打つた。

かういふ事は既に何遍もあつた。『足駄と傘！ 面白いトピクだね。かうした社會に遊ぶものは、屹度足駄と傘について珍談があるに相違ないね。運わるく屹度降り出して來るんだからな。やらずの雨といふことがあるが、さうした言葉がある以上、矢張昔からこの足駄と傘の喜劇はあつたんだね。』こんなことを遊蕩仲間と話し合つて笑つたこともあれば、駒下駄を新聞紙に包んで抱へて、新しく買った番傘をさして、そして雨の泥濘の中を歩いて來たこともあつた。時にはさうした家から傘だけを借りて、わ

るい路を拾ひ拾ひ駒下駄で歩いて、『かうして歩いては、昨夜、何處かに泊つたことは一目で人にわかる。』などと思ひながら歩いて来たこともあつた。足駄を穿いて雨支度をしてちやんとして歩いて居る人を見ると、だらしのない自分の形と比べて、自分の遊蕩が、不真面目が、自暴自棄が深く戒められてゐるやうな氣もした。時にはわざと反抗的に、『さまを見ろ——』かう自分で自分と人間とを罵りながら歩いた。

かれはすぐ隣に自分の相手の寝てゐる後向の姿を見た。長い鬘を、形の好い鬘を、翡翠の根がけを、二三本亂れた後れ毛を、白い襟元を……。相手はスヤ／＼と心持好ささうな呼吸を静かに刻んで寝てゐたが、しかも何か夢でも見てゐるらしく、をり／＼わからないやうなことを夢中で言つてゐた。

彼は深夜の狭い一室に、電燈の静かについてゐるのを凝と見詰めた。電球の中に電氣の傳はつた細い線がキラ／＼と光つて、をり／＼それが震へるやうに動いた。雨がまたサツと強く降つて來る音がした。と、不意にかれの自暴自棄と、用ふるところがないのでさうした境に溺れて行つた心と、いつの間にか女に捉へられるともなく捉へられて行つた形とが、歴々とその前に展げられて見えた。それがかれには辛かつた。何を構はず、人の笑ふのも顧みず、家庭の亂脈になるのも厭はず、唯、快樂に、慾に、酒に心を浪費してゐるかれが其處にも此處にも見えた。しかし哲太はすぐそれを打消した。『何だ。馬鹿々々しい。今更そんなことを考へたツて仕方がない。』かう思つて強く壓迫した。かれは女から女へと移つて

行つた自分を眼前に浮べて見た。

ふと電燈が消えた。それにも拘らず、凝と見詰めた闇の中には、電線が赤く細く光つて見えてゐるやうな氣がした。暫し闇の世界が続いた。哲太はある力を考へた。このひろい宇宙の中に、その不可思議の力があつて、それが空間から電線へ、また電線から電線へと傳つて來てゐるさまと、またその力が男女の間にも細かく働いてゐて、自分の傍に寝てゐる女の呼吸の中にも續いてゐるさまとを取留めなく想像した。

ほつとまた電氣が來た。再び元の明るい細い線がチラ／＼と動いた。

ふと寝がへりを打つた相手は、あるものに驚かされたやうに眼を明いてあたりを見廻して、

『何か言つて、貴方？』

『いや——』

『今、電氣が消えたわねえ。』

『知つてゐたのかえ？』

『知つてたわ。それから、私、何かこはい夢を見てたわ。魔されたでせう？』

『さつき何か言つてゐたよ。』

『さう——』あたりを見廻したが、サツと降り頻つてゐる雨に氣がいたらしく、『雨ですな？』

『雨だ……また下駄と傘だ。』かう言つてかれは笑つた。

夜の闇の中をかれは歩いてゐた。かれは成るべく灯の明るいを見ないやうにと心がけた。細い暗い路を選ばうにしてかれは歩いた。

しかしこの都會には、かれの心を正しい方へ引戻して呉れるあらゆるものがなかつた。闇の空を劃る寺院の尖塔もなければ、扉をあけて罪過の懺悔者を待つ教會堂もなかつた。已むなくかれは暗い闇の路を一人淋しく彷徨した。

これまでになるまで、しかしかれは若干の罪過を重ねたであらうか。また何遍その抵抗し難き力に引摺られて、浮び上らうとしながらもその深淵に落ちて行つたであらうか。耳を嚙む女、Florence とフランスの作者の書いた女、さういふ女にかれは何遍思ひ止まつてはまた引張られて行つたであらうか。

Durtal はカフェの卓の明るい上で、酒を口にしながら、ぢつとして深くその女のことを思つた。と、空間に明るい灯の中に、その Coquetish な笑ひ顔が見えて、そして半ばあらはに現はれた白い腕と肌とが見えた。にツとその顔は笑つてゐる。いかに離れたくともこの私には何うしたツて離れることは出来ないと言つてゐるやうに笑つてゐる。『そんなに考へ込んだツて駄目ですよ。考へ込むだけ無駄ですよ。早くお出でなさいよ。』と言つて招いてゐる。Durtal はぢつとそれを見詰めた。ふとかれは嚙まれた耳の痛

さの快感を思ひ出した。

ある時は Durtal は卓の上で今日の新聞を見つゝ、と、急に、その字の行間にその女があらはれて来た。その女は怒つてゐる。昂奮してゐる。眉は逆立つてゐる。女は何か聲高く争つてゐる。Durtal は急いでそこを出た。そして教會のある方への路を闇に歩いた。

さうした種類の女は到る處にゐた。自らの肉體にのみ生命を託したやうな女、心を二つにも三つにもわけることの出来る女、男性に最も深い最も卑しい且つまた最も本當な人間の底を見せる女、男の魂を粉微塵に碎いてそして妖しい笑を口のあたりに漂はせてゐる女、自分で自分を知つてゐるやうでそして實は何も知らない女、さうした女に Durtal は矢張深く悩まされてゐた。Durtal は寺院の中に入つて、そして自らその深淵から浮び上らんことを神に祈つた。

Durtal がその苦惱を抱いて遂に中世紀の修道院の中に入つて行くまでの心の歴史を書いた小説は、青味がかつたまた黄ばんだクロオスの本であつたが、それに哲太は深く共鳴した。Durtal も矢張かれと同じ位の年輩であつた。Durtal には哲太のやうな家庭と子供とがなかつたけれども、その心は矢張デカダンの苦惱の中から入つて行つたもので、その周圍には、神と悪魔とが常にその居所を争つてゐた。時には神が勝ち、時には悪魔が勝つた。

哲太は Durtal のやうにして、矢張、その女の方へ向つて行く足は何遍となく郊外から都會へ行く停

車場のプラットホームで止めた。それはそこらには似つかない大きなプラットホームであつた。下には別な線の電車がボギイ車を連結させて、凄じい地響をさせて通つて行つた。大きな時計は夜もその数字がわかるほどに明るい電燈に照されてゐた。

何うかすると、哲太はそこで友達の二三に逢つた。

『何方へ?』

『ちよつと……』

言葉を濁らせて答へた後にはもう女が強くなつたのを感じた。

『何うも郊外は夜は闇ですからな。何うしても、明るい方へ行きたくありません。』

こんなことを友達に言つた。

Duralの心の歴史を書いた小説を哲太は繰返し繰返し讀んだ。その本は常にかれの周圍にころがつて、いつもかれの繻いて讀むのに任せた。酒に、遊蕩に、自暴自棄に入つて行つたかれの心が次第に一つの女の心に向つて動いて行つた徑路をかれはをり／＼翻つて考へた。古いキュラツオの塚にさした赤い花が眼に浮んで來た。

何うかして浮び上らうとするだけそれだけ、哲太はその深淵の底に深く生えてゐる毒草や、厭に人の

魂を刺戟する不思議な色彩をした花の匂ひや、捉へたいにも捉へ難い眞珠の光などに心を引摺られて行つてゐた。浮び上りたいと欲する心は、深く沈まうとする心と同じであつた。そのためにかれは深く苦しんだのである。

女から女へと移つて行く中は、まだ問題が簡單であつた。美しい肌や、色彩深い姿や、形の好い髮形や、三味線の爪弾に合せて唄ふ小唄や、郊外にある静かな離座敷を持つた料理屋や、其處に朝早くから沸く綺麗な風呂や、風呂から出たところにある大きな鏡に映る女の顔や、その鏡臺の抽斗の中に女の使ふ三本足と男の用ふるブラシとが一緒に雜つて入つてゐるさまや、夜着の襟當にくつきりと出てゐる助六の似顔の繪や、大勢の着飾つた女達の中に埋れたやうにして酔ひ痴れてゐる形や、人の情緒を動かさずに置かない艶麗な北州の舞踊の扇のひらめきや、正月の白襟紋附や、潰島田や、口々に鳥の囀るやうに近寄つて來る『お目出度う。』や、さういふものに心を動かし、興を催してゐる中は、底にデカダンに通ずる深い孤獨はありながら、猶淺い道樂な遊蕩氣分であつたけれど、深淵と言つてもまだ僅かにその淵に臨んで好奇の憧憬を起してゐる位の位置であつたけれども、一度その淵に身を沈めたが最後、容易に其處から出ることの出來ないのを次第にかれは痛感するやうになつた。

哲太はをり／＼獨りで、さうなつて行つた心の徑路を考へた。右せんと欲するものがいつか左せんとしつゝあつたのである。前に進まうとしたものが、いつか後に退かうとしてゐたのである。圓の周圍を

たどつていつか元に戻らうとしつゝあつたのを知らなかつたのである。かれは自暴自棄の赤く爛れてゐる境に満足してゐることが出来なくなつた。單に、征服と勝利とに甘んじてゐることが出来なくなつた。深淵の中の毒草や赤い花の匂ひを嗅いただけで満足してはゐられなくなつた。かれはその底に深く沈んでゐる眞珠を獲んことを欲した。少くともその白くかゞやく光にだにも近寄つて行かんことを欲した。哲太の苦悶は實にそこから始まつたのであつた。

かれはMSと往來した時分の暮進の空氣の中から次第にデカダンの空氣に浸り、それにも満足が出来なくなつて、同じく享樂にしても、本當の眞劍のものを求めるやうになつて行つた。かれはまたをりをりかれの性慾の發達についても考へた。センチメンタルな少年、女性を太陽のやうに眩ゆく感じた青年、聖教徒のやうな禁慾から何も知らない子供としか思へない妻を持つた夫、さうした路を歩いて來たかれが、俄に性慾にある目覺めを感じて行つた形は不思議であつた。そしてその目覺めは單に性慾ばかりではなく、今まで當然展開せらるべくしてしかもその機會のないために展開されずに残されてゐた Vital Force の力強いあらはれてあつた。かれが平野の寺の妻になつた女と相識つたのもその頃である。また、かれはその時分はじめて東北の或るふるい港で、狹斜街といふものを知つた。そのさまは今でもをりをり繪となつてかれの眼の前に現れた。その夜は月が明かであつた。廓は港の公園の後を劃つた美しい松林を越えて行つたところにあつたが、かの西鶴の筆にも上つた處だけに、今でも古い衰へた昔の和

船の港の氣分がそこなくあたりに漂つてゐて、女達は一種他と異つた調子で素朴な竹枝を唄つた。座敷には、蠟燭の灯が薄暗くちらつき、涙に似た蠟は長く垂れ、蒼い位に色の白い若い女は、かれの Vital Force の贅として不自然にかれの傍に一夜侍した。その女は、狭い室に吊るための蚊帳の吊手のカンをあたりに鳴らしながら、小聲で、浮き河竹の中にあるものゝ悲しい唄を唄つた。その唄の聲は今だにかれの耳にあつた。

その最初の狹斜街から Dural が苦しんだやうな境に達するまでには、尠くとも十餘年の月日が経過した。そしてその長い月日は半は生命の浪費、肉體の浪費であつて、半は深淵の底に沈んで輝いてゐる眞珠を獲るための努力であつた。初めはあらゆることも、あらゆる思想も、強大なかれの Vital Force を以てすれば、直に實行することが出来ると信じた。ちよつと出来ないやうなことがあつても、それはある些細な障礙で、その障礙はすぐ除去去ることが出来ると信じた。そしてかれは何遍も何遍も無意味な同じ生命の浪費を繰返した。かれは次第に疲れて來た。さうした外面的のことはすべて興味を惹かなくなつて來た。今まで自分はあらゆるものを獲てゐると信じてゐたが、實は一つも本當のものを把握してゐなかつたことがわかつて來た。

人間の情緒の奥に潜んでゐる些細なあらはれをも、または性慾の上をりく起る處の祕密な發展をも、對者として自分が取扱つてゐる異性の體の細かい組織をも、何も彼も本當に知つてゐないとい

ふことをかれは次第に痛感して來た。

異性の中でも、殊に最も深く知つてゐなければならぬ筈のものは、かれの妻であつた。しかし、かれは妻を本當に知つてゐるだらうか。また本當にそれを得てゐるであらうか。妻は子供の性根のまだ失せない頃からかれと同棲して、盲目的に、無意識的に、さう生れ附いたものだからさうしなければならぬといふやうに、または結婚すれば妻のやうに、子が生れ、ば母のやうにやつて來なければならぬといふやうに全く何の感覺も何の意識もなしにやつて來た。そしてかれと妻との間には五人の子供が出來てゐる。何の不思議も不自然もないやうにして出來てゐる。そしてかれもかれの妻もお互にそれを何とも思つてゐなかつた。恐らく妻にしても、自分の夫の體の組織を知らないと同じやうに、かれも亦異性としての妻の體の組織を知らなかつたのであらう。一番深く互に知らなければならぬ夫妻にして既にさうした形である。空想を食物にして生きて來たドン・チャンもその空想を一氣にかい捨てなければならぬ時が來た。

妻は初めはそれを信じなかつた。かれ等の家庭に、さうした世間の多くの家庭が入つて來やうとは思はなかつた。自分の信じた同棲者にさうした性慾の目覺めが來たとは信ずることが出來なかつた。それに、その頃には妻はまだ母親の手離しかねた末の娘であつた。娘といふものは、人の細君となつても、多くは容易に夫のものとならずに、矢張母親の所有物と言つたやうなところのあるものだが、母親が死つて來た。

んで了はなければ、子供が三四人出來ても、完全に夫の所有物とはならないやうなものだが、かれの妻は殊に最も多くさうであつた。それに、母親はごくその近くゐた。ひとりで、やさしい、深切な、孫達の爲めにも好いお祖母さんとして……。従つて、かれの妻は自分の惑ふことが出來た時、または淋しい辛いやうなことに邂逅した時、さういふ時にはいつもきまつて母親の許に走つた。そして莞爾した世路の辛酸を嘗め盡した老いた母親の皺の寄つた顔を見て、それで満足して、何も彼も忘れたやうにして歸つて來た。

その時分、哲太はよく夜遅く郊外の自分の家の門を叩いた。かれは大抵は酔つてゐた。時には玄關の中に入るとそのまゝいきなりそこに打倒れて、その大きな體を室に、蒲團の中につれて行くのに妻は一方ならぬ困難を感じたやうなこともあつた。また時には、玄關の戸をドン／＼叩いて、その頃いくらか馴染になつてゐた女の名を呼んで、『おい、小勝、寝たのか——小勝。』などと言つて入つて來ることなどもあつた。

或る時には、書齋の本箱の抽斗の中に、ある藥品とある處に使用する或る道具とが入つてゐて、それを哲太は持つてよく廁へ行つた。そして哲太は蒼い苦しうな顔をして、『罰だ、靦面な罰だ！』などと言つてゐた。その病氣に就いても、妻は深く知ることがなかつた。

或は妻にしては、世間を知らない妻の身にしては、他の女が、屋外にゐる他の女がさうして家庭の中に入つて來るといふことさへ十分には信じられなかつたらしく思はれた。『そんな馬鹿なことが出来るもんですか。戯談ばかり言つてゐる。誰がそんなことを……』かう言つたことも、一度や二度ではなかつた。

哲太の性慾の目覺めの最初の對照であつた或る女學生が同居してゐた時分にも、だから妻は平氣な無關心な態度を取つて、却て第三者達から心配された。細かい心理の颯風のやうに捲き起されて來た時にも、かれの妻は平氣で子供と母親の愛に没頭した。

『お前、心をよくしめてゐないといけないよ。』

かう母親から小聲で注意された時には、哲太かれ自身の言葉は戯談として平氣で訊いてゐたかの女も、さうしたことがこの世間に澤山あるのかと思つて眼を睜つた。

T事件前後には、それでもかれの妻は心配した。MSが往來したり、Oが牢獄に繋がれたりしたので、もし、哲太の身にもそんなことがあつたらと思つて、一家離散の光景を取留めなく頭に浮べたりした。

『馬鹿を言へ、さういふ思想に似た思想を持つてゐたからとて、何にもわるいことをしない奴がドシンドシ牢に打込まれて堪まるものか。』かう哲太は半は笑ふやうに半は叫ぶやうにして言つた。

『女ツて言ふものは、何うしてさう子供ばかりが生命なんだらうな。』

かうある時慥くやうにかれが言ふと、

『貴方、子供、子供ツて、子供の愛に溺れてゐるやうにいつも言ふけども、子供なんかちつとも欲しくはありませんよ。世話が焼けて爲方がないんですもの……』

『だツて、女は子供が出來ると、男に對する心持がぐつと變つて來るに違ひない。子供さへありや男なんか何うでも好くなつて來ると見えるんだ……。もうおしやらくをして亭主の機嫌なんか取らなくつても好くなると思えるんだ……』

『そんなことはありませんよ。子供に追はれて、おしやらくをしたくつたツて出來ないんですもの。』
『だツて、世間を見て見ろ。男が道樂を始めるのは、若い時か、でなければ、子供が二三人出來た頃からだから。そこに兩性の間に横はつた深い眞理があるんだ。交渉の出來ないやうな區別があるんだ。女は子を一人でも餘計に拵へて育てるのが本分、男は一つでも餘計に種を下ろすのが本分……。』

かう笑ひながら哲太が言ふと、

『また始まつた!』

かう言つて、妻はそんな戯談には忙しくつて相手になつてゐられないといふやうにして向うに行つた。

しかしその時分には、哲太にはまだ Dufal のやうな孤獨はやつて來てゐなかつた。かれは一面烈し

く労働すると共に、また自己の力の可能を信じてゐた。デカダンから享樂に移つて行つたやうなかれの頃の心の状態は、何方かと言へば、明るい浮はついたものであつた。かれは柄にもない小唄などをよく妻の前に置いて唄つてきかせた。その癖、それは節廻しも出来てゐなければ、三味線にも合はないやうなものであつた。かれの心は、妻の前で女の惚氣をわざと言つてきかせるほどそれほど軽かつた。妻の心もまたそれを平氣で笑つてゐるほどそれほど軽く且盲目であつた。

『いくら言つてきかせても、お前にはわからない。』

『わからなくつて、丁度好いんですよ。』

丁度正月近く、幼ない子供達が、『いろはたんか』を持ち出して遊んでゐたので、その一つ一つに託して、誰は『年寄の冷水』だとか、誰は『芋の煮えたも御存じなし』だとか言つて、家庭の人達をそれにあてはめて笑ひ興じた。

『お祖母さんは、「老いては子に従ひ」だね。』かう子供達は笑ひながら言つた。

『知らぬが佛！ さうだ、お前は「知らぬが佛」が好い。さうだ……。非常によく合つてゐる。』かうかれは妻に向つて言つて、いかにも面白さうにして笑つた。

しかし流石に『知らぬ佛』でありまたは長い年月を同棲しながら、家庭の主人としてより以外に全く哲太を知らずに過ぎて来たやうな妻の英子も、次第に子供と母親との愛にのみ没頭してゐられなくなる

やうになつて来た。その頃哲太の遊蕩は益々募つた。家を明けることも段々多くなつて行つた。初めは容易に信じなかつたかげにゐる女も、いつかかの女の心と體に交渉を持つて來てゐるのを感じた。かの女は次第にかの女の呼吸してゐる今までの世界の空氣が破れて、そこに更に深い全く變つた世界のあることを思はずにはゐられなくなつた。

第一に、自分が心配になつて來た。子供の大勢の群が心配になつて來た。家が心配になつて來た。夫の生活を、心理状態を、世間に於ける位置を、思想を、月々の經濟を自分が全く知らずにゐることが心配になつて來た。いつの間にか、その家庭の外にゐる女が、色の白い悪魔がかの女以上の働きと感化とを夫の上に投げかけてゐるはしないかと思ふと、いつか夫の袂から出た料理店のつくだの、ある朝郵便箱の中に入つてゐた女からの手紙だのを、唯單に夫の享樂、男の道樂と言ふ風にのんきに考へて済ましてゐることが出来なくなつた。長く展開されずに體の底に蔽はれて來た英子の心はやゝ目覺めかけて來た。

哲太がかの女を前に置いて、いろ／＼に話して聞かせる男女の關係、淫蕩の空氣の漲つた社會、そんな馬鹿な不自然なことがあるものかと思はれるやうな世間、それは半分は戯談であるとは思ふけれど、またはかの女の不知を嗾かけて面白がる男の浮はついた心の習ひだとは思ふけれども、しかしそれを放つて置いては、男が何處まで深く陥つて行くかわからず、また自分や子供達が何うなつて行くか、わか

らなかつた。母親は中年時代に十分さうした経験を嘗めて、好い男の夫のために自分の持つてゐた金も使はれ、散々さうした苦勞をやつて来た人だけに、表面では娘を心配させないために、大したことのやうに言はないけれども、かげでは窃に哲太の行動に目を注いで、英子から種々な細かい材料を得るやうにと心懸けた。それが、その母親の心づかひが此頃では英子にも次第にわかつて来た。英子は母親と自分の間にもある障壁があり、また自分と夫との間にもそれがあつて、自分は矢張孤獨であるといふやうな心淋しさを段々覺えた。

『哲太は行くかな？ 此頃でも……』

かうそれとなく母親に訊かれて、

『矢張、始終働いてますからね。時には遊びにも行かなくつちや氣がつまるでせう。』

こんな風にわざと打消して言はなければならぬ辛さをも英子は覺えた。

哲太が相手にした大勢の女の中から、次第に一人の女がはつきりと浮び出して来たのは、T事件について心配した年から二三年経つた後であつた。初めはそれが何れだかわからなかつたが、郵便箱に入つてゐた手紙の女がそれらしくもありまたそれらしくもなかつたが、時が次第にそのかげにゐる女の眉目を明かにしてかの女に見せた。

それは何方かと言へば、小柄な、背の低い、髪の餘りに濃くない、しかし眼のはつきりとした、いかに

も男に對してアットラクチイアであるらしい女であつた。星はかの女と一廻りほどちがふ丑の三碧。

しかし妻の英子は、T事件の餘燄が此の頃ではすつかり覺めて、世間でも餘り哲太の身の上を問題にしないのを心安く思つた。臺所から賣つてやつた紙屑の中から哲太の行動を其筋で調べたといふ話や、哲太と同じ友達の身の周圍に刑事が常に影のやうに添つてついて歩いたといふ話や、其他いろ／＼なさうした或る壓迫から起る不安は、此頃では餘程もう少くなつてゐた。『まア、女狂ひをしても、その心配よりは好い。』かう英子は時には思つたこともある。しかし實はその心配よりも、却つて女の方が本當は心配であるといふことが、やがてざり／＼とかの女の體と心とに迫つて来た。

哲太が Durtal のやうな孤獨を痛感して、旅から旅へと歩くやうになるまでには、その心と體との周圍に、さまざまの苦痛が取巻き、種々な歡樂が喰ひ込み、またはデカダンであることも出来ず、思ひ切つた慕進も出来ず、好い加減な妥協も出来ずに、つぶさに辛い艱難の心の歴史を閲したが、妻の英子の心の状態にも、虚榮から眞實の道に達するさびしい悲しい出来事があつた。

その出来事はいろ／＼あつたが、その中でも一番大きな影響をかの女に齎したのはそれは他でもなかつた。母親の身の上に襲つて来た突然の死であつた。母親は勝手元で組板で大根を切つてゐながら、『苦しい——』と言つて卒倒した。平生持病にしてゐた脳が俄にやつて来たのであつた。英子はその報を得て驚いて行つた時には、母親はまだ生きてはゐるたけれども、眼は大きく明いてかの女を見る事が出来

たけれども、中風のやうな半身不隨で、口も利けず、手足も動かすことが出來ず、そのまゝに五六日ゐて、そして死んで行つて了つた。

英子は身も世もないやうな氣がした。葬式をすまして歸つて來ても、母親はもうこの世にゐないとは何うしても思はれなかつた。いつものやうに玄關の格子戸を明けて、杖をついて、腰を曲げて、赤い血色の好い顔をして、『英、ゐたかや。』と言つてやつて來るとしか思へなかつた。また里に出かけてさへ行けば、その二階の一間に、ちやんと道具や火鉢を揃へて、嫁や息子から離れて、眼鏡をかけて元氣よく繼物をしてゐる母親がゐるやうに思はれた。かの女は涙を流した。殆ど他の見る目にも氣の毒なほど涙を流した。寝れば母親に逢はれぬ涙、それが世間を知らないかの女であり、『知らぬが佛』のかの女であるがために、その行動が一層深く哲太の心を動かした。大勢の子供の母であるかの女は、今はあらゆる辛勞と艱難とをまともにその身に負はなければならなくなつたのである。些少な子供の着物の柄の選擇にも、大きい兒の着物を下の兒に譲るための裁縫の相談にも、襤褸のつぎはぎにも、何にも彼にも相談相手にした母親は、突然なくなつて、あらゆることの正面にかの女は立たなければならなくなつたのである。かの女は朝起きるとから、眼を眞赤にして、子供達を早く學校に出してやる朝飯の支度に取りかゝつた。漬物を切る俎板の上に涙がほろ／＼こぼれた。

中でも、母親の死に由つて、一番深く翻つてかの女に迫つて來たのは、哲太のかけにかくれたその小

柄な眼のはつきりした女であつた。

哲太にもそれはよくわかつた。其頃には、もう哲太も無下には、妻の辛勞を挑發するやうな言葉を口にしないやうになつてゐたが、その言はなくなつたことが、却つてかの女の深い底の心を傷つけた。

英子は朝は屹度佛壇の前に行つて、眼に涙を湛へて線香を上げた。末の女の兒は、餘り長く母親がそこに立つて何か口の中で言つてゐるので、不思議さうにしてぢつとそれを見たりした。彼女の心では、さうして相對してゐれば、母親がそこに出て來て、莞爾した顔を見せて呉れるとさへ思はれたのである。『今日はお祖母さんと口をきいたよ。』などと英子は幼ない女の兒に言つた。

かの女は家の周圍にある花といふ花を探つて來ては供へた。沈丁花、山吹、こゝめ櫻、それから躑躅、アネモネ、杜若、ゑぞ菊、睡蓮などに及ぶほどそれほど時が経つても、それでもかの女は猶ほ佛前に香花を供へることをやめなかつた。

女の月々あるものゝある前後には、殊にそれが色濃く烈しくかの女を襲つた。かの女は朝から赤い昂奮した血色をして、こめかみに頭痛膏などを張つた。

哲太は『時』の行爲以外に、曾てはデカダンであり、征服論者であり、欲するものは何をやつても好いと思ふエゴイストであり、または浮氣な誇張的なドン・チャンであつたかれを、さうした魂が、眞劍が本當の力を以て絶えずかれを脅かして來るのを感じた。

哲太がいかにその女に捉へられてゐるか。それは新に目覺めた英子の眼にかなりにはつきりと映つて理解された。もう昔のかの女でない英子には、母親のゐる中は平氣で意にも留めなかつたやうな些少なことまで今は一つ一つ頭に蘇生して動いて來てゐた。英子は自分の城壁と信じた家庭に、いつの間にかいろく／＼な形になつて、その女の入り込んで來てゐるのを見通すことが出來なかつた。柄に似合はず哲太が着物に贅澤になつたことの中にも、または今まで氣にもしなかつた時計の鎖や財布に注意するやうになつたことの中にも、昔のやうに無頓着に鬚などを生してゐるに、小まめに床屋に出かけて行くといふやうな形の中にも、皆な細かにその女が入つて動いてゐるので、その他にも、或は寫眞箱の中のカビネ形の寫眞に、或はそれとなく贈物として送つてよこした物品の中に、或は女がお酌から一本になり立ての頃に使つたといふ三味線に……。それは哲太がある時何處からか持つて來て、出來もしない癖に肥つた膝の上に載せては滑らせ、載せては滑らせてポツ／＼弾いたものであるが、初めは買つて來たのか貰つて來たのかわからなかつたが、いつわかるともなく、それはその女のものであるといふことが段々英子には飲み込めて來た。哲太は鬱金の袋に包まれたその三味線を茶の間の長火鉢のところの柱へと常にかけて置いた。

その他にも、哲太の不用意に饒舌る言葉の中に、書齋の轉寢のメリンスの夜着の中に、又は朝夕の食物の膳立の小言の中に、ひとり物思はしげに一ところを見詰めて考へてゐる哲太の冥想の顔の中に、いつも細かくその女が織り込まれて動いてゐるのを英子は見た。そしてそれに母親に別れた英子の悲哀と

涙と激情と覺醒とが深く深く緬ひ交ぜられた。

英子の觀察したところによると、それは勿論世間知らずの、漸く女として眼覺めたばかりのかの女の觀察であるから、普通さうした遊蕩の亭主を持つた伶俐な細君のやうに、歸つて來た夫の着物の移香で女に逢つて來たか來ないかを知るといふやうな、またはちやんと亭主との間に一度女に逢つた罰金をいくらいくらときめて置くといふやうな、さういふ細君の機敏な細かい觀察はないに相違なかつたけれども、それでも、哲太がかなり深く——思つたより深く、その女に心を移してゐるのを英子は否定することは出來なかつた。英子は一度はわざと妬かないやうな風をして、寛太な餘裕のある心を持つてゐるやうな恰好をして、かげから其本當の状態を知らうと試みた。

その時あるところまで哲太は話した。陰翳もあり日向もあるやうな心の言葉、汲んで見ても、汲んで見ても、何處までが本當で、また何處までがお世辭であるが、何處までが女自身のまことの心で、何處までが自分の稼業のために媚びた形か、それが恐らく哲太自身にもわからないのであらうが、その細かい心の雜り合つた形が、時には英子の胸を躍らせ、時にはまたその胸を沈ませた。

一夜哲太がさながら大事件でもあるかのやうに、今夜行かなければ自分の男としての一分が立たないと言つて、烈しい語氣をあとに残して、留めても留まらず、あたふたと玄關前の小石を踏み散らして出て行つた後では、英子は殊に心を悩ました。何が何だかわからないやうな氣がした。夫が平生その女に

ついで話したことも、何處までが本當で、何處までが事實だかわからなかつた。かの女が思つてるよりも、或はもつと深い仲になつてゐて、芝居や小説にでもあるやうな、または新聞にでも出るやうな事件を醸すやうなことがあるのではないかと思ふと、英子は落附いてぢつとして寢てはゐられないやうな焦立たしさを感じた。しかし心配した程のこともなかつた。別にさうした事件も起らずに、三つの心の中にある同じ細かい心の線の顫動はそのまゝにまた續いて行つた。

しかし英子の夫に對する神経は、日増に尖鋭にまた細かくなつて行つた。いくら夫がそれをまぎらさうとしても、その行動には、ちやんとリズムがあつて、女の許に outcomes 出かけて行く時の状態はすぐわかつた。次第に英子は夫は今頃は何をしてゐるか、女の許に行つて戯れてゐるか、それとも一緒に何處かに行つてゐるか、酒を飲んでゐるか、手を握り合つてゐるか、遠く離れてゐても、それが一々はつきりと眼前に見える様になつて來た。忘れ難い亡母に對する悲哀に續いて、今度は性に對する焦燥がかの女を脅かした。

かの女は今にして初めて性の世界を深く見廻すやうになつた。かの女は今まで滅多に見たこともない新聞をも手にするやうになつた。また、夫の許にやつて來る手紙や書類にも自分ながら不思議に思はれるほど細かく注意を拂つた。哲太のゐない夜は子供達が皆眠りに落ちて了つた後までも、ひとりて長火鉢の傍に坐つて赤い顔をして、進まぬ裁縫の針を動かしてゐた。悲哀がをり／＼波のやうに押寄せて來て、急霰のやうな涙がその頬を傳つて落ちた。

英子は母親の愛に包まれた過去を繰返した。また夫と自分との間に何等の理解もなくて過ぎて來た月日を繰返した。今まで世間に向つて開かれたかの女の眼は、ほんの上つ面な、または母親乃至子供を通して見たゞけの眼で、異性に對しては、全て盲目であることを繰返した。『貴方はいくらでも勝手に面白い真似が出来るから好い。男だから好い。しかし、女は何うしたら好いんでせう。女は何を快樂にして生きてゐるのでせう。』かう度々英子は哲太に向つて云つたが、哲太はまたそれを、『だつて子供があるぢやないか。』と無下に一言の下に云つて了ふのが例であるが、その問題がいつもかの女を深く苦しませた。英子は女として初めて男に對さなければならぬ位置に身を置いてゐることを今になつて痛感した。

女なるがために、美しくならねばならない。男を惹くやうに自からをしなければならぬ。また自己の持つた男を自分の勢力の下に置くやうにしなければならぬ。自分の男を他の女に寝取られないやうにしなければならぬ。かう思つた英子は、更に廣く今まで目にも心にも留めなかつた世間を見るやうな心になつた。其處にも此處にもさうした悲喜劇は澤山にある。夫に似た行爲をしてゐる男性は無数にある。否、男性ばかりではない、かの女の側にある女性にもさうしたものが澤山にある。共に援けなければならぬ女性が互に敵となつて男の奪ひ合をしてゐる。かの女は一人の女が一人の女にその男を奪はれたゞめに、その男を及て刺した新聞の記事を見て戦慄した。その女の悲哀と苦痛とが自分の體にそのまゝ蘇つて來るやうな氣がした。英子はその記事を顔に當てて深く思ひ沈んだ。

しかし英子は今にしても矢張哲太の苦痛は理解することが出来なかつたのである。『男は男で勝手な真似をしてゐる。』といふ以上に哲太を見ることは出来なかつたのである。美しい眉に、白い肌、または巧な表情にすつかり有頂天になつて了つてゐるとしか思はれなかつたのである。しかし實際、哲太は歡樂の庭を單に歡樂の庭として樂しむことが出来たであらうか。完全に男を得ることの出来ない英子の悲哀と苦痛とを矢張哲太は苦しんでゐるはしなかつたであらうか。一つの心を得るための努力を浪費してゐるはしなかつたであらうか。

哲太の眼を見れば、表情を見れば、さびしい心を見れば、自由を得ることが出来なくて悶えてゐるさまを見れば、歡樂の庭から歸つて來たものゝ顔にも似合はないさびしさと佗しさとを見れば、それで哲太の苦惱はわかる筈であつた。思ふまゝにならない煩悶は理解さるべき筈であつた。しかし、箇と箇とに執した相互の心には、さうした餘裕を持つことは出来ないのである。哲太はさうした妻の苦痛と涙とを餘所に、ひとりさびしく書齋の籐椅子の上に身を横たへた。

大勢の女から一人の女に移つて行つた哲太は、五六年の間に、實に大きな苦痛の戦ひを戦つたのであつた。何うすることも出来ない戦ひを。欺騙の戦ひ、虚偽の戦ひ、それは比較的容易に打勝つて進むことが出来たが、それから先の魂を問題にした戦ひに至つては、かれは暗い暗い絶壁に突當つたのを感じ

ずにもられなかつた。

一人の女、その女がかれをデカダンから救つたことは、確な事實であつた。その女は無論、Darialの所謂 Florence 又は耳を噛む癖の種類的女であるが、しかしまだその本當の魂を失つてゐない女であつた。欺騙に酬ゆるには欺騙を以てし、虚偽に酬ゆるには虚偽を以てし、妥協に酬ゆるには妥協を以てしたが、幸ひなことには、かの女はさうした社會に見る多くのデカダンではなかつた。底にある美しく輝く眞珠を持つてゐた。その底の眞珠が哲太を救つた。デカダンから救つた。自暴自棄から救つた。無意味な生存から救つた。平凡な家庭から救つた。しかしその女の持つたものが眞珠であつたがために、微温いデカダンではなかつたために、かれは一層辛い苦痛を嘗めなければならなかつた。

かの女の生活も哲太やまた英子と均しく、本當のものに向つて憧憬するものであつた。眞實と自由に向つて奮闘した生活であつた。さうした社會にあつて、眞實と自由に向つて奮闘した生活！ さう言つただけでも、それは哲太や英子やまたは世間の多くの女性達の生活に比して、數等艱難の多いものであつたことは誰も想像することが出来るものである。哲太には殊にそれがよくわかつた。

かの女も矢張思ひのまゝにならぬ身の上を慨く一人であつた。欺騙と虚偽の多い中に身を置きながら、または時に由つてはその欺騙と虚偽とを大勢の對者に用ひながら、矢張欺騙と虚偽とに苦められてゐる女であつた。哲太はかの女の魂の中にも自分の魂を發見することが出来た。

従つて哲太は到底打克つことの出来ない戦ひを戦ふことゝなつたのである。傍観することの出来ない位置に身を置きながら傍観しなければならぬことになつたのである。火であると同時に水でなければならぬなつたのである。もしこれが、かの女の持つたものが、眞珠でなかつたら、かれは決してそこまで入つて行かなかつたらう。また引かへして深淵から出て来るにしても、さう大した苦痛を感じなかつたであらう。笑つて匙を投げて引戻して来たであらう。そして二三日の間 *glorious* な顔をして、『なあに、あいつらは、何うせ、皆なあゝさ。』かう言つて忘れて了ふであらう。平々凡々でその幕は閉ぢられたであらう。併しかの女はそれ以上のあるものを、ある力を、ある心の姿を持つてゐた。

哲太はかの女の不眞面目を議する前に、自らの不眞面目をかの女から議された。かの女の涙は、不如意は、艱難は、奮闘は、すべて女性としての一種の獅子吼で、その中にはセックスの細かい問題があり、社會主義の問題があり、女性問題があり、夫妻及び家庭問題があるのであつた。そしてそれは皆本當の細かい経験と痛感から來てゐた。かの女は更にそれを淫蕩な外皮で包んだ。

哲太はそこに一種の運命を感じた。何うにもならないものを何うにかしなければならぬハメにかれは陥つて了つたのである。止むを得ずある時は哲太は考へた。『何うせ、何うにもならないんだ。向うから言つても此方から言つても……。唯、かうしてゐれば好い。その魂の一片を握つてゐさへすれば好い。それで満足しなければならぬ。渾てを占領しようと思ふから辛いのだ。もつと軽い心持でゐる方が好

い。』この考へは、妻に對しては、殊に有効に自己の責任の軽くなつて來るのを感じた。

さうした心境に、哲太はある間とどまつてゐることが出來た。しかし、矢張それは詰まらない彌縫であることが次第に感じられて來た。哲太は再び熱した心で女の許に通つた。

何の爲めに一つの心と他の心とが觸れながら、更にまたその他の心に觸れて行かれるやうにこの兩性の心と體とが出來てゐるのであらうか。また何の爲めにその爲めから起る苦悶、嫉妬、嗔恚が不自然にこの兩性の間に横つてゐるのであらうか。またこの引く力と引かるゝ力とが結局は遂に不平均に終はらなければならぬのであらうか。惚れたものは、自己の愛妻の他に姦せられてゐるのを知りながらも、その愛妻に離るゝ能はざるが爲めに、自己の衿持と魂とを失ひながらも、猶ほその肉體の一角だけを握つて離すまいとし、惚れたものは愛せられた男性の心に惹かれながらも、竟にそれに満足することが出來なくなつて、却て自己から積極的に他に惚れずには居られないやうになる、この力の消長と言つて好いか、または性に賦與せられた不自然な矛盾と言つて好いか、兎に角何と言つて好いかわからないが、その複雑した、交叉した、細かいまたは痛い心理状態は、哲太をして深い懊惱に沈ましめずには置かなかつた。かれは何遍か惚れた男に逢ひたい女の心に同情した。或時はかれはそのためならば、自分が現に惚れた苦痛を嘗めてゐる経験から考へて、かの女をして何の顧慮もなしに、何の反省もなしに、其男

に逢つて歡ぶことを得せしめたいとすら思つた。かれは邪魔をしようとは思はなかつた。否、邪魔どころか、かれは場合に由つては、その戀のために自分の戀を男らしくその贅に供しても好いと思つた。しかし、男の性として、女から打明けられた他への戀を靜かに落附いて聞いてゐられるだらうか。細かい情緒の交錯、歡ばしい心と心との共鳴、唇から唇への甘い私語、熱した眼と眼とのかゝやき、さうしたものを、無關心で、または犠牲になつた心で、靜かに聞いたり見たりばかりしてゐられるだらうか。其處には儼として人間の底の底の血が横はつてはゐないだらうか。其處に如何ともすべからざる悲劇の根柢が横たはつてはゐないだらうか。世間での大通は、所謂水と火の中を無數に經て來たと稱する大通は、さうした難關を談笑の間に解決して了ふと言はれてゐるけれども、またさうした態度が男らしく且わかつた人間として第三者から言はれてゐるけれども、それはしかし、愛したものを眞に愛した形ではなくて、矢張第三者的の樂なまた單に賢いと言はれる人達の煮え切らない行爲ではないか。眞に愛した心は眞に憎む心ではないか。

この深い心の問題に於て、哲太は一面に妻にそれを感じ、一面はまたその女にそれを感じた。妻がなるとだけ深く細かくかれとその女の狀態を知りたいと欲しつゝも、それを知れば知るほどそれに對して焦らずにはゐられなかつたと同じやうに、かれも亦その女の他への戀を細かく知れば知るほど堪へ難い肉體と神経の疼痛を覺えた。否、そればかりではなかつた。その女すらもまたその一方にかれあるがために、その愛した男の戀を十分に占めることが出來ずに、矢張かれ及びかれの妻と同じやうに、不如意と焦燥と不自然とを常に感じた。

人間の根柢には、同じ心の狀態が、それからそれへと際限なく續いてゐるのを哲太は思はずにはゐられなかつた。哲太は暗い夜の路をさうした思ひに虐まれつゝ、彷徨した。

自分が歸つたあとに、すぐその男がやつて來るといふことを知りながら歸つて來た夜も何遍かあつた。さういふ時には、女を憎む念は火のやうに燃えた。男に對しては助六の劇に見るやうな態度または心的狀態は起らなかつたけれど、または外國の物語や日本の武士時代に見る決闘と言つたやうな、さうした突詰めた心は起らなかつたけれど、女に對しての憎惡の念は強く強くかれの心頭を衝いて起つた。かれは女の白い肌を刃を當てることを心で企んで、それを實行して、初めてこの苦惱から免れることが出來るとすら思つた。かれは女を殺すことが、その憎むべき女を殺すことが、自己の生存上最も必要な實行だとまで思ひ詰めた。かれは女を殺してから、そつと階梯を下りて、家人に知れないやうに、曉の扉を明けて出て行くかれを想像した。

女はすやくと寝てゐる。何も知らずに寝てゐる。男にさうした苦痛を起させたことに就いては何の悔恨も反省もなしに、また女自身さうした淫蕩と欺騙を敢てしたことに就ても何の考へもなしに靜かな

呼吸を立て、眠つてゐる。電気は明るくその一間を照して、其處等に散らばつた帯や着物や白足袋は、だらしなく昨夜の歡樂の名残を語つてゐる。譯はない……、譯はない。そこに蛇のやうに長くのたくつて落ちてゐるシゴキを取つて、それをそつと女の白い首の周圍に廻して、ぐつと力強く締めさへすれば、それで目的は達せらるゝのである。女の呼吸は忽ちそこに斷たれるのである。女の魂はなくなるのである。かれの爲めに愛であり生命でありまた悪魔であつたかの女はこの世にゐなくなるのである。かれはその魂の天上に歸した時を想像して、恐ろしい戰慄を總身に感じた。かれは續いてその死屍をそつとそこに見捨て、そして自分はいかなる態度を取るであらうかと思つて見た。恐らく其處でそのまゝ死んで了ふやうなことはあるまい。何故なら、無理情死ほど男に取つて遺憾なことはないからである。かの女を殺した上は、かれも無論死ぬであらう。しかし、同じ死ぬにしてもかれは一度は其處を遁れるであらう。そしてかれは山なり海なりに行つてその最後の死場所を發見するであらう。かう思ふと、かれが此處を逃げ出すについて、女の死の家人に發見せらるゝまでの間に、相當する時間を置くやうにしなければならぬのをかれは思つた。で、かれはその女の死屍に、今までは自己の愛であり生命であつたその死屍に、歡樂の名残である夜着をかけて、すやくと靜かに寢てゐるやうに見せかけて、朝、家人が雨戸を明けに來た時にもちよつとわからぬやうにして、そして靜かに障子を明けて出て行く。永久に再びとは來ることのないその室を、または種々の記憶の縫れ合ひ絡み合つたその室を……。

かれは一步一步恐怖と戰慄とにをのゝく足を踏みしめながら、靜かに音もしないやうに狭い階梯を下へと下りて行く。階梯の板のきしむのが氣になる。それに、下には電氣がついてゐる。家人はそこに寢てゐる。さうした残酷な事件があらうとは知らずに、またかれ等のために大事な娘であり、生活の唯一のたつきである娘がさうした目に逢つて殺されてゐるとは夢にも知らずに、平和の神がかれ等の上に安らかな眠りを齎して來てゐる。かれはちよつとそこをのぞいて見て、そして靜かに別の間の方へ通じたしきりの襖を押して見るかれを想像した。

しきりの襖は音もなく明いた。

かれはそこから出て行つた。かれはいつもの例として、女のまだ寢てゐる間に、一人で曉の散歩をする習慣があるので、少し位その氣勢を家人は耳にしても、またいつもの散歩と思つて、わざわざ起きて來るやうなことはあるまい。で、かれは何うやら彼うやら入口の格子戸の鍵を外して靜かに戸をあけてそして曉の戶外へと出て行く……。その時は何んな氣がするのであらう。復讐の快味か。否。殺人の血腥い昂奮から來る恐怖か。否。愛と生命とを失つた絶望か。否。深淵の中から脱し得た自由の喜悅か。否。氣も心も顛倒して我と我が魂の平均を失つて了つたやうな空洞な氣持か。否。その時の心の状態はさうした千萬の説明も猶その一端を現はすことが出來ぬほどそれほど複雑したものであらう。

しかし、何は置いても、これだけは確かであつた。その歡樂の名残の夜着の中にある色の白い蒼ざめ

た女の姿は、永久に、また片時も離れずに、かれの頭の中に生きて刻まれてあるであらう。山に行つても、海に行つても、また巧に通じおぼせてかれの罪惡を誰一人知つてゐるものもない遠い國に行つても、或はまた天に翔り、地に潜んでも、兎も角に、その女の姿だけは、かれの死にまでついて廻つて來るであらう。死の最後の呼吸をひき取るまでは、否、生々死々、佛者の所謂三世の後までは、乃至は永劫の時の盡き果つるまでは……。かれはかう思つて戰慄した。世間にはさうしたことは澤山に澤山にあるのであつた。かれは愛と憎の空氣がそこまで人間を陥れて行くさまを想像した。

ある時は女の家でかれは男とばかり顔を合せて了つた。顔さへ合せなければ、何方かでソツと姿を躲しおぼせさへすれば、それはそれで濟んだのだけれど、何うにでもしてごまかして了ふことが出來たのだけれど、否、現にさうした不幸な遭逢はこれまでにでも度々あつたのだけれど、不運にも競争者同士が一目でも互に雙方を見た以上、女としてこの二つのものをちやんと正式に逢はせずには、互に互を侮辱したやうな形になるので、女はかれの方には説き、男の方に行つては説きして、いろ／＼の細かい情の曲折のあつた後、漸く二人の男を盃盤の狼藉した間に來て相對して坐らせた。

哲太はその時でも決して男を憎むといふ念は起らなかつた。また女を憎むといふ心にもなれなかつた。もし女の顔の表情に、言葉の一端に、女がそれを、男性を二人その力の下に並べたといふことを誇ると

いふやうな、又は勝利者が得てあらはし勝である驕慢な心の形を少しでも面にあらはすやうなことがあつたならば、かれは或は席を蹴つて起つか。またはさうした不快な淺薄なデカダンを卑しめ笑つて冷やかにそこを立去つたであらうが、女のある點まで眞實な伶俐な心は、決して其態度にさうした不眞面目を見せなかつた。却つて哲太は惚れた女心の苦しみに同情した。また自ら爲した業とは言ひながら、さうした苦境に魂を二つにわけなければならぬ女を可哀相に思つた。之は無論、哲太に、女に對する未練があり愛着があり離れ難い熱情があつたためであるには相違なかつたけれど、併しそれ以上に、彼は女のために深い深い同感を惹いた。出来るものならば、さうした惚れた男と一緒にしてやりたいといふ犠牲的の考へもかなり強くかれに起つた。今こそかうした突詰めた心持になつてはゐるけれども、元を糺せば、皆なかれの浮いた淺い享樂の心から始まつた事である。かれには妻がある。家庭がある。子供がある。始めから女と一緒にすることは出來ないのは知れ切つてゐる。女がさうした淺いかれの享樂の心に満足が出來ずに、心から一生を託さうとする男を他に求むるのは、決して無理ではない。不自然ではない。又淺薄でもない。これはその時に限らず、かれが常に女に對して感じてゐる底の底の本當の心であつた。で、女の潜かに危んでゐるらしいのとは違つて、一座には、靜かにのんきな何事もないやうな氣分が漲つて、男の哲太にさした盃に女が酌をしたり、女が哲太にさした盃に男が酌をしたりした。これでは外形だけでは、二つにわけた心の一つづつ、を男達は銘々に満足して持つてゐて、それで何事も起りさ

うにも思はれなかつた。男達は互にその生國の話をしたり、職業の話をしたりして一二時間を過した。

哲太は自分の方から、靜かに起つて歸つて來ようとした。

と、女は來て、あることをかれの耳に囁いた。

『いや、今日は歸らう……、もうよくわかつてゐるから。』

『いゝえ、それぢや、私がいけないの。』

『でも、今日は歸るよ。』

『なアに、あの人は、もう歸るんです……。用があるツて言ふんですから。四時からは、是非行かないで、今日は歸らう。その方が好いんだよ、お互のためにも、……』

『でも、今日は歸らう。その方が好いんだよ、お互のためにも、……』

『だって、私が厭なんですもの。』

達つてとめて、女はかれを歸さうとはしなかつた。男は眞に用事があるらしく、しかし一面には女と哲太との状態をこのまゝにして捨て去るには堪へないといふやうにしてぐづくしてゐるが、女は平氣でさつさと自分で自分の意見をきめて、家では面白くないからと言つて、髪を梳いたり、着物を着更へたりして、哲太と一緒に何處かへ出かける支度を始めた。哲太にはそれが厭だつた。男の方には構はずに、かれにのみその情を見せるやうにする女の態度の裏には、男と女との間に、かれよりも一層深い何

物かゝあるやうに思はれて不愉快な氣がした。しかしかれにしても、女の留めるのを振切つて歸るほどの心はなかつた。兎に角外形だけでも勝利者の位置に立ちたいといふ念と、女に愛着した心が巴のやうに絡み合ひ亂れ合つた。皮肉な行爲を敢てして冷やかに笑つてはゐられなかつた。で、かれは女のするまゝに任せた。

日が暮れてから着いた停車場、祭禮の提灯や夜店で賑やかな田舎町、その町外れの深い森の中を通つて、螢の明滅する池の縁を縫つて、猶ほその奥にある松林の中の瀟洒の料理屋の離座敷、闇の夜で、また夏で、蚊が軒にわん／＼聲を立てゝゐたけれども、それでも二人は靜かに其處に二人の世界をつくることが出來た。女中は小さな提灯をつけて、踏石傳ひに茶や酒や肴を運んで來た。豚の形をした器からは、蚊遣線香の煙が餘り明るくない電燈の光に細く微かに靡いて見えた。

そこでは哲太は女を殺して了ひたいやうな心持がした。女も亦男の爲に殺されて了ひたい様な表情を見せた。それほどの深い情があるなら、何故もつと早く見せては呉れなかつたかと女は言つた。かれはまたかれて、お前にさういふ心があるなら、他に男があつても好い、亭主を持つても好い、何をしても好い、これで別れても好い、これから一生逢はないでも好いと言つた。その夜の二人のさまはいつものやうではなかつた。二人は黙つて長い間盃の酒の冷えるのも知らずに相對してゐた。かと思ふと急に儘

にならないのを歎くやうに、またはさうした深い苦惱をわざと傍にかい捨てたやうに、二人は酒をグイグイ飲んだり三味線をヤケに弾いたりした。女の目からは涙が流れた。

かれ等の仲は、もう五六年の月日を経過してゐたけれども、今迄に曾てこれほどの心の一致と展開とを互に見せたことはあるであらうか。またお互ひにこれほど心の底と底とを打明けて見せたことがあるだらうか。これほどお互ひの自己の底にある犠牲の念を見せ合つたことはあるであらうか。またこれほど涙を流し合つたことはあるであらうか。堅く手を握り合つたことはあるであらうか。情死と言ふ様な心はまだはつきりとは起つて來なかつたけれども、黙くともそれに近い侘しい辛い艱難な心の共鳴を二人は今までにつひぞ感じたことがない程に強く感じた。二人はいつかまた盃と三味線を下に置いて、そして黙つて相對した。

『私の心はわかりましたね……ね。もう考へるのは止ませう。』

かう女は何遍も言つた。

かれのためには、女に他に男があるがために展開して來たまた昂揚して來た心の境であり、女のためには、矢張他に男があるために、今まで知らなかつたかれの心の深い扉に對しての接觸であつたのである。『いゝえ、さうぢやありません。そんなことはありません。私は一生藝者で通しますから……』かう下唇を咬んで辛うじて涙の胸にこみ上げて來るのを押へるやうにして女は言つた。

女はいつもに似合はず、自分の生立やら、不幸福な境遇やら、これまでに嘗めて來た艱難や辛勞やらを染々とかれに語つた。また男との關係についても、多少の情偽があるであらうと想像されながら、しかもその想像を十分に打破することが出来るほどの眞實を以てかれに語つた。女もまた自己の戀の儘にならないのを、心の願のまゝならないのを常に嘆いてゐる一人であつたのであつた。

かれは長年抱いてゐたデカダンな心持や、皮肉や、勝敗の原理や、冷笑や、無意味な突進や、人の魂を魂とも思はないやうな行爲や、さうしたもの、一つく空に消えて行つたさまを頭に繰返した。かれは今まで少くとも人間の魂の核心に觸れてゐなかつたことを思つた。

蚊やりの烟は細く、蚊は次第に集つて來た。薄暗くついた電燈以外には、すべて一抹の深い闇で、その一室ばかりがかれ等の小さな覺束ない世界のやうに見えた。さつき女中が持つて來て縁側の隅に置いて行つた白絹を張つた大きな螢籠の中には、こゝの名物の無数の大きな螢がさながら花火線香の火のやうにチラ／＼と動いて光つてゐた。

『これで好い……俺はこれでもう別れても好い……』

痛感したやうにかれが言ふと、

『いゝえ、別れるなんかいやです。……』かう女は眞面目な表情をして縋るやうにして言つた。靜かに前庭の草藪を動かして行く夜風につれて、何處から來たか、螢が一つ魂か何ぞのやうにピカピカと明

滅して闇を縫つて飛んで行つた。

日長けてから起きた二人は、歡樂の極みにある戀人同士のやうにして、靜かな松林の中や、鞆韃や木の馬の置いてある廣場や、あづまやのある糾草地のあたりを並んで靜かに散歩した。かれ等の眼の前には田舎ののんきな朝の眺めがあつた。朝日は美しく緑色の漲つた田畠を照し、小川に添つた露深い路を働きに出る農夫が鋤を擔いで歩いて行つた。

かれ等は心も體も綿のやうに勞れ切つてゐた。かれ等は終夜眠られなかつた。昂奮と辛勞との間を縫つた歡樂、まことの心と欺騙との雜り合つた兩性の平均乃至不平均、思ひのまゝにならぬ焦燥、時には即き、時には離れ、また時には悶えて、女の涙と男の溜息とが絶えず苦しげにその間に雜り合つた。かれ等は輾轉反側した。黎明近く、雨戸の隙がほの白く見える頃になつてから、漸くかれ等はうとくした。

かれ等は散歩から戻つて、朝湯に入り、淡泊したもので淺く酒を酌み、草藪の中に微かに見える赤い花などを眺めた。もうこれで別れて好い、一生逢はなくつて好いと男は言ひ、いやです、別れるのは厭ですと女が言つた昂奮した昨夜の氣分、さうした眞實はまだ底の底には力強く横たはつてはゐるけれども、しかも疑惑やら、嫉妬やら、一刻も女を離し難い心やらが絶えず哲太の體の周圍にあると共に、女には昨日平氣で置き去りにして來た男が氣に懸つた。二人は言葉少に朝飯をすました。哲太は此のまゝ、此處を

去るに堪へないやうな氣がしたが、しかしいつまでさうしてゐることも出來なかつた。午近くなつてから、車をといふのを斷つて、二人は其處を出て、池の縁から町の通りの方へと行つた。

哲太はこれ迄の例として、女と別れて來る朝には、いつも家庭の妻や子供の方に心を惹かれて、女と酌む酒も旨いが、家庭の餉臺の前で飲む酒も捨て難くなるのが常であつたが、その日は何うしてもさういふ氣にはなれなかつた。今度は昨日置き去りにされた男の役割を哲太かれ自身がやらなければならぬのであつた。

いくら合せても合せても合せ難い二つの心であることを痛感しながら哲太は町の通りの方へと出て來た。やがて停車場へと來たが、汽車の時間がまだ間があるので、二人は引返してその前の休茶屋に寄つた。岩槻町に通ふ乗合自動車に丁度客を集めてゐるところで、包を持つた細君や、紳士や、赤いメリンスの帶をした娘などがその周圍に集まつて來るのを二人は眼にした。

女の眼と表情とを見てゐる中に、哲太は愈々苦しくなつて來た。その前に坐つてゐるにすら堪へ難いやうになつて來た。一刻も早くさうした苦惱から脱却して、兎に角自分一人になつて靜かに考へたいとかれは思つた。しかも、その靜かに一人考へるといふことが、いかに辛く苦しいか、またいかに堪へ難く胸の焔の燃ゆるものなるかをかれはこれまで十分に味はつて知つてゐるのであるが、それでもかうして相對して、女を、女の眼を、眼にあらはれる心を見てゐるよりは増したとすらかれは思つた。その待

つ間が僅に三四十分であつたけれども、その間すらかれには堪へ難く苦痛に感じられた。汽車に乗つてからは、二人はもう多く口をきかなかつた。女は窓から動いて行く外を眺め、哲太は掌を後頭部に組み合せて、起きてはゐられないやうな心持のする體を凭せかけるやうにしてクツシヨンに凭りかゝつた。

やがて哲太の家の方へ行く電車の線のわかれてゐる停車場が來た。哲太は身を起した。

『それぢや、また、近くに……』

『うん。』

これだけで哲太は汽車を下りた。哲太はすたこら歩いた。あとを振り返つても見なかつた。深い深い溜息が出た。

女はその日歸つてからの話を哲太にした。置いて來た男は、電話をかけてもかけてもやつて來なかつた。漸くやつて來たと思ふと、非常に昂奮してゐて、てんから女の笑顔を何をも受けつけなかつた。平生ならば何でもないことに角を立て、ヤケに酒を呷つて、遂には席を蹴つて外へ出た。それを歸すまいとして、縋つて細い闇の露路に出た女は、突飛ばされて倒れたばかりか、持つてゐたステッキで、しっかりとその肩と背とを撲られた。その話を聞いた時には、それはもう餘程後であつたけれども、それでも哲太は昂奮した。そのステッキで打たれたのは女でなくつて自分のやうな氣がした。惚れた男のステッキに打たれた女が憎かつた。

女を透して、その男の状態はかなりに深く哲太に知れた。それは女は容易に話さないものではあるが、ことに底の底の歡樂の状態はつとめて秘密にして置くものであるが、それがあつた場合、たとへば女の方から哲太なら哲太の心を力強く自分の方へ引寄せやうと思ふやうな場合には、存外その先の男の體の組織や心の形やその折々に觸れての種々のあらはれを話して聞かせるものであつた。哲太は女の言葉の中から男の種々なものを搜した。

その男は花札を手にする種類の人であつた。また場合に由つては、満都の人氣をその双肩に集めることの出来る人であつた。女を相手にするに好い武器の一つである人氣といふものを持つた男であつた。かれは田舎の料理店の息子で、内藝者などのゐる中に育つたものだけに、年少時代からさうした女の空氣にはよく熟してゐて、若い時から異性に對する經驗と鍛鍊とを澤山に持つてゐた。かれは唄を巧に唄つた。三味線も手にした。口はさう多く饒舌る方ではなかつたが、その餘り饒舌らないところに却て女を引寄せせる力を持つてゐた。かれはいかなる場合にも、一人の女だけをその對者にしてゐることはなかつた。彼方を引くために此方を持ち此方を引くために彼方を持つといふ色男の奥の手をいつもかれは應用した。

それに釣られてかの女が熱して行つたと同じやうに、かの女自身もまたさうした形で哲太を熱くさせた。否、何も知らない英子かの女自身すら、矢張それと同じ形で、その盲目から目覺めて來たのであつ

た。2は3になり3は4になった。

男と女が花札を引く歡樂に浸つてゐるために、哲太は今まで手にもしたこともない花札を持つやうになり、五光のやくを知り、丹一のやくを知るやうになり、オヤとビケの位置に由つての花札の使ひ方をも知るやうになつた。否そればかりではなかつた。英子の里の兄の來た時には、英子がまだ哲太に嫁いで來ない時分に盛んにやつたその話が出て、『さうですか。ちつとも知らなかつた。哲さん、知つてゐるんですか、花を……。ぢや、僕の家にな組あるから一組上げませうか。あれも正月なんかちよつと面白いもんです。』かう言つて義兄はそれを持つて來て呉れた。

それに、女より他に誰も知つてゐない筈の、または他に知られては、箇の矜持にも威嚴にも關するやうな深い深い秘密を、哲太自身も知つてゐるやうに、先の男も女を透してさうした哲太の秘密を知つてゐるといふことが、一番深い辛い赫とするやうな焦燥を哲太に起させた。これは哲太ばかりではなかつた。すべての人間が皆さうであつた。その辛い想像乃至事實から、刃を肌に當てなければならぬやうな悲惨な出來事がいつも起つた。

自分の愛した女が人知れず持つてゐる疣、それは自分より他には知つてゐるものがない筈の疣、それを他の男が知つてゐるといふことはいかに深い苦惱を人間の魂に與へるものであらうか。哲太はそこまて想像する度に、身の置きどころもないやうになつて、女から却走したいやうな焦燥にいつも胸を焦した。つゞいて曾て讀んだことのあるゴンクウルの『陥穽』の中にあるその女主人公ジェルミニイが自分の情夫に他に女があつて、それについて體も魂も「びるやうに苦しみながら、その女の接吻し残した箇所を情夫の體の中にさがして、せめてもそれに満足するといふ一章が深く哲太の胸に思ひ出されて來た。

相手の體から他の女乃至男が接吻し残した箇所を捜して満足するといふ言葉、それはいかに悲しい辛いまた情ないことであるであらうか。またはいかに深く魂の動搖を覺ゆることであらうか。それを、世間は、世間の人達の多くはさうした大切なことを、何の不思議もないやうに、又は何の罪過でもないやうに、平氣で、軽い心で、勝利者とか劣敗者とか、または惚れたものとか振られたものとかいふ淺薄な心や言葉で片附けて、當然のことでもあるやうにしてやつてゐるではないか。現に哲太かれ自身すら、女から受けたさうした苦惱を更に移して英子に與へてゐるではないか。更に驚かるゝことは、ちやんとさういふ風に百も二百も承知して居ながら、何うすることも出來ずに女の體に引寄せられて行つてゐるではないか。

三日月の光出ぬ間に

ちよと驅け出し

戀がならひか、

人目が邪魔か、
曲る横町に柳影

その時分、女はさうした小唄をよく弾いた。三下りて、何でも吉原あたりでうつして貰つて來たらし、込んでゐる相の手の三味線が面白い情調を流るゝやうに人の心に誘つた。しかしそれ以上にかの女自身がその小唄に共鳴してゐたのであつた。戀がならひか、人目が邪魔か、矢張その唄にあるやうにして女は横町を驅け出して、柳の影の夕暮に靡く巷に惚れた男に逢ひに行つたのである。哲太をあとに残して、或は自分の爲すべき義務の一部だけをすまして、そしてその男の方へとうかれ心で走つて行つたのである。その頃には哲太はよく腹を立てた。またよく女をいぢめた。時にはわざと意地わるく女を自分の傍から離さないやうにした。それに、一家の人達は哲太以上にかの女と男の間を堰いた。

それから女は一中節にある小春髮結の曲の小春とお綱の會話のところをよく弾いた。前の三日月の小唄の方ではその戀ごろの留め難いのを示し、その一曲ではかれと英子とかの女の間の心をそれに託したのであるが、かの女は爪を糸にあてながら、自ら唄ふ唄の心にひかされて、思はずその眼からほろほろと涙を落した。

『だつて、何うせ、私は貴方の奥さんにはなれない。』
何ぞと言ふと、女はかう言つて哲太の顔を見た。

哲太はまた哲太で、『さうだとも……お前の言ふ通りだ。夫婦約束までした仲なのだから、何うかしてその人と一緒になる方が好い。それには僕は異論はない。お前の幸福の爲めなら、僕は今すぐでも別れてやる。辛いには辛いが仕方がない。』

かう言つて行詰まつたものゝやうな表情をして盃を口に當てた。

或る朝の長火鉢の前では、哲太も女も夥しく昂奮した。お互の心の中を隠すところなく打明け合つて了つても、それでも猶底に解決することの出来ない或物が残つた。今まで暴風雨のやうにお互に負けずに性の問題を饒舌り合つたのは、あれは、別の人であつたかのやうに、二人は言ひ合せたやうに口を噤んで了つた。互に相憫むやうな心が生じた。

暫らくしてから、

『何うも爲方がない。』

かう哲太は言つたが、すぐ言葉を續いで、『併し、かうして皆な何も残さず言つて了つたあとには、お互にさつぱりした理解が生れて來るもんだ。出来ないことは何うしたつて出来ない。……死んでも出来ない。何うも爲方がない。しかしこゝまでお互の心を知つたと言ふことは、非常に満足だ。喧嘩をしただけ、言ひ合つたり、又は水と火の中を通つて來たりしなければ、とても、さうした気分や理解は出て來ない……』

『……………』

女の眼には涙が光つた。丁度その時朝の日影は高窓からさし込んで、それが盃盤の上を朗らかに照した。何處かで復習つてゐる長唄の音が、黙つて相對した二人の沈黙の間を縫つた。

かうしたシーンがあるかと思ふと、或夜は哲太は夥しく腹を立てて、人々の留めるのも聞かずに、無理に外套を出させて、表の格子戸を一二寸はね返るほど音高くしめて、そして闇の中をすた／＼と遁れるやうにして出て來た。

突然かれは裏の細い路の溝に足を踏込んだ。はつとして慌て、抜かうとしたが、溝の中に深く陥つた。駒下駄は容易に取れなかつた。着物も長胴着も裾は皆な泥に塗れた。ことに、その長胴着は、その正月の贈物として、女が特にかれのために拵へて呉れたもので、意あつてか、なくしてか、助六の似顔の繪が一面にそこに模様になつて出てゐるが、その裾から膝のところは殊に夥しく溝の泥に塗れた。しかしかれは女の家に戻さうとはしなかつた。かれは汚れたまゝ、すた／＼と歩いた。かれはかれの戀が、心がすつかり泥土に委して了つたやうな氣がした。

『だって、俺は俺だ。何處まで行つたつて、俺は俺だ。かうした大きな家に住んで、旨い物を食つて、世間で人に知られてゐても、または世間がこの俺をすつかり棄て、了つて、お前さへ俺を捨て、了つて、山

の中か、絶海の孤島の中にひとり住んでゐても、俺は矢張俺だ。杉山哲太は杉山哲太だ。ちつとも變りやしない。だから、お前がお前の思ふやうに俺の總てを占領しやうと思つたつて、それは駄目だ。』

『だから、貴方は勝手だと言ふんです。』

かう妻の英子も昂奮したやうにして言つた。

『勝手でも何でも爲方がない。俺は世間のために生きてゐるのではない。また、お前や子供達のために生きてゐるのではない。お前の考へでは、世間に多く見るやうな善良な家庭の主人に、または溫和な夫に、慈愛深い父親になつて貰ひさへすれば好いのだらうけれども、俺はその要求のために、自己の自由と生命とを失ふことは出来ない。さう言ふと、お前達は、女は、すぐ薄情だとか不道徳だとか言ふかも知れないが、俺には厭になれば、重荷になれば、妻や子供は捨て、了つて差支ない権利がある。世間は何と言はうが、そんなことは頓着しない。七十五日経てば煙のやうに消えて了ふ世間の噂や批評などは何うでも好い。それは俺の権利だ。自殺が個人の権利であるのと同じやうに、矢張人間の底の底に横たはつてゐる権利だ——』

『だから、何うとも、勝手になさる方が好い。私なんか、何うせ食はせて置いて貰へば好いんですから……。踏まれても蹴られても爲方がないんですから……。』

『それはいけない……。いや、それがいけないと言ふのだ。何故、お前はさう思つたら、それに反抗

しないのだ。お前にも、俺と同じやうに、儼としたお前がある筈だ。俺なぞに踏まれたり蹴られたりして甘んじてゐられない貴い魂がある筈だ。何故、さう思つたら、夫に食はせて貰つてゐる物質を捨てないのだ。また、子供を捨てないのだ。子供はお前とは離れ難いかも知れないが、しかし、お前即ち子供ではない。子を棄てる藪はあるが、身を捨てる藪はない。實際さうだ……。さういふ苦しい境涯にある女は澤山ある。何故、ノラのやうに夫を捨てない？ 子を捨てない？ 家庭を捨てない？」

『日本の女ですから、そんな真似は出来ません。』

『それが出来なければ、矢張昔の女であるより他爲方がない。要するに、お前なぞはまだ贅澤なのだ。世間を知らないのだ。艱難を知らないのだ。自分はまださうした少しの資格も持つてゐない癖に、自分の夫のすべてを占領しやうとするのだ。それが不満なら、お前は夫の生活に何ういふ苦痛があり、何ういふ煩悶があり、何ういふ艱難があるかを知つてゐるか。恐らくは知つてゐないだらう。お前などは女としての眞實の道に漸く足を踏み入れた位で、まだ何にも知つてゐないのだ……。』段々昂奮して來たやうな形で、『お前なんかは、本當に自分の夫と思ふなら、もう少し俺を憫んで呉れて好いのだ。俺の苦しみを同感して呉れて好い筈だ。……俺は苦しい眞實の道を生きて來た。他人の心や權利を奪ふやうなことは、また他人を餘所に自分の欲するところをのみ遂げやうとしたことは、悪事は、これまで曾てやつて來たことはない筈だ。それは罪過はあつたであらう。何も知らないがために無意識に犯した罪過はあ

つたであらう。しかし悪事はしなかつた筈だ。人の魂を玩弄するやうなことはしなかつた筈だ。だから、俺はあの女をも捨てないのだ。何うかしてあの女の魂だけでも救つてやりたい。かう思つてゐるんだ。』

『私には、さう思つて呉れる人すらないんですから……。』

『いや、俺は思つてゐる。お前が母親の手から夫の手に移り、俺が死んだ後の子供の手に移つて、矢張今日のやうに詰らなく生きて死んで行くかと思ふと、本當に可哀相だと思ふ。……お前だつて、俺の一生の伴侶としてかうしてやつて來たんぢやないか……。』急に感極まつたやうにして、哲太は漲り溢れて來る涙を手で拭つた。

英子も夫に誘はれて涙を流した。考へて見れば、夫も可哀相である。その女も可哀相である。その中に入つて中でも殊に自分が立つ瀬のない身の上であることに考へ及ぶと、かの女の涙は更に漲るやうに胸に溢れて來た。

哲太は言葉を續いだ。

『だから、俺は俺のすることをする。俺のすることは、お前でも、子供達でも、世間でもそれを遮ることは出来ない。俺はこれまで家庭のためには盡して來た。俺はお前達を不自由な目に逢はせないために、人に冷笑されるやうな爲事をもやつて來た。かなりの犠牲を拂つて來た。しかし、それが、お前達

を保護しすぎたことが、お前達の不幸福になつたのだ……。何の不自由なこともないといふことが、お前達の心を沈滞させたのだ。お互に、もつと本當のことを考へる必要がある。俺は今精神の危機に臨んでゐる。新規時直しをしなければならぬ。俺は海へでも、山へでも、野へでもひとりで行く。ひとりで行つて考へて見る。そして破壊すべきものは破壊しなければならぬ。お前もひとり考へて見るが好い。夫や子供達のことになしに、自分自身のことをもう少し考へて見るが好い。』

『……………』

英子は何か言はうとしたが、それを押へて黙つて落ちて来る涙を拭いた。

『元を糾せば、俺の罪過かも知れない。しかし俺をかうした深淵に沈ませたのについては、お前にも責任がないではない。しかし、俺がお前をさし置いて、心を他の女に移したのはわるいかもされないが、移して了つた今では何うすることも出来ない。今すぐそれをやめろと言つたつて、それは無理だ……。やめたいと常に思つてゐる俺にすらやめられないで困つてゐるのだから。』

『だから、何もおやめにならなかつたつてよう御座んす。』

『さういふ反抗的の言葉を言ふのが既にお前の解らない證據だ。お前は夫の苦しんでゐるのを喜んでゐるやうなものだ。あの女に男があつて、何うにもならないのをお前は喜んでゐるのだ……。』

『そんなことはありません。』

『無いことはない。必ずある。それは俺のあの女に對した心の形でわかる。あの女に他に男があつて、それが自由にならない。夫婦約束までしても、一緒になれない。一面では俺はそれを可哀相だとは思ふ。しかし、そればかりではない。何うにもならないのを却て喜ぶやうなところがある。だから、お前にも屹度それがあるに相違ない……。』

『それはさうかも知れません。』

『それが情ないのだ……。つまり不自然なことをしてゐるのだ。一夫一妻の眞理であるといふことは、これでもわかるのだ……。』哲太は深く思ひ沈んだやうな顔の表情をした。哲太の胸には、女がちかにかれの家にやつて来て、女の家でかれが味はせられたその苦しみを、矢張英子にも味はせたことがあつたことが思ひ出された。

その時、英子は餘り進まないのを、女は無理に末の女の兒の八歳になるのを伴れて歸つて行つた。末の女の兒は、この前にも哲太に伴れられて女の家に行つたことがあるのでよく女に馴染んでゐたのである。『お前、行くかえ？』かう英子が女の兒に言ふと、女の兒はぢろくくと母親の顔を見ながら、また行つて好いかわるいかを氣兼ねしながら、黙つてぐづくしてゐるのを、女は、『よう御座んすね、奥さん……。一日貸して下さい。大丈夫ですとも……。ね、行きませうね。』かう言つて、奪ふやうにして伴れて行つた。

『まじくしてゐると、今度は、亭主ばかりぢやない。子供まで取られて了ふぞ。』こんな戯談を哲太

は言つたが、英子にはそれは單に戯談とは思へなかつた。歸る日に歸つて來なかつた時には、英子はひどく心配して、わざわざ哲太にそれを迎へに行かせた。

女の兒の口から女の狀態を何彼とさがし出して聞く英子と同じく、女も矢張女の兒から種々なことを訊いた。其處にも女同士の相互の暗中摸索があつた。それに、その女の兒が伶俐で、可愛い盛で、女にもよく懐いたが、しかも母親のことは遂にその小さい心から離れなかつた。母親が心配で堪らないやうに、矢張女の兒は絶えず母親のことを思つた。何んなに女からちやほやされ、めづらしい玩具を買つて貰ひ、賑やかなところへ連れて行つて貰ひ、撫でるやうにして可愛がつて貰つても……。

哲太が迎へに行つた時には、女はいくらか昂奮した状態で、眼を赤く泣き腫してゐた。母親を思つて片時も忘れない幼い兒の愛情が、一面かの女に女としての悲哀を思はせると共に、家庭を知らず、夫を知らず、また子を知らないかの女にある深い感傷を興へたのである。夙くから一家の没落の爲の犠牲とみなつて、さうした社會に生ひ立つて來たかの女は、淫蕩な空氣の中にのみ盲目に日を送つて來て、さて翻つて考へて見ると、自分はこれまでに何一つしつかりしたものを持つたことのないのを思はずにはゐられなかつたのである。

『奥さんなんか羨しい。かうして、片時も忘れない子供を大勢持つてゐるんだから。』かう言ひながら

女は涙を流した。不思議に思はれるほど、男の身の哲太にはちよつと理解の出來ないほど涙を流した。

『何うしたんだえ？ 一體……』

『ねえ、多喜子ちゃん、もう叔母さんのところへ來ませんね。矢張、母さんのところが好いのね。』

哲太の言葉には答へずに、こんなことを女は言つて袖で眼を押へた。

『何うしたのさ？』

『なアに、子供見たいなことを言つてゐるんですよ。』かう言つて、女の母親はその話を哲太にした。それはかういふ話であつた。今朝窓のところへ、女が鏡臺に向つておつくりをしてゐると、其處へ女の兒が見に行つて遊んで居た。

『今日はお家に歸るのね。また入らつしやいね。』

かう何氣なしに女が言ふと、女の兒はちよつと考へるやうにして黙つてゐたが、『もう來ないのよ。だつて、母さんに叱られるもの。』と言つた。子供だから思つたまゝを正直に言つたのである。それが女の胸を深く刺した。

相手が子供であるのを忘れて了つたかのやうに、かの女は夥しく激昂した。流石に女の兒には別にひどくは當らなかつたけれど、自分で自分を悲觀して、今朝からあゝして涙ばかりこぼしてゐるといふことであつた。哲太も女を憫まずにはゐられなかつた。『何んだ、そんなことで泣いてゐるのか？ 馬鹿

馬鹿しい。本當に子供見たいだ……』かう口では事もなげに言つて了つたけれども、その涙のかけにはかうした社會にゐる女の眞の悲哀と孤獨とが隠されてゐるのを哲太は思つた。かれ等は親の手から夫の手に移り夫の手から子の手に移る平々凡々な多くの世間の細君の持つたものすらも持つことが出来ないのではないか。稼業の爲とは言へ、またはさうして渡つて來た習慣のためとは言へ、心にもない虚偽を言ひ、火と水との中を通過し、惚れた男にはステッキで撲たれ、眞心の浪費にのみ日を送つて、さうして何一つしつかりと把握したものはないではないか。女は女で、哲太の家を訪問した時のことなどが際限なく胸に浮んだ。對者として英子の前に出たかの女は、いろ／＼な方面から壓迫を感じたが、中でも殊に、多い大勢の子供が母親の味方になつてゐる形に一番強くかの女は壓された。

『奥さんなんか、味方が多いから……』

かう言つて女は歎歎した。

妻を捨てなければ、子を捨てなければ、いくらかの女を愛したからとて、それは本當にかの女を愛してゐるのではない。ふとかう思つた哲太は、自分がいかに無理なまたは不自然な愛慾に捉へられてゐるかを思はずにはゐられなかつた。一夫一妻の理がまた強い力でかれを襲つて來た。

『矢張、女は夫を持たなければうそだ。』かうした言葉が口の上りかけて來たが、また現にさうしたことをこの前にも度々言つたが、それを口に、言葉に言ひ現はして了つては、其處に一種の厭味が出て來

て、到底その本當の心を傳へることが出来なかつた。右も左も皆暗い壁なのをかれは感じた。

女の心は右し或は左した。惚れた男とは何遍か離れては逢ひ逢つては離れた。惚れた弱味のために女が男に入揚げた金も少しではなかつた。そのために女の生活方面は荒廢した。家人と女との間の争闘も日夜絶えなかつた。

女はその度々の苦惱、それは哲太の苦しんだのと同じものであるが、その苦惱から浮び上つて來る度に、心を哲太の方へ寄せて來た。女は次第に人の妻となることの出来ない身、または世間の多くの女のやうに子供を持つことの出来ない身、その相手にする異性は太抵遊蕩兒か、でなければ色魔か、でなければ年を取つた人でなければならぬ身を痛感して來た。虚榮から性慾に目覺め、更に眞實に目覺めなければならぬ時が來た。

『二兎を逐ふものは、一兎を得ずといふことがあるよ。よく考へて見なければ駄目だよ。』かう度々哲太は言つた。また哲太は女が以前或る男につれない行爲を敢てして、殆どその男をして自殺するまでに至るほどの苦惱を嘗めさせたことがあつたのを指摘して、その報酬の種子も女はその苦惱の中には雑つてゐるといふことを言つた。此頃では、哲太は自分の苦惱が、思ひのまゝにならないことが、不自然な結果に墮ちて行つた形が、あの平野の僧の妻になつた女に對して曾て行つた無自覺が自然に酬つて來た

のであるといふ風に考へ出して來てゐるが、それと同じやうに、女もまた前の男の怨恨が執念く自分の體に絡みついて來てゐるのを感じた。をりをりかの女は、毒藥を仰がうとしたその男に追懸けられる夢から覺めた。その男の思ひだけでも、とても自分の戀は満足には成り立たないやうな氣がして來た。

それに、二兎を逐ふものは一兎を得ずといふ心理も、間接に、人知れずに、かれ等の周圍に動いてゐるのであつた。いくら、本能の力が強いと言つても、體を、魂を止ぼすやうな目に逢つては、しかも度々逢つては、遂には人間はそこから引返して來るものである。従つて女が惚れた男の薄情と虚偽から目覺めて來る心理は、直ちに、また的確にその苦惱から脱れやう脱れやうとする哲太の心理にも通じて續いてゐるのであつた。

哲太が *Duress* のやうな孤獨を痛感し始めたのはこの頃からであつた。それに、その戀の交錯の苦惱を別にして、生活の方面からも、種々なものが哲太を襲つて來た。哲太はその時分、長く勤めてゐた社をやめることになつた。またかれの心境にも、生命の浪費に浪費を重ねたために沈滞と疲勞とが大浪のやうに上から覆ひかぶさつて寄せて來た。デカダンから救はれたと思つたかれは、更に如何ともすることの出來ない魂の暗い壁に突當つて、何も彼も失つた人のやうにして、暗い街頭を歩かなければならなくなつた。

氣が附いた時には、かれはいつの間にかかれの持つた *Vital Force* を何處かへ落して來てゐるのを感じた。また精神の一部をも失つて來てゐるのを感じた。何を見ても興味を惹かなかつた。そして性來の

感傷的氣分が代つてその空所を領した。精神上にも物質上にも紙衣の悲哀が犇々と迫つて來てゐた。

殊に、かれは家庭にゐることの辛さを覺えた。書齋にある籐椅子、机、筆、原稿紙、楣間にかゝげた額、重荷が更に年々に重くなつて行く子供達、妻の英子の孤獨を嘆く涙の顔、さういふものが片時もやむ時なく細かにかれの疲れた精神を刺した。かれも矢張女と均しく、十年もかゝつて、熱い心をそゝいで、到るところで大小無数の手傷を負ひながら、何一つ把握し得たものゝない放浪者となつた。

それに、『時』がまたかれを脅かした。新しい時代がかれを脅かした。かれはかれが男女の苦痛と歡樂とに浸つて漂つてゐる間に、いつの間にか自分の時代の過ぎ去つて行くのを見た。常に自力を以て誇りとしたかれも、今は誰か大きな手で救つてでも呉れるものがなければ、このまゝ、烈しいまたは廣い潮流の中に永久に流されて行つて了ふやうな氣がした。縋るべき一握の藁すらないやうな氣がした。

かれは一家離散の悲惨な光景を眼の前に描いた。子供達は丁稚なり給仕なりになる。妻は幼い兒を伴つて涙顔乾く日もなき生活を送る。かれはかれで、抱いてゐた志をも、思想をも、精神をもすつかり失つて了つて、喪心したものゝやうに現實の塵埃の中に埋れ去つて了ふ。かう思ふと、かれは悲しかつた。自業自得とは言ひながら、それは餘りに悲し過ぎる末路だと思つた。かと思ふと、心の一方では、それに反抗する念が暴風雨のやうに起つた。『俺はわるいことをやつたのではない。人間のやることをやつたの

だ。それなのに、さうした弱い自脈を取るといふことは、自分が意氣地がないからである。お前は曾て強かつた戦闘の心を忘れたのか。勝たなければならぬ身であるのを忘れたのか。それを何處に失つて了つたのか。』かう思つて、女から、苦惱から、家庭から遁れやうとする心を鞭打つて見たが、しかしそれは僅にぼつと燃え上つた火のやうなもので、やがては消えて、濡れた落葉の唯ぶすぶすと燻つて烟を立て、るるやうな状態になつた。かれはもう燃えてばかりはゐられなかつた。燻つて末は消えて行く人間の身の上をも考へなければならなかつた。

かれはその周囲を見廻した。過去を振返つて考へた。いろ／＼なものが、今までとは漸く違つた形と姿とを持つてあらはれて来るのを見た。弱者の一生として憫み且つ呪つた亡兄の生涯も、決して徒爾ではなかつたやうに見え出して來た。また一生を奉仕の生活に送つて悔いも嘆きもしなかつた叔父の一生なども貴く思はれ出して來た。

Dutalの入つて行つた中世紀の修道院の中には、國に血を流した革命があつたのも知らず、女の體がいかにつくられてあるかも知らず、世間にいかなる無数の悲喜劇があるかも知らず、死ねば棺にも入れずにそのまゝ、肉體を冷めたい土に埋めて了ふ人達があるものであつた。また互に名をも記せず、そこに入つて來るまでの前生の何なるかを問はず、沈黙して、勞働して、そして神の前に手を合せて死んで行く人達があるのであつた。かういふ人達と自分乃至世間の人達の送つて來てゐる生活との對照は、不思議

な印象をかれに與へた。

Dutalはその修道院の中にある、森のかげの小さな清い泉に對して、その渦紋をなして流れ出して來てゐるさまに靜かに見入つてゐる。そしてその中にかれの經て來た人生を發見してゐる。水紋は湧き且つ日に光つてキラ／＼と輝いてゐる。Dutalはちつとそれに見入つた。

その遠い遠い外國にある清い泉、その中に哲太も矢張そのかれの人生を發見したやうな氣がした。その遠い泉には白い雲の影が靜かに徂徠した。

哲太はまた奈良朝時代の男女のさまを頭に浮べた。曾て行つて見た西の京のさびしい大きな寺、ブロンズの佛像、それは今は徒らに遊覽者の心を惹くにとゞまつてゐるけれど、また深い塵埃と土の香とめ切つた扉の中とに閉されてゐるけれども、昔は男女の苦しい戀の涙や、願ひや、煩悶が盛んな香煙と唄音とに雜つて、無限にその前に灑がれ、開かれ、祈られたのであつた。かれはまた一國の帝王が皇后以下百官を引いて、華嚴經のために、あの大きな毘盧沙那佛を開眼した時のさまを想像した。その時代の戀ごゝろは、男女の涙は、苦悶は、歌となつて、千有餘年の後の今日も猶もわれ等の耳と心とにある。哲太はさうした一代を擧げて宗教に赴いた人心のかげに、淫蕩な、自由な、または魂の亡びるやうな辛さが、または生命を捨て、も猶戀の情に酔ふことを惜まなかつたやうなやさしさが、未曾有のすぐれた悲しい美しい繪卷を擴げてゐることを思はずにはゐられなかつた。

かれはかれの嘗めた戀の苦惱が、横には歴史を、縦には人生を貫いて、徒爾ではなしに、微塵數の心の中にはつきりと連続してまたは獨立して浮んでゐるのを見た。戀の苦しみに對する廣い同情はかれに涙を誘はずには置かなかつた。

英子の此頃の狀態も哲太の胸に悲しい或る暗示を與へた。英子は以前のやうには泣いたり崩折れたりしてばかりはなくなつた。母を亡くした悲哀や、女に對する嫉妬や、焦燥や、さういふものばかりにこだはつて悲觀してはゐられないやうに見えた。自分も女として、妻として、または母親として立派に獨り立つて見せなければならぬと思つたらしかつた。殊に女としての目覺めが著しく眼に立つた。

旅から歸つて來た時などに、英子がいつもに似合はず、大きな丸髻を水々しく結つて、派手なカセカケを際立つて見せて、そして莞爾として出て迎へる形がかれに不思議な印象を與へた。否そればかりではなかつた。此頃はかの女はつとめて扮装を亂さぬやうにした。今までは隅の方へ押やつて、減多に顔を映しても見たことのない鏡臺を綺麗に拭いて、櫛も揃へれば、化粧品も總領の娘のだけ別なのを買つて來たりして、着物も藏つて置いた派手な物を出して着た。英子は幼い頃は下町の小さな店に育つて、娘時代には、何方かと言へば派手なつくりの方であつたが、子供を持つてからは、すつかり山手の細君風の庇髮になつて、家事と子供の養育に忙殺されて、つひぞ櫛や、根がけや、鬢髻のたしなみなどは振返

つて見るひまもなく過ぎて來たのであるだけそれだけ、この丸髻とカセカケの復活は、哲太に種々なことを思はせた。哲太は黙つてその丸髻姿を見た。

淺猿しい悲しいやうな氣がすると同時に、異性を憫む念が盛んに起つた。哲太は醜つて自己の妻を、一生の伴侶である妻を、さうした孤獨の狀態に陥れて行つた自分の罪過を思つた。またかれは其處に世間に無數にある兩性の二つの力の悲しい扞格を思つた。つゞいてかれはさうした悲しい扞格から自然に孕まれて行く無數の悲劇を想像した。

普通の家庭には、殊に日本の保守的な家庭には、さうしたことは尠いであらう。さうした復讐的悲劇は絶えてなくして僅に有るものであるであらうが、狹斜の巷などには、他から他へと移つて行く心は決してめづらしいものではなかつた。否、外國の小説などには、さうしたシーンが到るところにあるのかれはかねて讀んで知つてゐた。

哲太にはゆくりなく不治の病を宣告された親友のKが妻妾を同棲させた頃のとが思ひ出されて來た。その時分、Kは、

『亭主がいろんなことをして見せると、細君もそれに鍛鍊されて、思ひもかけない性慾を發展させて來るもんだよ。油斷がならないよ。』

かう言つたことがあつた。哲太はその時分はまだその言葉が本當にはわからなかつた。さういふこと

もあるものかなア。」と思つただけであつた。そのKの言葉が、その2と3の悲劇を散々繰返して、遂には松原の中の病院の一室に妻妾二人に介抱されながらさびしく死んで行つて、今はその遺骸も全く土に歸して了つたKの言葉が、不思議にもある確とした眞理と事實とを以てかれの胸に蘇つて來た。そして一方、その言葉は、Kがいかにその當時2と3の苦惱を戦つたかといふことをかれに思はせた。

女が哲太の前にその女の獨立と權利を儼として主張してゐると同じやうに、英子もまたかれに對して孤獨が孕んだ獨立と權利とを主張し始めたのであつた。かれの苦しみは更に一つの新しい影を添へた。

英子はかれが晩酌をすまして床に入つてから、三日おき位に、ソツと着物を着更へて、近所に住んでゐる髮結の許に出かけた。『矢張、日本髮に結つて綺麗にして置く方が好いでせう。』こんなことを皮肉に言つて、そしていつも出かけて行くが、さうした心の姿の萌して來たといふことは、單に身じまひの爲めと言つてすまして居られるであらうか。また單にかれの持つた他の女に對抗するため、即ち哲太自身に媚びるための心のあらはれと見てすましてゐられるだらうか。そしてさうした心を英子に起させたのは、果して誰か。誰の咎か。誰の罪過か？ または自然の大きな皮肉か？

夫に自分を美しく見せやうとする心を一轉換すれば、即ち浮氣な心になるのである。また、客觀的に見て、夫に綺麗に見える細君は、大勢の誰にも矢張綺麗に見えるのである。危険の分子が多いのである。

外面からも内面からも誘惑されて行く量に富んでゐるのである。それに、人間の根本から言つても、異性に要求を持つてゐる心の多いものだけそれだけ、皮膚の色も美しく、姿形も艶でやかに、髪や着物などにも彩や影を添へて來るものである。哲太は深く考へずには居られなかつた。心の複雑した變化と状態とに長い間苦しんで來たかれは、更に深く異常な細かい心のあらはれを凝視した。

かれは世間に澤山にあるさうした心に捉はれた女——役者とこつそり小待合に嬉曳する妻、力士と郊外の料理店に快樂を貪る未亡人、始めは亭主の遊蕩に對する反抗から出立して、段々異性に對する興味にはまつて、遂には曾ては生命であり自己の大切な分身であつた大勢の子供達をすら捨て、深い性慾の淵に陥つて行く細君を想像した。またさうした女達が大概は中年以上、今まで性慾に無自覺で盲目であつたものに多いのを想像した。従つてその浸つて行く快樂は、生命を亡ぼしても猶悔いしないほどのものであるに相違なかつた。相手の惚れてゐる惚れてゐないなどを穿鑿してゐる暇のないものであるのに相違なかつた。例としてさうした女達は、男から金を捲き上げられ、物品を捲き上げられ、最後は社會上の名譽までも破壊されて、そして始めて死乃至覺醒に面して立つた。

さうした女をかれは英子に當て、考へて見た。さうした場所に、又はさうした深淵に……。想像は想像を生んで行つた。かれの過去の所行は、當然かれの妻をして、さうした女の種類の一人たらしめずには置かないやうな氣がした。かれはKの所謂『油斷ならない』以上の戰慄を總身に感じた。

しかし自己を捨て、翻つて客觀的に英子の身の上から考へて見ると、さうした快樂は、かの女を沈滞した空氣から救ふには相違なかつた。かの女はその爲めに女らしい生氣と色彩とを帯びて來るであらう。今までのやうな動かない心ではゐられなくなるであらう。世間で言ふ意味とは違ふが、人間としての本當の幸福を感じるであらう。或はそのためにその生命を失つても悔いがないであらう。もしか英子が果して強い聰明な女であるならば、一度溺れかけたその深淵から何うやら彼うやら浮び上つて來るであらう。そしてその浮び上つて來た形は、人間の價值から言つて、今の英子よりも數等すぐれたものであるには相違ない。しかし、夫は自分の妻をしてさうした所行を敢てさせることが出来るであらうか。黙つて、單に價值を進める所以だと言つて見てゐられるであらうか。また、大勢の子供達の母親の手から離れて行く慘めさを見てゐられるだらうか。かれ自身にしても、既に一度その苦惱を女から嘗めさせられた。とても再びそれに堪へられないのはわかり切つてゐる。しかし今ではそれを英子から嘗めさせられないとは限つてゐなくなつてゐる。その自由は、權利は、今は移つて英子の心にあるのである。曾て夫から踏まれたり蹴られたりした其權利は――。

かれは彼になつてから、髮結の許に出かけて行く英子を想像した。そこには何があるかわからなかつた。髮結の女乃至その亭主は、かの女にいかにか快樂に満ちた世間を見せるかわからなかつた。またかの女の出る行く交際の範圍に、何んな惡魔の手が潜んでゐるか知れなかつた。

かれは人間の個々の對立といふことを深く思つた。また自己の心、唯心一つが、何んなにいろ／＼な悲喜劇の形となつてあらはれて來るかを思つた。他と自とが雜り合ひ、また離れ合つた形は、到底普通の心理では解けないのをかれは感じた。そしてこの細かい心の苦惱の周圍を精神上にも物質上にも今は全く紙衣であるかれの境遇が取卷いた。

かれは何うかして自分の生活を立て直さなければならぬと思つた。餘りに世間にまたは愛慾に着きすぎ染まりすぎたからである。また餘りに尖鋭な神經を異常な心理の中に突き込んだからである。かれは旅から旅へと出て行つた。

しかし、かれは矢張戀の重荷を負つてゐるドン、ヂヤンであつた。雪の深く降り積る温泉場、排雪機關車の轟音を漲らして行く積雪の中の停車場、怒濤の凄じく打寄せる海岸のさびしい旅舎、何處に行つても、離れ難い女の情が絡み着き纏はり着いた。振り放つても、女は片時もかれの心を離れなかつた。

かれはそれを強ひて押へた。その方が、女に離れて行くやうにする方が、自分のためでありまたかの女のためでもあるのである。自分が離れさへすれば、先の男も疑心暗鬼を去つて、自然に女の心を正當に、すなほに受け入れるやうになるに相違ない。そこにかの女の幸福がある。女を殺して自己も死ぬほどの愛情が自分にあつたにしろ、妻を捨て、子を捨てなければ何うにもならない境遇にゐるのであ

る。又それも爲て出来ないことではない。しかしかれの考へでは、それは一種かれの自滅である。或はそこまで着いて行く方が好いと言ふ人もあるかも知れないが、またそれは自滅どころではない、却てその方が本當だと言ふものもあるかも知れないが、少くともかれ自身に取つては、それは自滅と没落とを意味してゐる。ある旅舎では、『馬鹿な奴だ。……まだ、そんなことを思つてゐる。貴様は昔は快活な青年ではなかつたか。百里の道を草鞋に踏み躪つて、猶有り餘る客氣は天を衝くやうな青年ではなかつたか。女などは殆ど眼中に置いてゐない青年ではなかつたか。』かう自ら叱咤して、寒い、寒い、誰にでも刺されるかと思はれるやうな朝風に橋を走らせて、深雪の中を五里以上も山の中に入つて、古びた旅舎の一間にさびしい一夜を過した。

それはNといふ高い山麓の裾にあるやうな町で、その附近を流るゝ川の奥は、青年の頃に讀んで憧憬した『北越雪譜』といふ本の中にある深山窮谷の中であつた。そこでは住民は終夜槽火を焚いて、その傍で、吠の中に入つて、その上に筵を幾枚も重ねてそして僅かに夜眠の暖を取つた。高い、高い崖の下を流るゝ深潭、そこに春を下して鮭を獲るのを生計のたつきにするやうな生活、今の世でも、まだそこにはいくらかもさうした文化の影響は及んでゐないといふことであつた。かれは出来るだけ深く、その雪の谷の中に入つて行かうと思つて、それを宿の主人に訊くと、

『今ぢや、とても入つて行けやすまい。』

かう言つてとめた。

それにも拘らず、明日は行けるところまでは行くつもりで、その準備を宿に頼んで置いて寝た。ところが、その夜は更に凄しい大風雪で、今度は先へもあとへも行けないやうになつて了つて、止むなくかれはまたその古い山裾の町で二日を過した。

火燧があつて、温かではあつたけれども、すつかり閉め切つた雨戸のあかり取りの窓は小さく、室の中は薄暗く、少しのすき間からも風雪は粉のやうに細かく氷つて吹き込まれて來た。ギシ／＼と軋む階梯、長い廊下の隅にある風呂、旅舎の人達のゐる室には、灯の晝もついた神棚があつて、若い主人夫妻は雪に包まれた旅客を親身の人でもあるやうにして迎へた。

夜は三味線の音が靜かに何處かできこえた。

來た女中に、『藝者でもゐるのかえ、此處には?』

『いゝえ。』

『ぢや、誰が弾いてるの?』

『若いお上さん。』

『上手だね。』

『だつて、小千谷に勤めてゐたんですもの。』

『さうかえ、いつ来るやうになつたんだえ?』

『つい此間、まだ二月位にしかありませんまい……。大旦那さん、わかつてゐるもんですからね。それで、入れることになつたんですもの?』

『ぢや、さつき見た、色の白い、何處か婀娜ほいと思つた、背の高いあれがさうだね。』

『え、さうです。笑ひながらばたくと女中は階梯を下りて行つた。』

哲太は火燵に凭れながらひとりてその三味線の音を聞いた。

S君。

Kの停車場で別れてから、一度手紙をさし上げたいと思ひながら、ついその機会がなくて、今日まで御無沙汰を致しました。香港から一通、マルセイユから一通、それに巴里から一通、君の方からは常に消息をきかせて下さつたのに、私はそれに酬ゆる手紙らしい手紙もさし上げず、酒間になぐり書にした連名の端書、でなければ即興の歌を亂暴に書いた端書、まことに濟まないと思ひながら、その中細かく落附いて書いて出さうと思つて、横封の封筒は旅に出る時にはいつもちやんと用意してやつて來るのでした。

しかしさうした中にも月日は用捨なく經つて行きました。もう、君が其方にお出でになつてから一年足らずの月日が經ちました。S君、君は新に修業をするつもりでフランス行を思ひ立たれた。勇ましい心だ。私も萬事を捨て、一緒に出發して行きたい位の君のフランス行でした。あのHの温泉場で最後の別れを惜しんだ時、私は酔つて、『僕はこれから異性の研究だ。』かう瘦我慢のやうに言ひました。と、君は靜かな落附いた例の態度で、『それは面白いね……。異性の研究、それは面白いでせうね。』かう重ねて言つた。それを覺えてゐられるでせうね。

異性の研究、今、考へて見ると、我ながら馬鹿なことを言つたものです。研究? 私にその研究が出來たでせうか。また、さうした魂の問題の中に赤手で飛び込んで行つて、殊にわれ等藝術を旨とするもの、單純な心を以て、手紙を負はずにその中から引返して來ることが出來るでせうか。研究? 大膽にも程があるとあの時君は思はれたに相違ないので。S君、君に別れてから、君が外國の文化の空氣に觸れ、新しい果實を劈くやうな藝術の空氣を嗅ぎ、新興理想派のすぐれた作品に親まれてゐる間、私は性の濁つた溝竇の泥に塗れ、火と水のやうな地獄の釜の中に漂ひ、冷熱の往來する心の巷に戰慄しつゝ、其時分はまだいくらか持つてゐた精神をも半は失つて了ふやうな心の境遇に陥つて了つたのです。研究どころか、却つて此方が解剖臺の上にあげられて、まごころする

S君。

君は自然に家庭から出て行かれた。しかし私は家庭から獨り自ら出て行かなければならない放浪者でした。私は何も彼も亡くして丁ひました。得やうと思つて却て亡くして丁つたのでした。それにしても、あの大川端の水のほとりて、初秋のあざやかな水に灯のうつるのを君と俱になつかしんだ頃のことを思ひ出されずにはをられません。あの頃はまだ私も無邪氣でした。何も知りませんでした。異性を唯の美しい對象とのみ思つてゐました。欲することは必らず得られ、求むるものは必ず來ると思つてゐました。それにしてもあの美しい人は何うしたでせうか。一度はあの川の畔にも行つて見たいと思ひますけれど、今は、今は、もうさうした心の餘裕を持つてゐなくなりました。

何と言つて好いか、『時』の力と言つて好いか、それとも人生の底の底にある或物の消長と言つて好いか、兎に角さうしたものに不斷に惱まされて、自分で自分がわからず、さうかと言つて、そのわからぬ自分を何うにかしなければならぬといふやうなあはれな漂泊者になつて丁ひました。

S君。

しかし、これも止むを得ません。自分で何うかする他、爲方がありません。かういふ有様なので、従つて、此頃は舊友の誰にも逢はず、Y君、N君、K君などとも疎く暮してをります。今夜は靜かな宿で、波の音が微かに聞えてをりますから、それを枕に靜かに寢やうと思つてをります。それではまた――

月 日

かねて持つてゐた横封の封筒に入れて、その上に、巴里の宿所とSの宛名を書いてそしてそれを傍に置いた。火燵板の上には丸行燈の灯が靜かに落ちて、外では風雪の絶間を波濤の音が縫つた。

明日は早くこれを出させやうと思つて寢たが、しかしかれはそれを女中に渡さうとはしなかつた。かれはその横封の封筒を風呂敷の中に包んだまゝで、その海岸の宿から出て汽車に乗つた。

汽車に乗る時にも、ちゃんと今朝切手まで貼つて置いたのであるから、構外のポストに投り込めばすぐ投り込めたのだが、何となく書いてあることが餘りに感傷的にすぎるやうな氣がしたので、そのまゝ風呂敷の中からそれを出さうとしなかつた。かれはまた旅をつけた。

ある田舎で午飯を食つた時にも再びそれを思ひ出して、『感傷的だツて、何だツて構はない。折角書いたんだ……。それに無沙汰もしてゐるんだ。』かう思つて、風呂敷包の中からそれを出して、そのまゝ火燵板の上に置いた。

女中は膳を下げながら、

『これはお出しになるんですか。』

『いや、待つて呉れ。』

かう言つてかれはそれを遮つた。

殘 雪

かれはもう少し別なことを書いてやりたいと思つた。かうした苦惱を傳へるのには巴里は餘りに遠すぎるやうな気がした。また今迄この友達にかうした苦惱を告げてやつたことはないとも思つた。この友達とはかれは長い間一緒に同じ道を歩いて來た。藝術の苦しみも、人生の苦しみも俱に苦んで來た、それに、年齢も一つ違ひなので、境遇からカルチュア、心持、氣分、すべて似たところを持つてゐた。しかし互に心を合はせてゐながらも、互に相手を深く信じ合つて、言ひたいことも七分まで言へばそれで完全に理解が出来るので、これまでもつひぞさうした苦しみを打明けたことがなかつた。またその友達の方にしても、矢張さうであつた。友達が苦しみに邂逅した時にも、「人生の艱難は何うも爲方がない。」かう言つたやうな表情をして、二人とも黙り合つて了ふのが常であつた。

かれは其處を出る時、その封筒をポケットの中に入れた。

寒いのでポケットに手をよく入れる。その度にその封筒に觸る。と、巴里の町の賑かなさま、大きな層をなした建物、噴水の見事な公園、後期印象派の繪畫の並んだ畫堂、女の姿を前にしたモウパッサンの像のある小さな公園、郊外の明るい日影に働く農夫達の群、ルウアンの大きな藝術家の邸宅の址、さうしたものが、女の顔と、涙と、またはその何うにもならない心持と、眼の前に展開された風雪の野と雪に埋もれた村落と一緒になつてかれの頭を徂徠した。

つゞいて過去になつたさまざまの思想や、思想につれて起つた事件や、その思想の土崩瓦解して行つ

たさまが、混雜とかれの眼の前に映つて見えた。「唯、一つあるばかりだ。あとは何も彼も皆空想だ。」かうかれは思つて頭を振つた。

そこは小さな停車場であつた。雪は既に人家の軒近くまで深くつもつてゐたが、さつきから發車しないでゐるのを不思議に思つてゐたが、ふと氣がつくと、乗客の下りて行く氣勢がして、

『困るな。此處は何處だえ？ Kかえ？ こゝには町といふ町も何もありません。』

『駄目なのかな。』

『何でも、先が埋つたさうだ。』

『困るな。』

こんな言葉が其處にも此處にもきこえた。哲太も起つて行つた。

野も山もすべて眞白に深く雪に埋められてゐた。成ほど小さな停車場で、今度新に軌道が敷かれたために、取敢ず間に合はせに出來たものらしく、掘立小屋のやうな中に、カン／＼炭がおこしてあつたが、驛員達は困つたやうな顔をして降り頻る雪の中を彼方此方へと往來してゐた。「寒い、とてもたまらん。」こんなことを言つて、後には乗客達はその停車場の中の火の周圍に集まつて行つた。

ポケットの中の封筒は、をり／＼哲太の手に觸れた。しかし此時には、もうかれはその手紙を外國に出さうとは思はなくなつてゐた。

停車場からさう遠く離れてゐない深雪の中の或る温泉場に泊つた時には、女に對する戀ごゝろが、意味も理由もなしに募つて來て、何うしてもその眼を、眉を、表情を見ずにはゐても立つてもゐられないやうな氣がした。當分離れてゐるために企てられた旅であり、また心を他へ移すためには全力を擧げなければならぬといふことをちゃんと知つて居ながら、しかも何うしても押へることが出来ないほどの力を以て迫つて來た。

遠く堆雪の中を一二里も木管で引いて來てゐる湯は、途中で冷めて、温くなつて、長い間體をその中につけてゐても、容易にあがつて來ることが出来なかつた。湯は玉のやうに透徹つて綺麗であつた。小さな樋から落ちて來る湯、それでもそのあたりはいくらも温度が高いので、成るだけそこに體を寄せざるやうにして、山中のさびしい冬の温泉場を頭に浮べたりしてゐるが、その時分から、離れた女に對する心は次第に細かくつよく波打つやうに募つて來てゐた。さびしい冬のひとり旅ではありながら、實は片時も離れられない女の面影と一緒に伴れて來てゐるかれは、何につけ、彼につけ、三味線の音を聞くにつけ、柔かな女の髪の色を見るにつけ、またはかうした靜かな冬の温泉の詩趣あるさびしさを味ふにつけ、日に日に、次第にその眉目の色濃くなつて來るのを感じた。湯から上つて來た時には、そこにかける大きな鏡に、かれの姿と並んで、女の笑つて立つてゐるのを見るやうな氣がした。

室に歸つて來て、かれはひとりで一二本の酒を飲んだ。絶えず押寄せて來る戀しさを押へながら、または一つ一つ思ひ出されて來るそのをりくゝの笑顔を押退けながら……。しかしかれは次第にさびしさに堪へ難くなつて來た。またかうして企てられた冬の旅の無意味が繰返されるやうになつて來た。

『今夜、十一時に、此處を通る汽車があるんだね。』

『えゝ。』

中年を過ぎた卑しい笑ひ方をする女は、かう言つて傍に寄つて來たが、『あるけど、寒くつてな……。』それには頓着せずに、かれは突如として言つた。

『それぢや、僕はその汽車で歸ることにするからね。』

『お歸りになる？ その汽車で？ お泊んなさいよ、今夜はゆつくり……。寒くつてしやうがないよ、夜中の汽車なんか……。』

『いや、歸る。忘れてゐた用事を急に思ひ出したから。』

かう言つて、かれは逸早くも其處等に散らばつた手帳や鉛筆などを取片附けにかゝると、

『何うしてそんなに急に思ひ立つて歸るつていふのよ。いやな人ね。泊るとばかり思つてゐたのに。寒いよ、夜中の汽車は？』

『なアに……』

かう言つて、時計の蓋をあけて見て、『まだ一時間足らずある。それぢや、それまでに一本飲むかな。』女の方へ歸るといふ心が、何があつても兎に角女の顔だけは明日見ることが出来るといふ心が、急に旅行中消極的にしよけてゐたかれを力附けた。かれは旅行案内の細かい時間を繰つた。幸ひにそれは急行車であつた。百里に近い距離をかれは時の間に歸ることが出来るのを嬉しく思つた。尠くとも、明日の午前中には、女の顔を見ることが出来た……。

『何うしても歸るの？』

その中年の女は、かれに對してある目的を持つてゐたらしく、頻りにかれを引留めやうとしたが、何うしてもかれがその決心を改めないのので、失望したやうにして言つて、そのまゝ酒を取りに帳場の方へ行つた。

あらゆる邪魔も、あらゆる障礙も、又あらゆる反省も、何も彼も女に向ふ心に面しては、日に對する氷のやうに忽ちにして解けて流れた。かれは寒さを凌ぐ酒を大急ぎで飲んで、そしてそこから出かける支度をした。

温泉場から停車場までの間には、處々電燈の柱が並んでゐたから好かつたやうなものゝ、もしそれがなかつたなら、かれは凍つた雪道に滑り、または一步踏込めば半は身を没するやうな深雪の中に陥つて戀に燃えた身をじぼして了ふやうなロマンチックな幕を演じたかも知れなかつた。再び盛に降り出して來た粉のやうな雪は、チラチラとその電燈の柱の周圍にかゝやいて、下には凄じい谷の鳴る音が轟々とかれを脅かすやうに聞えた。

しかしその危険な谷に沿つた道も、凄じい怪物の吼えるやうな瀨の音も、または寒い寒い錐のやうに肌をさす夜風も、誰も通らない深夜の闇も、かれの心に影のやうに添つた女のために、かれはさびしいとも辛いとも何とも思はなかつた。かれは唯明日逢はれる女の明るい顔をのみ頭に描いて、滑る靴を踏みしめながら、急いで停車場の方へと向つた。

此時には、かれには最早妻の英子もなければ、子供達もなければ、一家離散の悲惨な光景もなければ、または失はれた精神、亡び行く半生の慘たる光景もなかつた。再びかうして意氣地なく捉へられて引摺られて行く弱い心を鞭打つやうな念は、さつき宿を出る時にはちよつと起つたけれども、それとて何等大きな反響を心の上に齎さなかつた。却て女が、その捨て去らうとした女が、女の一顰一笑が、かれに或は生を、或は死を與へるものであるといふ風に考へられた。そして自分の取つた自脈が、消極的な心が、反省が非常に愚かな馬鹿々々しい行爲のやうに思はれ出して來てゐた。あの一つの心をさへ把握することが出来ないで、自分は何をしやうとするかとすら思つた。

一つ一つ傳つて沿つて歩いて行つた電燈の柱は、やがてかれを深雪の中に八分通り埋つた停車場へと

伴れて行つた。そこには、郵便脚夫と仲賣の男と菓子や煙草を賣る少年とが、残り少になつた火を圍んで、何か饒舌つてゐるばかりで、深夜の急行車に乗らうとするやうな客は、この小さな山中の停車場には一人も見當らなかつた。

かれは構内を彼方此方と歩いた。汽車の來るまでにはまだ時間が三十分以上もあつた。

少年は一度ぐつすり寝たのを、主人に呼び起されて、そして此處にやつて來たらしく、『もうこんなところにあるのは眞平だ……。明日はもう遁げて行くんだ。いくら落ちぶれたつてこんなところにあるて、夜中に起されるよりは増しだ……。寒い、寒い……。何てべら棒に寒いんずら？ もう少し火をくれても好きさうなもんだな。』など、愚痴を言ひながらいくらあられてもあられ榮えのしない火を火箸であらけた。

『寝起きだから寒いんずら？』

『あ、もうよく〜いやだ……。毎晩、この急行に起されるんだが、とてもたまらねえ、命にはかへられねえ。』こんなことを言つて、がたく〜身を戦はせた。

『おい、敷島一つ呉れ。』

かう言つて、哲太はその少年から煙草を一つ買つた。

『それ、矢張、起きて來れば、お客様はあるにはあらア』

かう笑ひながら郵便脚夫は言つた。

哲太は自分の少年の頃のことなどを頭に浮べながら、構内をあちこち歩いたが、世間の艱難に對するといふ心持も、何處に行つても辛い悲哀と不如意とがあるといふ同感も、胸に燃えひろがつた女への憧憬のために蔽はれて、いつものやうに強く起つては來なかつた。『さうした多くの人達に比べれば、まだ自分などは幸福だ……。』かう思つて、かれは時計の針の既に發車時間を過ぎてゐるのをぢつと見詰めた。

『遅れるかね。矢張……。』

かう訊くと、

『いや、來ますよ、もう。急行だ……。急行は遅れても、大したことはねえ。』

果して地を撼すやうにして、排雪機關車をつけた汽車はやつて來た。凄じい機關車の響、堆雪の中に張りわたる白い濛々とした煙、かれが二等室のクツションに頭を凭らせた時には、汽車は既にその小さな山中の停車場を動き出してゐた。

平野の温泉場で暮した一月二月、山の廢寺の中に過した半年、そこでは殊に僧侶のやうな禁慾の生活を營むつもりでやつて行つたが、しかも一面はかれ自身から、また一面は女の方からそれを破るといふやうな形になつて、矢張思つたまゝの心の統一をすることが出來ずに終つた。即けば離れ、離るれば即

くといふ原理、それが常にかれ等の心の周囲を取巻いた。

『私がやつて来たのがそんなに迷惑なら、さう言つて下さい……。すぐ、今すぐ歸つて行きますから。』

わざ／＼やつて来てまだ一時間も経たない中に、二人はもう喧嘩してこんなことを言つて女は眼に涙を浮べた。かと思ふと、細君を傍に豫想してゐない、また男を他に置いてゐないかうした離れた土地での二人の生活は、都會での生活とは違つて、著しく互に深く心持なり気分なり感じなりの一致してゐるのをかれ等は感じた。さうした時には、女はいつも丸髻に結つて来たが『かうしてゐると、ちつとも可笑しくはないわね。誰が見ても、奥さんに見えるでせう。』などと嬉しさうにして言つた。

かれはさうした形で女と一緒に歩いたさまを其處此處と繰返して思ひ出すことが出来た。野椿の花の赤く咲いてゐる野川の岸、丘から丘へと通じてゐる間を山合の温泉場へと出て行く眺望の好い路、谷川を跨つて大きな朱塗の橋のかゝつてゐるすぐれた溪流に添つた路、時には秋の紅葉の美しく錦繡を織り成した山路を、かれ等は車にも乗らずに、互に心置なく話しながら楽しさうにして歩いた。時にはまた田舎から歸つて来る長い汽車を二人は睦まじさうに乗つて、他に何の苦勞もないやうに、邪魔も何もない戀人同士のやうに、辨當を買つたり茶を買つたりした。

しかも別れた後では、女は心がすぐ疑はれた。さうしてわざ／＼遠いところをやつて来たり、また心

から眞心を見せたりするやうな行爲に出づるのは、それは何うしたことか。それは何處まで本當であるのか。物質を除いて何處まで本當であるのか。『狐！ 狐！ たしかに狐だ！ 自分の行をさまたげる面をかぶつた狐だ！』かういふ風にかれは考へた。或時それを言ひ出すと、女は怒つて、

『なら、勝手になさいな。』

『だつて、さうとより思はれないからしやうがないぢやないか。』

『何うして？』

『言はなくつたつてわかつてゐるよ。』

『また、あのことを言ふんですね。……あれほど、もうそんなことはないと言つてゐるのに……。』

『何うだかわからない……。』

『なら、勝手にする方が好い。』

かうした會話は、しかも何遍繰返しても爲方がないと知りながら、繰返さずにはゐられない言葉であつた。かれは女の歸つて行つた後の廢寺の中で、幾日も幾日も寛に對して、手を拱いて、黙つてそれを考へた。

山の高原の中にほつくり立つてゐる別荘の中に半年以上もゐた時にも、矢張女はやつて来た。停車場、田舎町、泥濘が深いので買立ての足袋も下駄もすつかり汚れて了ふやうな路、さうした間を大きな信玄

袋を抱へて女はやつて来た。

別荘の近くに来た時には、女は既に下駄をぬいで足袋跣足になつてゐた。驚いて出て行つたかれの顔を見るや否や、

『まア、ひどい處ね。』

かう言つて、肩にした信玄袋をドサリとそこに置いて、さもなくば疲れたやうに、縁側に腰をかけた。縮緬の腰巻にも、泥濘のはねの夥しく上つてゐるのをかれは見た。

『えらい處ね。それに車がないんですもの。』

『迎へに行く處だつたのに……』

『それに、こんなに遠いとは思はなかつたんですもの。』

かの女のわけて来たところは、草藪が深く繁り、路といふ路もなく、名も知らない黄い紫の花などの咲いてゐる處だつた。別荘の周囲には白い卵の花が靜かに一面に見わたされてゐた。かの女にはかれが何故にさうした山の中に一人埋れてゐるか、わからなかつた。

その山の上では、哲太は辛さに孤獨の苦難を行した。かれは薪水の勞も自らし、終日机に面して勞働し、夜は疲れてひとり蒲團にくるまつて寝た。それは Dual の所謂沈黙と勞働とに近い生活で、村の

人達のやつて來ない時は、かれは殆ど全く一言の口も開くことなくして暮した。

しかしその孤獨はかれに種々なものを開いて見せた。始めはそれを辛いさびしいとても人間の堪へ難いものゝやうに思はれたが、またその孤獨の大波はいつかすつかり其身を蔽ひつくして却て自己を埋没して了ふやうに思はれたが、日を経るにつれて、世間とかれとの交渉、または差別と平等との相違、ひろい空間に獨り存在してゐるものゝ不動不壞の力、さうしたものゝ次第にかれの前にあらはれて來るのを感じた。自己ばかりになつたといふ心は、またはすべての現象を眼中に置かないといふ心は、實は自己が自然大になり、または却て總ての現象を現象とした形であるといふことに考へ及んだ時には、かれは不思議な氣がした。今まで夢にも知らなかつた心の境が突如としてかれの前に展けて來たやうな氣がした。

着くべからざるものに着き、染まるべからざるものに染まつたといふ反省的な考慮の淺かつたことに思ひついた時には、かれは却て着くべきものに思ひ切り深く着き得なかつた卑怯と小膽、または染まるべきものに徹底的に染まり得なかつた躊躇と逡巡とを發見した。そしてその卑怯と小膽、躊躇と逡巡とは果して那邊より來たか。那邊よりその種子を齎し來つたか。曰く、世間から、虚榮から、または自己が他に蔽はれた形から、欲する心から、求むる心から、中ぶらりんな好い加減なまた勞れた衰へた心の状態から……。

あらゆるものすべて、世にあるものすべて、すべては皆自己から求むべきものではないのであつた。自己は自己である。千億萬のあらゆる種子は皆な自己の中にあるのである。皆な自己から攫み出し捜し出して來るべきものである。自己を除外しては、あらゆるものはすべて皆無いのである。しかも不幸にして、大抵のものはその自己の秘めたる扉を開くべき鍵を何處かに忘れて來て了つてゐる。皆な持つて生れて來てゐるにはゐるのであるけれど、それを用ふことを忘れて了つてゐる。たまさかに、萬に一つ、億兆に一つ、生れながらにしてそれを用ふことを知つてゐるものもないではないが、しかしそれは甚だ稀である。従つて人間はその經て來た經驗乃至思索に由つて、またその遭逢した心の事實に由つてすら、猶その扉を完全に開くものは稀ではなかつたか。その遭逢した貴い心の事實すら、單に他から致された、または餘儀なく邂逅した艱難と言ふ風に解釋して、我と我が扉を閉ぢたまゝにして置くものが多くはなかつたか。

それは何の故に？ 人間の孤獨を知らないがために。山も、川も、野も、鳥も、樹木も、草も、何も皆な完全な孤獨で且つ立派な獨立であることを知らないがために。人間はよく運命といふ二字を口にする。艱難に際しては殊によく感傷的にその二字を口にする。しかしその運命といふものを誰が持つて居るのか。他が持つてゐるのか。われ以外に他に大きな力があつてそれを持つてゐるのか。否、否、否、皆なそれは自己の秘めたる扉の中にかくされてゐるのである。かう思つた時には、哲太は紛糾錯雜した

自分の心がある深い一種の暗示を得たやうな氣がして思はず自ら躍り上つた。

『狐！ 狐どころか。かの女はこの自分の秘めたる扉をひらくために、立派に役立つて呉れた眞珠の鍵ではなかつたか。聖者に面したS夫人ではなかつたか。』

かう思ふと、かれは深い心の線の微妙に顫動するのを禁めることが出来なかつた。郊外の料理屋の離座敷で、さういふお前の心なら、もうこれで別れても好い、一生逢はないでも好いと感激して言つた心持が、その同じ心持が、更に形を變へて、今一層淨化されてかれの前にはられて來るのを見た。

この心、この淨化された心を以て萬物に對すれば、女に對しても、世間に對しても、乃至は自己に對しても、今までよりは、もつと不動な不壞な心持つてゐることが出来ると思つた時、かれは非常に大切なものを攫んだやうな氣がした。かれは何年にも感じたことのない精神の雀躍を總身に感じた。

深く考へて來ると、あらゆるものすべて、生あるものすべては、如何なるものでも、自己の所有物にすることは絶対に出来ないものである。それは人間同士の間柄ばかりではない。一木一草ですらさうである。生あるものを自分のものにしやうとするには、その生を奪つた後でなければ完全に自己のものにすることは出来ないのである。生物はすべて個々の對立である。如何ともすることの出来ない對立である。雙方の心の一致のために、たまさかに互ひに相把握したと思ふことはあつても、それは單に一時

の現象であつて、決して絶対のものではない。従つて自己の所有物にしたといふことは出来ない。決して出来ない。

一體、把握しやうといふ心が既に不純なのである。我に着してゐるのである。他に染つてゐるのである。従つて種々な欲望や、願ひや、又それについて他を排したり自ら怒つたりする念が起つて來るのである。従つて不動不壊なることが出来ないのである。浮草のやうに動いて移つて行くのである。しかし、その不動不壊が果して何處から根ざして來てゐるか。答へて曰く、動から、壊から、または着したり染つたりする心から根ざして來てゐるのではないか。動、壊、着、染がなければそこまで心が動いて行くことは出来ないのではないか。

しかしこの動、壊、着、染を経過した不動不壊と、また動、壊、着、染を経過しない盲目な無自覺な心とは甚だよく相似てゐる。女を例にして考へて見ても、何うせ何うにもならないと言つて引返して來る心と、生死の愛着を通過して、その上に始めて起つて來た他愛とでは、形は同じでも其實に於て既に全く其色合を異にしてゐる。『さうだ、さう思はなければ、決して本當にかの女を愛してゐるとは言はれない。』かれはかう思ひながら、誰もやつて來ない山の上の草花の亂れ發いた路を朝に夕に散歩した。

しかし、かうは思ひながらも、疑惑は猶盛に起つた。その多い疑惑の中で、一番手剛い反抗の聲を揚げて來たのは、さういふ心が、さういふ他愛が、果して中ぶらりんの妥協乃至あきらめと何れだけの相

違があるかといふことであつた。その疑問に逢着して、かれはまた一日二日費した。

欲する心がない、求むる心がない、それが妥協との相違ではないか。あきらめとの相違ではないか。しかし、欲する心がない、たゞそれだけではまだ物足らなかつた。まだ言ひ足らないやうな氣がした。では、欲する心に捉へられない心か。かう言つてかれは答を待つた。

それは以前に考へたものよりも好いやうではあるが、しかしまだ何か足りないやうな心持がした。かれは一步をすゝめた。欲して欲せざる心、欲せずして欲する心——そこに行つて、かれはまた雀躍した。

男女問題に對する苦痛、世間に對する苦痛、家庭に對する苦痛乃至は更に大きく生死問題に對する苦痛、さうしたものが皆それに連繫して珠のやうになつて考へられて來るのをかれは感じた。

かれは靜かに世の暗黒の中に一人坐つた。また曉近く眼覺めて、黎明の空に黒くつきりとその外廓をあらはしてゐる山の屹立した姿を眺めた。

夕暮近く、散歩から歸つて來て、尖つた別荘の屋根をさびしい松林の中に發見した時には、永劫即刹那といふことをつくづく思つた。それはこれまでも口に出してはよく言つた言葉であつたが、しかもその時ほど深く身に染みて感じたことはなかつた。かれは路傍に咲いてゐる山桔梗の深紫の色をしたのを一本折つて來て、それをビールの空壺に生けて、そして机の上に置いた。女に對するかれの心は、山

寺の經机の上に置いた赤いダリアではもうなかつた。

一生逢はなくとも好いと言つた心、それが即ちかれとかの女の間になつた氣分を醸して來た最初の第一歩であつたことをもかれは考へた。

ある日はかれはそれを廣くかれの經て來た生活、或は思想に捉はれ、或は經驗に捉はれ、または世間に捉はれた生活、つゞいてこの世間に無數に散在されてゐる欲望、要求、染着に満たされた種々の生活の上にあてはめて考へた。かれ自身の生活もさうであつたと同じやうに、世間に無數にある生活も、矢張盲目で、種々のものに捉へられつゝ、もがき、悶え、且つ悲しみ、あるのをかれは見た。あらゆる苦悶は、煩悶は、感傷はすべてさうしたところに最初の根ざしを持つてゐるのである。世間の人が多く世間を對照にして嘆いたり悲しんだりしてゐるのは、單純に世間に捉へられてゐるからである。世間に對して欲する心を抱いてゐるからである。哲太はかつて妻の英子に向つて、『俺は俺だ。何處まで行つても俺は俺だ。乞食になつても、顯位高官になつても、俺としての存在には少しも違ひはない。』とかう激して言つたことがあつたが、その言葉が此頃をりくくかれの胸に思ひ起された。欲する心だになれば、世間などは何うでも好いのである。世間に容れられやうが、また捨てられやうが、そんなことは問題でないのである。不動不壞の法の中に同化して、亡びても亡びず、消えても消えず、無窮に生きて行くことが

出来るのである。これは空想ではない。儼とした事實である。深く染着の底に、老、病、生、死の底に横たはつてゐる事實である。

かれは社會の反抗、乃至自己の反抗に生活した以前の生活をあさはかな生活だと思つた。また、デカダンに突進した生活を慘めな無意味の生活だと思つた。勝者の哲學を説いて、しかも實は勝敗の標準の理由を説かない外國の思想家の生活を不完全不徹底だと思つた。かれに何の權利があり、また何の長所があつて、路傍の貧しき群を貧しき群と見てそれを憐むことが出来るのか。社會の貧、病、老、乏を問題にする前にかれ等は何故に自己を問題にしないのか。思ひあがつた自己は、路傍の賤民にだも及ばざるを知らないのか。

幸福の平等は、世間の人も往々にしてそれを口にする。然らば、何故に更に一步を進めて、衣、食、住、すべき平等であるといふ風に考へて來ないのか。美衣を着けたものと、襤褸を纏つたものゝ差は、それは單に美衣であり襤褸であるだけの差ではないか。その證據には、欲するまゝに美衣を得ることの出来る人にとつては、美衣ではなくつてゐるではないか。また大きな瀟洒な邸宅は、大きな瀟洒な邸宅ではなくなつてゐるではないか。食もまた然りである。多く獲ない中こそ、美食を欲すれ、美酒を欲すれ、一度それを得て、十分に攝取することが出来れば、美食は美食にあらず、美酒は美酒でなくなつて來るではないか。富貴功名もまた然りである。巨萬の富をかさね、世間を擧げてかれを尊敬し、その寫

眞像は萬人皆なこれを知るといふやうになつたならば、恐らくはその人は却て尋常平凡の人となることを望まずにゐるだらうか。

この平等は何處から来る？ 心から、異常の心理から、染、着、懊惱、苦悶の中から……。

哲太は此頃になつて、始めて基督が人間のために十字架を後に負ひ、世尊が衆生のために苦行を敢てしたといふことのまことの意義のヒシ／＼と胸に反響して來るのを覺えた。世間を擧げて、すべて多くは皆染着である。盲目である。對世間である。また染着、盲目、對世間から根ざして來る懊惱と悲哀と嘆聲とに世間は満たされてゐる。底には各自皆なその平等の眞珠を藏して居るのであるけれども、多くはさうしたものは觸れて見やうとも思はずにゐる。戀に悩むものも、唯、悩むことを知つて、その悩みがかれをその眞珠につれて行く道程であることを知らない。かう考へて來たかれは、かれの苦惱は、矢張多くの人達の爲めに悩み且苦んだ苦行の一つであるといふ風に考へられて來た。戀に苦しむ無数の人達に共鳴する心は、聖者が世間のために十字架を後に負つた心と相似、且相近づいてゐるのではないか。重きを置くべきことに重きを置かずに、何うでも好いことに全精神を打込んでゐたのである。底深くかくされてゐる眞髓は放つて置いて、その外面にあらはれたものにはばかり夢中になつてゐたのである。雲となり霧となり雨雪となるものにはばかり心を注いで、その底にある空には少しも氣がつかかなかつたのである。そしてその心の外面が遂にその眞髓をも蝕ばんで行くことに氣附かなかつた。

かれは餘りに小さい零細なことが世間に多いのを思はずにはゐられなかつた。またその小さい零細なことに捉はれてゐるものゝ多いのを慨かすにはゐられなかつた。何のための感傷、何のための悲嘆、また何のための恐怖？ 妻の英子が孤獨のために苦しむとならば、その孤獨はかの女の本當の道に達する行程として寧ろ喜ぶべきことではないか。他に愛するものが出來たといふならば、それも亦かの女の一生の行程の一事實として是認すべきものではないか。また、女にしても、夫を持つべきならば、それが却てかれに對してまことの價値を示す所以ではないか。

かれは女に深く染着した時に、因果應報の理のやうなものに突當つたことを思ひ起した。また何うにもならないものを何うかしやうとする心理を何の故かと疑ひ感つたことを思ひ起した。また一つの心が他へ、その心がまた他へ移つて行く形に苦しんだことを思ひ起した。考へても考へても盡くるところを知らない心ではないか。

しかし、それも止むを得ないことであつた。何故なら、人間は人間の一生を盡して了はなければ、人間のことは完全にはわからぬやうに出來てゐるものであるから……。またこれから先の心の Sturm und Drang を通過しなければ、哲太自身にしてもそれはわからぬ筈であるから……。

兎に角、着いたがために起つた感傷であり、煩悶であり、嘆聲であることは確かである。また欲する心に捉へられたが爲に起つて來た不満、不平、不如意であることも確かである。かれは徒らに精神を浪